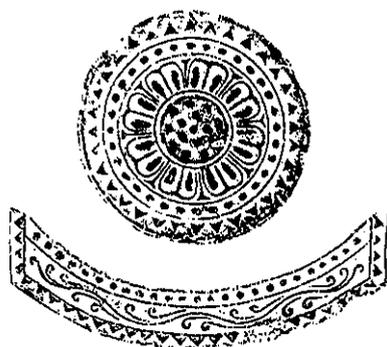


# 大宰府史跡発掘調査報告書 V

平成18・19年度



2008

九州歴史資料館

# 大宰府史跡発掘調査報告書 V

平成18・19年度

2008

九州歴史資料館



(1)第136-2次調査  
S X 2318とS X 3937  
(南から)



(2)第136-2次調査  
S X 3937 (北から)



大野城跡第46次（北石垣C区）出土 軸受金具

## 序

本書は、大宰府史跡第7次5ヶ年計画第5年次、及び、第8次5ヶ年計画初年次の計画調査として、平成18年度から19年度に実施した大宰府史跡発掘調査についての報告書です。また、これらの調査と並行して、『観世音寺－伽藍編－』・『観世音寺－寺域編－』に引き続き、平成18年度に『観世音寺－遺物編1・2－』、及び、『観世音寺－考察編－』を、平成19年10月には『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅳ』を刊行しました。

本書に収録した調査成果のうち、注目されるのは、政庁前面の不丁地区で実施した大宰府史跡第86-2次調査、及び、第136-2次調査の折に、第Ⅱ期政庁建設に際し、政庁前面の谷を埋めて造成した整地層の下に検出した筏状遺構と敷粗朶です。第86-2次調査では、先に確認していた暗渠施設は整地層下層の粘土層を掘り込んで造られ、粘土層の下に樹木の枝や葉を敷いていました。東に隣接する第136-2次調査でも、整地層下層の粘土層の下において樹木の枝を筏状に組み、周囲には密に敷かれた木の枝や葉を検出しました。敷粗朶は水城跡において御笠川流域の軟弱な地盤を強化する土木技法として採用されていますが、政庁周辺の造成に際しても、谷筋の地盤を強化し整地層の沈下を防ぐ目的で採用されていることが判明し、大宰府政庁を中心とした諸施設の建設に先立つ土木事業の内容を知る上で非常に重要な成果を得ました。

最後に、発掘調査にあたりましては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁、大宰府市教育委員会、大野城市教育委員会、さらに地元の関係者各位から多大な御指導と御協力を頂きました。記して、深く感謝致します。

平成20年3月31日

九州歴史資料館長 森山 良一

## 例 言

- 1 本書は、平成18年度および19年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館において実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書であり、大宰府史跡発掘調査報告書の第5集にあたる。
- 2 本書には、大楠地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第196次調査・第92-3次調査、不丁地区の緊急調査として実施した第86-2次調査、五反田地区の緊急調査として実施した第198次調査、松ヶ浦地区の確認調査として実施した第199次調査、大野城跡・大願寺境内の立会調査を掲載している。

また、不丁地区の緊急調査として平成17年度に実施した第136-2次調査、松ヶ浦地区の確認調査として平成5年度に実施した第150次調査、平成6年度に実施した第158次調査、さらに平成18年度に大野城跡北石垣地区において行われた大野城跡第46次調査で出土した鉄製扉軸受金具の理化学的調査と第136-2次調査出土木材の樹種同定の報告も併せて行うこととする。

また、水城跡第39次補足調査、第40次調査、第44次調査については、水城跡正式報告書の刊行を近年中に予定しているため、そちらに掲載することとする。
- 3 発掘調査については、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 4 本書に掲載した遺構図は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づいて作成している。
- 5 本書に掲載した遺構実測図は、調査課児玉真一・小田和利（平成5年当時）・小川泰樹（平成6年当時）・杉原敏之・岡寺良・坂本真一と福岡県教育庁総務部文化財保護課小澤佳崧、大宰府市教育委員会城戸康利・下高大輔が作成した。
- 6 出土遺物の実測、本書掲載図の製図作業は、上記調査課員の他に、学芸第一課酒井芳司、高田いく子、大宰府市教育委員会下高と木戸雅美が担当した。出土遺物の整理・復原作業は、発掘調査事務所において大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝が行った。
- 7 本書に掲載した写真の内、遺構は石丸洋および各調査担当者が、遺物については福岡県教育庁文化財保護課北岡伸一、分析資料については（株）九州テクノロジーが撮影した。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I		児玉	
II	1	第136-2次調査	杉原
	2	第196次調査	岡寺

- 3 第197次調査 坂本
  - 4 第86-2次調査 坂本
  - 5 第92-3次調査 坂本
  - 6 第198次調査 岡寺
  - 7 松ヶ浦地区の調査
    - (1) 調査経過と報告内容 岡寺
    - (2) 第150次調査 岡寺
    - (3) 第158次調査 岡寺
    - (4) 第199次調査 下高
  - 8 第136-2次調査樹種同定 杉山信二 ((株)古環境研究所)
  - Ⅲ 1 大願寺境内の立会調査 下高
  - 2 大野城跡第46次調査理化学的調査
    - (1) 小澤
    - (2) 小澤
    - (3) 小澤
    - (4) 大澤正己  
(愛媛大学古代鉄文化研究センター客員研究員)
  - Ⅳ 児玉 (青銅製品)  
酒井 (木筒)  
岡寺 (経緯・瓦)
  - Ⅴ 岡寺
- 9 本書の編集は、杉原が担当した。

# 本文目次

	頁
I 序 言	1
1 調査計画と組織	1
(1) 調査計画	1
(2) 調査組織	3
2 調査の経過と概要	4
(1) 平成18年度	4
(2) 平成19年度	5
II 大宰府跡の調査	9
1 第136-2次調査（不丁地区の緊急調査）	9
(1) 調査概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 検出遺構	12
(4) 出土遺物	17
(5) 小 結	23
2 第196次調査（大楠地区の緊急調査）	26
(1) 調査概要	26
(2) 基本層序	26
(3) 検出遺構	26
(4) 出土遺物	28
(5) 小 結	30
3 第197次調査（日吉地区の緊急調査）	31
(1) 調査概要	31
(2) 基本層序	31
(3) 小 結	31
4 第86-2次調査（不丁地区の緊急調査）	32
(1) 調査概要	32
(2) 基本層序	33
(3) 検出遺構	33
(4) 出土遺物	35
(5) 小 結	35
5 第92-3次調査（大楠地区の緊急調査）	36
(1) 調査概要	36
(2) 基本層序	36
(3) 検出遺構	36

(4) 出土遺物 .....	38
(5) 小 結 .....	42
6 第198次調査(五反田地区の緊急調査) .....	44
(1) 調査概要 .....	44
(2) トレンチ設定と基本層序 .....	44
(3) 出土遺物 .....	45
(4) 小 結 .....	45
7 政庁域後背官衙・松ヶ浦地区の調査 .....	47
(1) 調査経過と報告内容 .....	47
(2) 第150次調査 .....	48
(3) 第158次調査 .....	50
(4) 第199次調査 .....	52
(5) まとめ .....	54
8 第136-2次調査の筏状遺構S X 3937部材の樹種同定 .....	55
III 大野城跡の調査 .....	61
1 大願寺境内の立会調査 .....	61
(1) 調査概要 .....	61
(2) 基本層序 .....	61
(3) 表採遺物 .....	63
(4) 周辺の地表面観察調査の成果 .....	63
(5) 小 結 .....	65
2 大野城跡第46次調査(北石垣地区)C区域門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査 .....	66
(1) はじめに .....	66
(2) 調査概要 .....	66
(3) 出土遺物の概要 .....	67
(4) 軸受金具の理化学的分析 .....	70
IV 観世音寺出土資料の追補 .....	80
V 松ヶ浦池周辺表採資料 .....	82

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000) .....	折込
Fig. 2 第136-2次調査遺構配置図 (1/100) .....	10
Fig. 3 第136-2次調査土層図 (1/60) .....	11
Fig. 4 柵S A 4635・4640実測図 (1/60) .....	12
Fig. 5 土坑S K 4636~4639実測図 (1/40) .....	13
Fig. 6 筏状遺構S X 3937実測図 (1/30) .....	15

Fig. 7	筏状遺構 S X3937下部実測図 (1/30) .....	16
Fig. 8	第136-2次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3) .....	18
Fig. 9	第136-2次調査出土軒平瓦拓影 (1/4) .....	19
Fig.10	第136-2次調査出土石製品・鉄製品実測図 (1/2・2/3) .....	19
Fig.11	S X3937部材実測図 (1) (1/4) .....	20
Fig.12	S X3937部材実測図 (2) (1/4) .....	21
Fig.13	S X3937下層敷粗朶・腐植土木材実測図 (1/4) .....	22
Fig.14	政庁域前面広場 S H2500遺構配置図 (1/300) .....	24
Fig.15	第196次調査遺構配置図・土層図 (1/80) .....	折込
Fig.16	柵 S A2564実測図 (1/80) .....	27
Fig.17	第196次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3) .....	28
Fig.18	第196次調査出土瓦・鉄製品・製塩土器等実測図 (1/3・1/4) .....	30
Fig.19	第197次調査トレンチ配置図 (1/300) .....	31
Fig.20	第197次調査土層模式図 .....	31
Fig.21	第86-2次調査遺構配置図 (1/120) .....	32
Fig.22	第86-2次調査土層略図 .....	33
Fig.23	竪穴住居 S I 2491実測図 (1/30・1/60) .....	34
Fig.24	3トレンチ (S X2319・2320) 実測図 (1/60) .....	34
Fig.25	第86-2次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3) .....	35
Fig.26	第92-3次調査遺構配置図・土層図 (1/120) .....	37
Fig.27	柵 S A4652・4654実測図 (1/40) .....	38
Fig.28	第92-3次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3) .....	39
Fig.29	第92-3次調査出土瓦・硯・鉄製品等実測図 (1/2・1/3・1/4) .....	41
Fig.30	第92次調査主要遺構配置図 (1/400) .....	43
Fig.31	第198次調査トレンチ略配置図 (1/200) .....	44
Fig.32	第198次調査土層模式図 .....	45
Fig.33	灰色砂層出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	46
Fig.34	松ヶ浦地区調査地位置図 (1/5,000) .....	47
Fig.35	第150次調査遺構配置図・土層図 (1/60) .....	48
Fig.36	暗褐色土層出土遺物拓影・実測図 (1/3) .....	49
Fig.37	第158次調査土層図 (1/60) .....	51
Fig.38	第199次調査区位置図 (1/1,000) .....	53
Fig.39	第199-1次調査土層模式図 (約1/40) .....	53
Fig.40	第136-2次調査の筏状遺構 S X3937部材の木材 .....	59
Fig.41	調査位置図 (1/10,000 大宰府史跡平面図1/5,000に岡寺2006掲載図を 挿入・加筆) .....	61
Fig.42	大願寺周辺図 (2007年9月11・13日踏査 大宰府史跡平面図1/10,000に 岡寺2006掲載図を挿入・加筆) .....	62

Fig.43	大願寺周辺表採遺物実測図 (1/3) .....	63
Fig.44	旧地形への横嶽崇福寺伽藍推定図 (註5文献より転載・加筆) .....	64
Fig.45	城門検出状況 (北から) .....	67
Fig.46	トレンチ掘削状況 (上が南) .....	67
Fig.47	北石垣城門実測図 (1/60・1/30), 出土軸受金具実測図 (1/3) .....	68
Fig.48	3トレンチ東壁石垣・土層 (西から) .....	69
Fig.49	軸受金具の出土状況 (上が北) .....	69
Fig.50	軸受金具出土状況 (上が北) .....	69
Fig.51	軸受金具の取り上げ後 (上が北) .....	69
Fig.52	軸受金具側面観 (左から, 北面・東面・南面・西面) .....	70
Fig.53	軸受金具上面観 (左), 底面観 (右) いずれも上が北面 .....	70
Fig.54	韓国三年山城出土軸受金具 (충원문화재연구원2004より転載) .....	70
Fig.55	化学分析提供の資料 .....	71
Fig.56	顕微鏡組織写真 .....	74
Fig.57	鉄中非金属介在物のEPMA調査 (その1) .....	75
Fig.58	鉄中非金属介在物のEPMA調査 (その2) .....	76
Fig.59	出土軸受金具の金属組織から見た想定溶解温度 .....	77
Fig.60	観世音寺出土遺物拓影・実測図 (1/2・1/3・1/4) .....	81
Fig.61	松ヶ浦池周辺表採資料実測図 (1/3) .....	82

## 表 目 次

	頁	
Tab.1	調査計画表 (平成18年度) .....	1
Tab.2	調査計画表 (平成19年度) .....	2
Tab.3	大宰府史跡調査研究指導委員会名簿 (平成18・19年度) .....	4
Tab.4	大宰府史跡発掘調査実施表 .....	7
Tab.5	大宰府史跡現状変更申請対応状況表 .....	7
Tab.6	第136-2次調査の筏状遺構S X 3937部材の樹種同定結果 .....	57
Tab.7	供試材の履歴と調査項目 .....	72
Tab.8	供試材の組成 .....	77
Tab.9	出土遺物の調査結果のまとめ .....	78

## 図 版 目 次

巻頭図版1	(1)第136-2次調査 S X 2318とS X 3937 (南から)
	(2)第136-2次調査 S X 3937 (北から)
巻頭図版2	大野城跡第46次 (北石垣C区) 出土 軸受金具

- PL. 1 (1) 第81次調査区と第136-2次調査区遠景 (北から)  
 (2) 第136次調査区全景 (西から) (3) 第136-2次調査区全景 (西から)
- PL. 2 (1) 第136-2次調査区東半 (西から) (2) 第136-2次調査区西半 (南から)  
 (3) 調査区土層 (西から)
- PL. 3 (1) S X 2318整地層 1 (西から) (2) S X 2318整地層 2 (南から)  
 (3) S X 2318整地層 3 (西から)
- PL. 4 (1) S A 4635 (東から) (2) S A 4635と S X 3937 (東から)  
 (3) S A 4635柱穴
- PL. 5 (1) S K 4636 (南から) (2) S K 4637 (西から)  
 (3) S K 4638 (南から) (4) S K 4639 (西から)
- PL. 6 (1) S X 3937 (南から) (2) S X 3937 (西から)  
 (3) S X 3937縦木 (南から)
- PL. 7 (1) S X 3937縦木 (西から) (2) S X 3937下層 (南から)  
 (3) S X 3937下層 (西から)
- PL. 8 (1) S X 3937横木と S X 2318整地層 (西から)  
 (2) S X 3937横木 1 (西から) (3) S X 3937横木 2 (西から)
- PL. 9 (1) S X 3937杭 1 (南から) (2) S X 3937杭 2 (南から)  
 (3) S X 3937杭 3 (東から)
- PL.10 (1) S X 3937敷粗朶 (南から) (2) S X 3937敷粗朶 (西から)  
 (3) S X 3938上面 (南から)
- PL.11 第196次調査  
 (1) Aトレンチ全景 (西から) (2) Bトレンチ全景 (東から)  
 (3) C・Dトレンチ全景 (北から) (4) C・Dトレンチ全景 (南から)
- PL.12 (1) Dトレンチ西壁土層 (北東から) (2) Bトレンチ S X 4646土層断面 (南から)  
 (3) S X 4646木片出土状況 (南東から)  
 (4) S D 2581 (左) ・ 2582 (右) (第88次調査 東から)
- PL.13 (1) 第197次調査地 (西から) (2) 1トレンチ (北東から)  
 (3) 2トレンチ (南西から)
- PL.14 (1) 第86次調査区全景 (北から 昭和58年度) (2) 第86-2次調査区 (南東から)  
 (3) S D 4649・4651 (南から)
- PL.15 (1) S I 2491 (第86次調査 南から)  
 (2) S I 2491 (第86-2次調査 南から)  
 (3) S I 2491カマド出土土器 (東から)
- PL.16 (1) 3トレンチ全景 (左) (西から) (2) 3トレンチ土層 (右) (南西から)  
 (3) 3トレンチ腐植土層 (南西から) (4) 3トレンチ腐植土層 (南から)
- PL.17 (1) 3トレンチ全景 (第86次調査 西から) (2) S X 2320 (第86次調査 西から)  
 (3) 3トレンチ土層 (第86次調査 南から)
- PL.18 (1) S X 2320全景 (第81次調査 南から)

- (2) S X2320 (第81次調査 北から) (3) S X2320 (第81次調査 南から)  
(4) S X2320下部敷粗朶 (第81次調査 南から)
- PL.19 (1) 第92次調査区南半部 (南上空から) (2) 第92次調査区北半部 (南上空から)
- PL.20 (1) 第92-3次調査区全景 (東から) (2) 第92-3次調査区西側 (北から)
- PL.21 (1) 西壁土層 (北東から) (2) 南壁土層 (北西から)  
(3) 南壁土層 (北東から)
- PL.22 (1) S A4652・4654 (西から) (2) S D4653 (北から)  
(3) S D4655 (南東から)
- PL.23 第198次調査  
(1) Aトレンチ (東から) (2) Bトレンチ (南から)
- PL.24 (1) 松ヶ浦地区の位置 (南上空から) (2) 第150次調査区全景 (北から)  
(3) 第158次調査土層断面 (北から)
- PL.25 (1) 第199-1次調査区全景 (西から) (2) 調査区南壁土層 (北から)  
(3) 石出土状況 (西から)
- PL.26 大野城跡大願寺境内の立会調査 (1)  
(1) 造成対象地全景 (北から) (2) 水路西壁掘削状況 (北から)  
(3) 東側掘削部分土層観察 (南東から)
- PL.27 大野城跡大願寺境内の立会調査 (2)  
(1) 北西側掘削部分土層観察 (南東から) (2) 境内入口掘削部分土層観察 (南西から)  
(3) 造成対象地西隣尾根植生状況 (北東から)
- PL.28 (1) 第136-2次調査出土土器・陶磁器・石製品・鉄滓  
(2) 第136-2次調査S X3937部材 (枕木)
- PL.29 (1) 第136-2次調査S X3937部材 (杭)  
(2) 第136-2次調査S X3937下位敷粗朶材・腐植土木片
- PL.30 第196次調査出土遺物
- PL.31 (1) 第86-2次調査出土遺物 (2) 第92-3次調査S A4652出土土器  
(3) 第92-3次調査暗褐色整地層出土土器 (1)
- PL.32 第92-3次調査暗褐色整地層等出土土器・陶磁器 (2)
- PL.33 第92-3次調査出土瓦・硯・鉄製品等
- PL.34 (1) 第198次調査出土遺物 (2) 第150次調査出土遺物
- PL.35 観世音寺出土遺物
- PL.36 松ヶ浦池周辺表採遺物

## 凡 例

- 1 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。  
SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SH：広場，SI：竪穴住居，SK：土坑，  
SX：その他の遺構
- 2 掲載図面中，土器の断面を黒塗りにしたものは，須恵器であることを示す。
- 3 土師器・陶磁器・瓦等の報告においては，以下の文献の型式分類・名称等に準じている。
  - ・土 師 器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』
  - ・黒色土器：田中 琢1967「古代・中世における手工業生産の発達（4）畿内」『日本の考古学』IV
  - ・陶 磁 器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
  - ・古 代 瓦：九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』  
高橋章2007「『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』の追加資料について」『観世音寺一遺物編2一』九州歴史資料館
  - ・製塩土器：小田和利1996「製塩土器から見た律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21 九州歴史資料館
  - ・鑄造・鍛冶関連遺物：九州歴史資料館2007『観世音寺一遺物編2一』
  - ・滑石製石鍋：杉原敏之2007「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺一考察編一』九州歴史資料館

# I 序 言

## 1 調査計画と組織

### (1) 調査計画

平成18年度は、大宰府史跡第7次5ヶ年計画（以下、「第7次5ヶ年計画」等と言う。）の第5年次にあたり、これに基づき、水城跡第39次補足調査を実施した。また、政庁域前面地区における緊急調査は、大宰府史跡第196次調査、第197次調査、第86-2次調査の計3件について実施した。年度末には、『観世音寺－遺物編1・2－』、及び、『観世音寺－考察編－』を刊行し、3ヶ年に及んだ観世音寺の本報告書作成業務を終了した。これに伴い、晩秋に、九州歴史資料館と観世音寺境内を会場として特別展「観世音寺」、シンポジウム「府の大寺・観世音寺の創建を探る」を開催し、シンポジウムには500余名の参加を得た。

特別展「観世音寺」

大宰府史跡調査研究指導委員会は、10月19日(木)・20日(金)に開催した。初日は、平成17・18年度の発掘調査結果や大野城跡災害復旧事業の進捗状況、大宰府史跡に関連する遺跡として筑紫野市宮地岳古代山城について報告を行い、調査現場を視察した。平成19年度から始まる第8次5ヶ年計画以降の本報告書作成に際し、確認調査を必要とする調査計画予定地、水城跡第39次補足調査現場を視察し貴重な指導、助言を頂いた。

平成18年度指導委員会

二日目は、大宰府史跡の調査研究、及び、大野城跡災害復旧事業等について審議を御願いした。大宰府史跡の調査研究に関しては、水城跡第39次調査の成果を素材に、外濠の構造、御笠川を含めて水源からの取水や導水の方法、改修を含めた維持・管理等について貴重な意見を頂いた。引き続き、第8次5ヶ年計画以降に本報告書刊行を予定する政庁域前面地区（不丁地区・日吉地区・大楠地区・広丸地区の4地区）について、各地区の評価を行い、今後の調査における重要課題として「日吉地区の東限とその東側の様相の確認」を掲げて御審議頂いた。これを受けて、翌平成19年度から始まる第8次計画5ヶ年計画における、水城跡・政庁域官衙前面地区の調査、報告書作成計画案について概ね了承を得た。また、大野城跡の災害復旧事業の復旧方針や手法について貴重な指導・助言を頂いた。

第8次5ヶ年計画

なお、平成18年度の発掘調査計画は、Tab.1のとおりである。

Tab.1 調査計画表（平成18年度）

区 分	場 所	所 在 地	面積(m <sup>2</sup> )	備 考
政庁域周辺官衙跡	広丸地区官衙跡	太宰府市観世音寺2丁目13番他	200	緊急調査
水城跡	欠堤部西土塁・外濠	大野城市下大利3丁目13他	300	計画調査
水城跡	西門東側木樋吐水部	大野城市下大利4丁目2-2他	200	計画調査

平成19年度は、第8次5ヶ年計画の初年次にあたり、これに基づき、計画調査として水城跡第40・44次調査を、緊急調査として大宰府史跡第92-3次調査、第198次調査を実施した。また、10月に『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅳ 平成16・17年度』を刊行した。

平成19年度指導委員会

大宰府史跡調査研究指導委員会は10月18日(木)・19日(金)に開催した。初日は、水城跡第39次補足調査や政庁域官衙前面地区の緊急調査、大野城跡災害復旧事業、太宰府市による大宰府条坊跡第236・257次調査、及び、久留米市筑後国府跡第210次調査について報告を行っ

## I 序 言

た。御笠川西岸の水城跡第39次補足調査で検出した外濠は土塁基底部から博多湾側に向かい緩やかに傾斜し、概ね35～50m付近が急に2.5m程深くなる溝状遺構の他に、土塁と併行して走る3条の小規模な溝が存在する。一方、御笠川東岸の第5次調査で検出した外濠は、幅約60m、深さ約4～5mのもので、御笠川を挟み東西の外濠の構造が異なっている。この点を中心に質疑・応答を行った。調査現場の視察は、大野城跡小石垣地区、次いで、水城跡第40次調査現場を視察し、貴重な指導、助言を得た。

二日目は、水城跡、政庁域周辺官衙来木地区の既往の調査研究成果や第8次5ヶ年計画における大宰府史跡の調査研究、大野城跡と水城跡を中心とする史跡整備、筑前国分寺跡と来木地区の史跡追加指定についての協議を行い、その後、「新九州歴史資料館」建設の進捗状況について説明を行った。

水城跡については、第40次調査が木樋吐水口の検出とその周辺の状況の解明を目的としていることから、昭和5年に調査された木樋の取水口・吐水口の構造とともに、水の処理にまつわる問題について、堰を含め水城の全体構造に及ぶ議論がなされ、貴重な助言を頂いた。

来木地区については、大宰府史跡では木簡が初めて出土した葦司地区西側の谷を含めて来木丘陵の既往の発掘調査を総括した。丘陵の緩斜面における7世紀末～8世紀代の金属生産工房とそれにかかわる倉庫の存在から、来木地区は「匠司」の可能性が強いと考えられ、また、10世紀を中心に大宰府に瓦を供給した瓦窯も存在することから、この地区の史跡追加指定の動きと連動させた、範囲の確認や葦司との関係等を含む更なる確認調査の実施が課題となった。

### 第8次5ヶ 年 計 画

平成19年度を初年次とする第8次5ヶ年計画は、これまでの計画と同様に大宰府史跡の基礎研究を進める上での年次計画であり、報告書刊行計画とそれに付随する調査計画とからなる。まず、計画調査を継続している水城跡について木樋とその周辺の状況の確認、及び、御笠川西岸の内濠の状況の確認を行って水城跡の調査計画をひとまず終了し、平成20年度に報告書「水城跡」を刊行する。二つ目は、政庁域周辺官衙跡の本報告書作成とそれに伴う調査計画である。県道南側の個人住宅が建て込む政庁域前面地区は、住宅の新改築に伴う確認調査により対応する。県道北側の月山東地区・葦司地区・来木地区は報告書作成に合わせて未解明な部分の調査計画を立案し、官衙諸施設の範囲・規模・構造などの解明を目的とした確認調査を実施する。平成22年度に計画する不丁地区の本報告書刊行を皮切りに、順次、政庁域周辺官衙跡の報告書と年度報告書の刊行をすることとした。この計画立案の契機となったのは、本書に報告する大宰府史跡第136-2次調査（政庁前面広場）における、記録保存調査である。これまで、政庁域周辺官衙の史跡未指定地区の調査は、遺構の地下保全を原則とした確認調査を実施してきたが、今回、柵列等の遺構の一部を保全するにとどまった。このような状況に対して、史跡として未指定地区である政庁域官衙前面地区の学術的な価値付けをし、それを基に、地下遺構の保全対策の策定等を目的としたものである。

Tab.2 調査計画表（平成19年度）

区 分	場 所	所 在 地	面積(m <sup>2</sup> )	備 考
政庁域周辺官衙跡	不丁地区官衙跡	太宰府市観世音寺2丁目24・25番	200	緊急調査
水城跡	西門東側木樋吐水部	大野城市下大利4丁目2-2他	200	計画調査
水城跡	西門東側内濠	太宰府市大字吉松	250	計画調査
水城跡	欠堤部内濠	太宰府市大字吉松110-1他	200	計画調査

史跡整備関係では、大野城跡の災害復旧の手法や今後の災害への備え、水城跡の今後の整備計画では、道路や鉄道で分断された水城を見学する導線、欠堤部周辺の土地の公有化、東門第二広場の整備の際の博多湾側の濠幅60mラインの表示等について貴重な助言を得た。

なお、平成19年度の発掘調査計画は、Tab.2のとおりである。

## (2) 調査組織

調査の主体は九州歴史資料館であり、発掘調査、及び、報告書作成は調査課が担当した。その組織は、以下のとおりである。

		平成18年度	平成19年度
総括	館長	森山 良一	森山 良一
	副館長	木下 修	木下 修
	参事	児玉 真一	児玉 真一
		馬田 弘稔	馬田 弘稔
		中間 研志	中間 研志
庶務・会計			
(総務課)	課長	浅野 健二	浅野 健二
	副長	堀内 喜智	梅野 研治
	事務主査		野中 顯
	主任主事	白谷 有三	
	主任技能員	井上美智子	
	技能員	松本 優	松本 優
調査			
(学芸第一課)	課長	中間 研志 (兼任)	中間 研志 (兼任)
	参事補佐	石山 勲	
	事務主査		釜瀬進一郎
	主任技師	井形 進	井形 進
(学芸第二課)	課長	馬田 弘稔 (兼任)	馬田 弘稔 (兼任)
	参事補佐	橋口 達也	
	主任技師	加藤 和歳	加藤 和歳
(調査課)	課長	児玉 真一 (兼任)	児玉 真一 (兼任)
	参事補佐	石丸 洋	
	技術主査	杉原 敏之	杉原 敏之
	主任技師	岡寺 良	岡寺 良
		坂本 真一	坂本 真一

なお、大宰府史跡の調査研究、及び、整備活用を進めるにあたっては、「大宰府史跡調査研究指導委員会」に諮り、適切な指導、助言を受けて取り組んでいる。大宰府史跡は、大宰府政

## I 序言

Tab.3 大宰府史跡調査研究指導委員会名簿(平成18・19年度)

役職	氏名	職業	専門分野
委員長	笹山晴生	東京大学名誉教授	歴史学
副委員長	小田富士雄	福岡大学名誉教授	考古学
委員	八木充	山口大学名誉教授	歴史学
	狩野久	元岡山大学教授	歴史学
	佐藤信	東京大学大学院教授	歴史学
	坂上康俊	九州大学大学院教授	歴史学
	西谷正	九州大学名誉教授	考古学
	川辺征夫	(独法)奈良文化財研究所長	考古学
	山中章	三重大学教授	考古学
	鈴木嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	澤村仁	九州芸術工科大学名誉教授	建築史学
	中村一	京都大学名誉教授	造園学
	杉本正美	九州芸術工科大学名誉教授	造園学
	渡辺定夫	東京大学名誉教授	都市工学
林重徳	佐賀大学低平地研究センター教授	土木工学	

庁や政庁域周辺官衙の施設、大野城・水城などの防衛施設、観世音寺およびその子院・筑前国分寺などの寺院関係施設等を包括し、その規模、内容、性格は広く深いものである。これらの調査研究、及び、整備活用を適切に行うためには、幅広い視野から総合的に対処する必要があるため、大宰府史跡調査研究指導委員会は歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学・土木工学の専門家により構成し、その指導のもとに策定した5ヶ年計画に基づき進めている。大

宰府史跡調査研究指導委員会の構成はTab.3のとおりである。

## 2 調査の経過と概要

### (1) 平成18年度

平成18年度の調査計画は、水城跡第39次調査を継続し、外濠の構造、及び、外濠と御笠川との関係を確認する第39次補足調査、水城西門跡東側の木樋吐水口とその周辺の状況を確認する第40次調査、及び、政庁域前面地区の緊急調査に随時対応することであった。第39次補足調査は広範囲に及び通年行うこととなったため、第40次調査は翌年度に持ち越した。政庁域前面地区では、第196次調査、第197次調査、第86-2次調査の3件の確認調査を行った。

#### 水城跡第39次補足調査

水城跡第39次補足調査は、連休明けの5月18日に開始した。平成17年度のトレンチ調査で、御笠川左岸の土塁の途切れた平坦地の下に、築造当初の土塁基底部の積土層と土塁の修復かと推測される積土を確認していた。外濠では、土塁基底部から約36~50mの範囲に深さ2.5mの溝状遺構が認められ、流水と滞水の痕跡を示す土層を検出した。また、土塁基底部と溝状遺構の間は博多湾側にやや傾斜した「平坦面」であった。昨年度の指導委員会において、狭いトレンチ調査では全体の構造解明に限界があり、更に面的に広げて調査するよう指導を受けた。その指導に従って、昨年度外濠の調査を実施したAトレンチの東(御笠川側)に新たに調査区(B区)を設定し、溝状遺構の東側への広がりとその構造、及び、埋土の状況を確認することとした。また、「平坦面」の御笠川側への面的な広がりを確認するため、B区の南に調査区(E区)を設定した。更に、土塁基底部から外濠の立ち上がりまでを通して土層観察ができるようにAトレンチを南に延長した。B区の調査では、Aトレンチと同様に溝状遺構を検出し、御笠川に向かって延びていることを確認した。埋土は砂層や粘質土が重なり合い流水と滞水を繰り返した状態の厚い堆積層であり、溝底に流木や8世紀代の須恵器や瓦片を検出した。AトレンチとB区間の未掘部分を拡張し溝状遺構を面的に検出したところ、溝底がAトレンチか

## 2 調査の経過と概要

らB区側へ御笠川に向かって次第に下がっていくことを確認した。土塁前面では中世の整地層の下層から、水城築造当初の可能性が高いと思われる土塁基底部に併行して走る溝を検出した。E区では、土塁前面の「平坦面」が東側（御笠川）に向かって落ちる傾斜面を検出し、「平坦面」の東限を部分的に確認した。かつて、1975年の御笠川東側の第5次調査では、博多湾側に土塁基底部から幅60m深さ4.5mの外濠を確認していた。しかし、今回の調査では、外濠は土塁基底部から博多湾側へ緩やかに傾斜し、基底部から36m～50m付近に深さ2.5m溝状遺構があり、他に、土塁基底部前面、基底部から50m付近、60m付近に3条の溝を確認している。局所的な調査結果ではあるが、御笠川を挟み東西では、外濠の構造に相違が認められることが判明した。

第196次調査（大楠地区）の住宅建設に伴う確認調査を6月6日～8日にかけて実施した。調査地は、大楠地区南端部に位置する第88次調査地の北西隣接地で、当時の調査で8世紀後半～10世紀代の掘立柱建物10棟、柵1条、溝7条、井戸11基などが確認されていた。今回の調査では、第88次調査で確認した溝S D2582の続きの溝1条の他、既往の調査では確認されていなかった9～10世紀代の土器を多量に含む溝状遺構S X4646を検出した。この溝は大楠地区の区画を考えるうえで重要な遺構となろう。

第196次調査

第197次調査（政庁前面広場）の住宅建設に伴う確認調査を12月14日に実施した。旧地形や第136-2次調査結果から、当該地は御笠川の氾濫により遺構が遺存する可能性は薄いと予測のもとにトレンチ調査を行い、表土下には区画整理時の厚さ3mを超える真砂土の客土層があり、整地層すら確認できなかった。

第197次調査

第86-2次調査（政庁前面広場）の住宅建設に伴う確認調査を1月22日～3月9日にかけて実施した。当該地は、昭和58年度に実施した第86次調査地の南半部にあたり、その時の調査で、北接する第81次調査地から続く自然の谷筋S X2319、その底部付近に設置された暗渠施設S X2320等を確認していた。平成17年3月20日に発生した玄界灘西方沖地震の影響で建物の基礎構造の強化が求められ、地下遺構保全への影響が懸念されたので設計事務所とたびたび入念な打ち合わせを行った。今回の調査で、暗渠施設S X2320は、谷筋S X2319の整地層下層の粘質土層を切り込んで造られ、その下層には樹木の小枝や葉を敷き詰めた腐食土層を確認検出した。遺構を検出した時点で設計事務所に設計の見直しをして頂き、地権者の御好意により、遺構は地下に保全することができた。

第86-2次調査

### (2) 平成19年度

平成19年度の調査計画は、水城跡第40次調査、第39次調査地の南側において内濠の構造確認を目的とする第44次調査、政庁域前面地区の緊急調査である大宰府史跡第92-3次調査、同198次調査である。水城跡第44次調査は2月20日に着手しており、年度末までに終了する予定である。

水城跡第40次調査は、水城西門跡の東方100m程の木樋埋設推定地を対象に、木樋吐水口とその周辺の構造の解明、及び、外濠の構造の解明を目的として6月1日に着手し、現在調査中である。調査地付近からJR鹿児島本線水城駅までの間の下成土塁は、鉄道施設建設の際に削平されている。本調査地の土塁を挟んだ南側の第33次調査地では、上成土塁の法下に木樋

水城跡第40次調査

## I 序 言

の掘方と思われる遺構を検出している。まず、木樋吐水口推定地の東に、土塁に直交する南北トレンチを設定し、外濠の構造確認を目的に調査を行った。削平された下成土塁の法面下と推定される位置に、時期を特定できないが土塁基底部の積土を切る溝を検出した。この溝から博多湾側に平坦面が続き、その先が濠となり、第39次補足調査の外濠の構造とほぼ同様である。外濠の立ち上がりについては、土塁基底部から60m付近一帯は宅地であるため、確認できない。また、木樋吐水口付近の調査は、吐水口と推定する部分に広くトレンチを設定し、調査中であるが、吐水口付近にあるイチヨウの根が障害となり、木樋掘方の検出が困難であるため、上成土塁の法下にトレンチを設定し、調査を続行している。平成20年3月現在、調査途中であり、詳細は来年度刊行予定の正式報告書に依らねたい。

### 第92-3次調査

第92-3次調査地は政庁域周辺官衙跡大楠地区にあたり、昭和59年度に実施した第92次調査地に南接して一部が重複する。第92次調査では8世紀中頃～12世紀の掘立柱建物、井戸、土坑等が確認されており、今回調査地のすぐ北には8世紀中頃の掘立柱建物S B 2620が存在している。調査はトレンチを設定して4月11日に開始し、上下2層の整地層を確認した。上層の整地面から8世紀中頃の柱列2条と溝1条、下層の整地層下に溝1条を確認した。

### 第198次調査

第198次調査地は政庁域周辺官衙跡日吉地区の東限付近にあたるため、日吉地区の東を限る遺構の確認を目的として、8月28日に調査を実施した。真砂土を客土した旧表土下（現地表下約2m）は平安時代の遺物を含む灰色砂層があり、さらに下層は遺物を含まない暗灰色粘性土層の堆積が見られ、遺構は確認できなかった。当該地付近は遺構がもともと存在しないか、或いは、存在した遺構が御笠川の氾濫等で失われたものと推測される。

### 第136-2次調査

なお、平成17年度に緊急調査として実施した大宰府史跡第136-2次調査については本書に報告するので、その経過と概要をここに記すこととする。平成15年度に、政庁域周辺官衙前面地区に地下倉庫を併設する住宅新築工事に伴う確認申請が大宰府市に提出された。当該地は政庁前面広場の西半部の一画にあたり、朝集殿かと考えられる南北棟の掘立柱建物S B 2300を検出した第81次調査地に南接し、第136次調査地と重なる。本調査地を含む大宰府の官衙施設が地下に眠る政庁域前面地区は、未指定地ながら大宰府史跡を調査研究する上で重要な地区と考えている。したがって、地権者には、重要な遺構を検出した場合は保存について再度協議を行うということで御理解頂いた。調査は平成17年12月14日に着手した。調査区の東側に北東から南西方向に走る谷状の流路を検出し、この谷部に大宰府政庁Ⅱ期の造営に伴う厚さ1.5m程の整地層を確認した。この整地層上面に、S B 2300に伴うと考えられる東西方向、及び、南北方向の柵列各1条の他に、調査区西半部の地山面に土坑4基を検出した。さらに、谷の整地層の下に流路の軟弱地盤を強化するための敷粗朶と筏状遺構を検出した。これらの遺構は、大宰府政庁Ⅱ期の造営に先立つ大規模な土木工事の実態を窺わせる貴重な資料であった。遺構検出をほぼ終了した平成18年2月3日に、福岡県教育庁文化財保護課、大宰府市教育委員会文化財保護課、九州歴史資料館調査課の三者により協議し、地下室建設により掘削される筏状遺構は記録保存とすることはやむをえないとしてもS B 2300に伴うと思われる柵列等の保存について地権者をお願いすることとした。柵列等の保存については、ぎりぎりまで譲歩して頂き地下保存することができた。また、地権者の御理解を得て整地層の剥ぎ取り、及び、筏状遺構の切り取りを行い、3月13日に調査を終了した。

### 敷粗朶・筏状遺構

Tab.4 大宰府史跡発掘調査実施表

平成18年度	調査回数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
	水城跡第33次調査	6AMK-M	650	060518~070330	欠堤部西土塙・外堀部
	大宰府史跡第196次調査	6AYM-C-O	18	060605~060608	大楠地区官衙跡
	大宰府史跡第197次調査	6AYM-A-P	9.2	061214	日吉地区官衙跡
	大宰府史跡第386-2次調査	6AYM-A-T	210	070122~070309	本丁地区官衙跡
平成19年度	調査回数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
	大宰府史跡第92-3次調査	6AYM-C-O	24	070411~070420	大楠地区官衙跡
	水城跡第40次調査	6AMK-R	340	070601~	吐水部・外堀部
	大宰府史跡第198次調査	6AYT-B	10	070828	五反田地区
	水城跡第44次調査	6AMK-I	350	080220~	内堀推定部

Tab.5 大宰府史跡現状変更申請対応状況表(1)

申請日	申請者	理由	申請地	面積㎡	指定区分	対応内容	許可日
3月10日	個人	住宅増築	大宰府市觀世寺4丁目223-1	7.3	史跡大宰府学校院跡	大宰府市教委立会	5月19日
3月30日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	大宰府市水城跡交差点722-1、三菜2丁目559-204ほか、大字大宰府字跡524-84ほか、太宰府4838-1ほか		特別史跡大野城跡	大宰府市教委立会	6月1日
4月3日	福岡県福岡農林事務所長	防災工事	大野城跡乙金618-1、618-53	805.97	特別史跡大野城跡	大野城市教委立会	6月16日
4月17日	宗教法人弘心寺代表役員	駐車場建設	大宰府市觀世寺4丁目547-1外		特別史跡大宰府跡	大宰府市教委立会	6月16日
6月4日	個人	住宅増築	大宰府市觀世寺6丁目896番117	68.21	特別史跡善寺境内および子院跡	大宰府市教委立会	8月4日
6月7日	宗教法人日管寺代表役員	住宅建築	大宰府市觀世寺4丁目604番の一部	4,090.64	特別史跡大宰府跡	大宰府市教委立会	8月4日
6月29日	福岡県教育委員会教育長	築橋調査	宇美町大字四王寺字敷野915、石垣305-1		特別史跡大野城跡	県教委発起調査	7月21日
7月11日	福岡県福岡農林事務所長	治山工事	大宰府市大字坂本330-1、350-5		史跡觀世寺寺境内および子院跡	大宰府市教委立会	9月5日
7月21日	大宰府市長	上下水管改修	大宰府市水城1000-1、同分2丁目1302、水城3丁目1090-1、2-3	94.71	特別史跡水城跡	大宰府市教委立会	9月5日
8月2日	大宰府市教育委員会教育長	災害復旧	大宰府市大字坂本字口上谷351-47ほか		特別史跡大野城跡	大宰府市教委立会	9月15日
8月11日	宇美町長	水筒改修	宇美町大字四王寺字村上		特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	9月28日
8月22日	福岡県教育委員会教育長	発掘調査	宇美町大字四王寺字長谷80、大石垣305-1・2		特別史跡大野城跡	県教委発起調査	9月15日
9月4日	個人	住宅建築	大宰府市觀世寺6丁目896番117	259.90	史跡觀世寺寺境内および子院跡	大宰府市教委立会	10月27日
9月14日	株式会社NTTドコモ九州社長	携帯電話基地局設置	宇美町大字四王寺字大石垣250番1		特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	10月27日
10月30日	九州歴史資料館長	展示解説及び竹灯明設置	大宰府市觀世寺5丁目182番		史跡觀世寺寺境内および子院跡	大宰府市教委指導	11月8日
10月20日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	大宰府市大字坂本334-1		史跡觀世寺寺境内および子院跡	大宰府市教委立会	1月19日
11月6日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字長谷1101-1		特別史跡大野城跡	県教委立会	12月8日
11月16日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字敷野191-11ほか	106.097	特別史跡大野城跡	県教委立会	12月21日
1月5日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字大石垣305-2静地、字長谷80静地	57.541	特別史跡大野城跡	県教委立会	2月1日
1月9日	大野城市教育委員会教育長	災害復旧	大野城市大字和4丁目1-1ほか	約1,700	特別史跡水城跡	大野城市教委立会	2月1日
1月11日	大宰府市教育委員会教育長	災害復旧	大宰府市大字水城字丸山1-1、水城1丁目250-6、大字吉松字土居129ほか、大字吉松字星ヶ瀬472・473		特別史跡水城跡	大宰府市教委立会	2月1日
1月15日	九州歴史資料館長	土版置き	大宰府市大字坂本3丁目16番1号	200	特別史跡大宰府跡	大宰府市教委指導	1月22日
1月16日	宗教法人弘心寺代表役員	供養塔建設等	大宰府市觀世寺4丁目229番6	5.184	史跡大宰府学校院跡	大宰府市教委立会	3月29日
1月18日	大野城市教育委員会教育長	災害復旧	大野城市大字和3丁目16-1、4丁目2-2ほか	約7,500	特別史跡水城跡	大野城市教委立会	2月23日
1月24日	福岡県福岡農林事務所長	トイレ改修	宇美町大字四王寺字長谷11-13	16.3	特別史跡大野城跡	宇美町教委立会	3月16日
2月14日	大宰府市長	コンクリート柱設置	大宰府市觀世寺4丁目772番3	1.44	史跡大宰府学校院跡	大宰府市教委立会	3月29日
2月14日	大宰府市長	コンクリート柱設置	大宰府市觀世寺6丁目896番55	1.44	史跡觀世寺寺境内および子院跡	大宰府市教委立会	3月29日

Tab.5 大宰府史跡現狀變更申請対応状況表(2)

平成19年度	申請者	理由	申請地	面積㎡	指定区分	文化庁等指示	対応内容	許可日
4月16日	九州歴史資料館長	発掘調査	大野城市下大利4丁目2-2ほか	400	特別史跡水城跡	文化庁許可	九歴発掘調査	5月18日
5月7日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	本宰府市大字本宰府名原523番地84、字大原524番地53ほか		特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	6月28日
6月18日	本宰府市教育委員会教育長	災害復旧	本宰府市大字本宰府字口上谷351-47ほか、字岩谷1790-1、大字観世音寺字大浦谷715-51		特別史跡水城跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	8月3日
6月18日	本宰府市教育委員会教育長	災害復旧	本宰府市大字水城字丸山1-1、大字吉原字上原129ほか、大字吉原字尾ヶ浦472-473		特別史跡水城跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	8月3日
6月25日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	本宰府市大字四分字裏山984-1ほか		特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	7月20日
6月29日	福岡県教育委員会教育長	災害関連発掘調査	宇美町大字成徳学院前田谷山283-10、大字四王寺字敷道り10ほか、本宰府市大字本宰府字松川139-2ほか		特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	8月3日
7月11日	個人	建物除去	本宰府市観世音寺6丁目896番65	279.49	史跡観世音寺境内および子配跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	8月29日
8月29日	福岡県知事	トイレ撤去	宇美町大字四王寺字前田128-3、字八ツ並219-3		特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	10月19日
8月29日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧発掘調査	宇美町大字四王寺字大石垣305-1ほか、字敷道りほか		特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	9月21日
9月6日	大野城市教育委員会教育長	発掘調査	大野城市下大利3丁目5-1ほか、4丁目1-1ほか	約70	特別史跡水城跡	文化庁許可	大野城市教委発掘調査	10月4日
10月3日	大野城市教育委員会教育長	橋水伐採	大野城市下大利3丁目5-1ほか、4丁目1-1ほか	約1,000	特別史跡水城跡	文化庁工事許可	大野城市教委立会	10月30日
10月3日	大野城市教育委員会教育長	災害復旧	大野城市下大利3丁目5-1ほか、4丁目1-1ほか	約70	特別史跡水城跡	文化庁工事許可	大野城市教委立会	10月30日
10月9日	本宰府市教育委員会教育長	広場整備	本宰府市大字水城字丸山1-1、園分2丁目191-1ほか、水城1丁目59-11		特別史跡水城跡	文化庁工事許可	本宰府市教委立会	11月16日
11月6日	福岡県教育委員会教育長	整備工事	宇美町大字四王寺字福坂191-1 本宰府市大字坂本字口上谷1088ほか	3,583	特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	県教委立会	11月29日
11月14日	九州歴史資料館長	発掘調査	本宰府市大字吉原107-1・110-1・112-1	3,000	特別史跡水城跡	文化庁許可	九歴発掘調査	1月10日
11月19日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	大野城市乙家618番53		特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	大野城市教委立会	1月10日

## II 大宰府跡の調査

II 大宰府跡の調査	9
1 第136-2次調査（不丁地区の緊急調査）	9
(1) 調査概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 検出遺構	12
(4) 出土遺物	17
(5) 小 結	23
2 第196次調査（大楠地区の緊急調査）	26
(1) 調査概要	26
(2) 基本層序	26
(3) 検出遺構	26
(4) 出土遺物	28
(5) 小 結	30
3 第197次調査（日吉地区の緊急調査）	31
(1) 調査概要	31
(2) 基本層序	31
(3) 小 結	31
4 第86-2次調査（不丁地区の緊急調査）	32
(1) 調査概要	32
(2) 基本層序	33
(3) 検出遺構	33
(4) 出土遺物	35
(5) 小 結	35
5 第92-3次調査（大楠地区の緊急調査）	36
(1) 調査概要	36
(2) 基本層序	36
(3) 検出遺構	36
(4) 出土遺物	38
(5) 小 結	42
6 第198次調査（五反田地区の緊急調査）	44
(1) 調査概要	44
(2) トレンチ設定と基本層序	44
(3) 出土遺物	45
(4) 小 結	45
7 政庁後背官衙・松ヶ浦地区の調査	47
(1) 調査経過と報告内容	47
(2) 第150次調査	48
(3) 第158次調査	50
(4) 第199次調査	52
(5) まとめ	54
8 第136-2次調査の筏状遺構S X3937部材の樹種同定	55

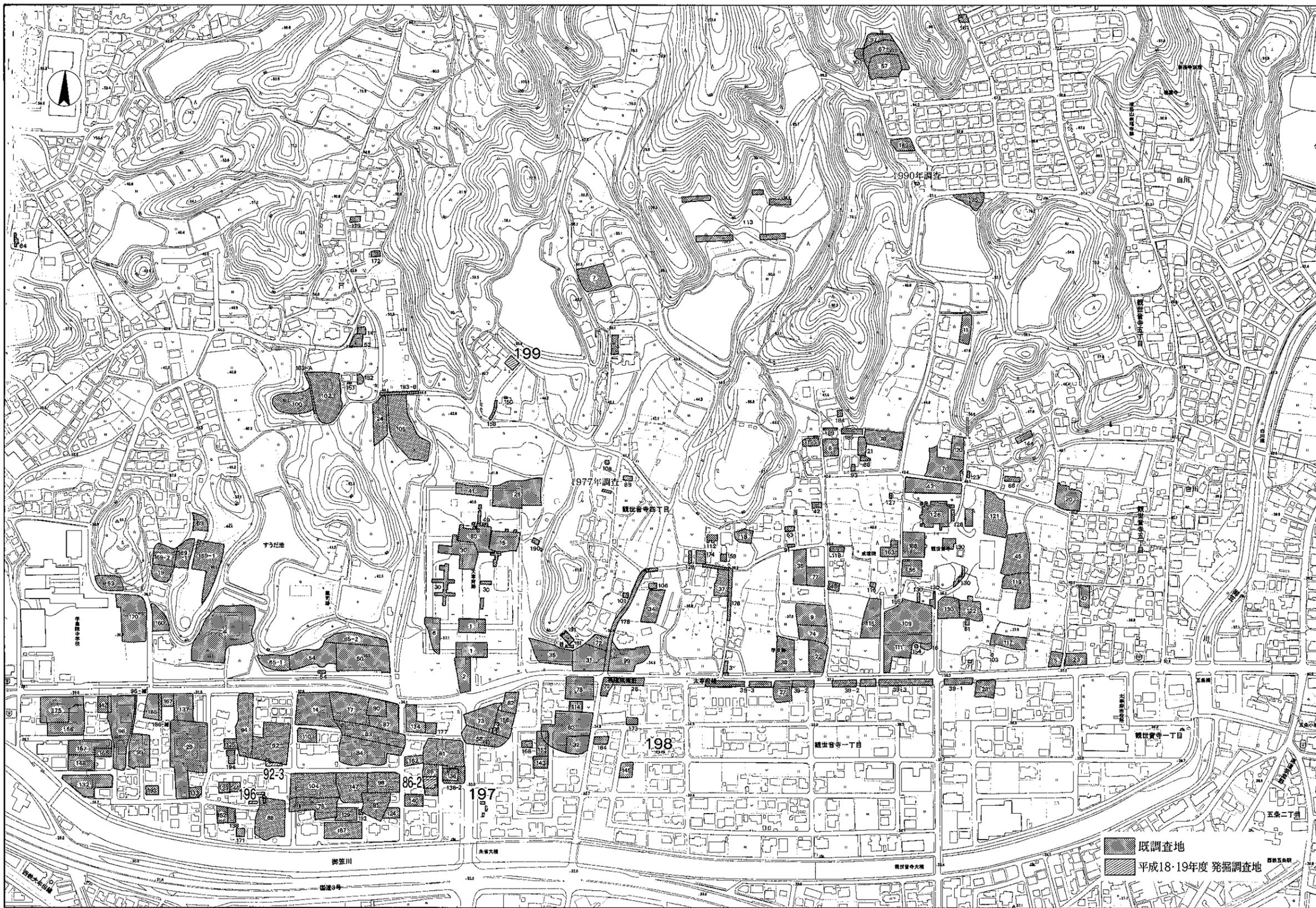


Fig.1 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000)

# 1 第136-2次調査（不丁地区の緊急調査）

## （1）調査概要

経過 調査地は、ほぼ政庁正面に位置している。当該地では、平成3年度に第136次調査を実施しているが、平成17年度に住宅建替えによる再調査を行った。この調査に関する協議の経過はI章に譲る。周辺では、調査区北側の第81次調査において、朝集殿と考えられる掘立柱建物SB2300を、前回の第136次調査において政庁II期造営に併行する整地層をそれぞれ確認している。SB2300以外に顕著な遺構を確認できないことから、本地区は政庁正面広場と考えられている。

調査に着手したのは、平成17年12月14日である。調査区南側では、河川の氾濫により遺構は認められなかったが、調査区北側では、政庁II期造成に関する整地面において、柵列2条等を確認した。さらに整地層を掘り下げた段階で、枕木状に並ぶ筏状遺構を確認した。柵列、筏状遺構共に政庁II期造営に併行する遺構と考えられ、後者は整地地業の地盤補強と考えられる。これは、政庁周辺域では極めて稀な例であり、太宰府市、県文化財保護課とも協議を重ね、地権者、設計事務所に対して保存の協力をお願いした。その結果、柵列の一部を保存のために設計変更していただき、調査期間の延長をご了解いただいた。また、遺構の一部については剥ぎ取りを行った。調査は3月13日に終了した。調査面積は210㎡である。

位置 調査区は、大宰府政庁南門から南へ約150mのところの位置している。御笠川北岸の標高33.4m付近に立地しており、区画整理以前の昭和40年代には御笠川が大きく北側に蛇行した状態であった。そのため、本調査区周辺より南では、遺構が削平を受け、残存しない状況が認められる。調査地番は、太宰府市観世音寺2丁目1番2号である。

## （2）基本層序

調査地は政庁正面広場にあたる。調査前は宅地であり、解体後に整地された時の標高は33.4m前後である。調査区西側では、整地層SX4641（西壁・Fig.2, PL.2）を僅かに確認できる。その下位は、粘質土や砂質土から成る自然堆積層である。一方、調査区中央付近では、現地表下より0.5m下位の標高33.2m付近で広場廃絶に関わると考えられる、溝状に堆積する暗茶灰色の整地層SX4642がある。出土遺物の下限は13世紀頃である。この下位に、政庁II期に伴って造成された前面広場SH2500に関わる整地層がある（北壁・Fig.2, PL.3）。

整地層は、調査区を南北に蛇行する谷筋SX2318を埋めている。粘性の強い黄褐色土、黄茶褐色土、淡灰色土等を互層に積み上げて整地している。流路の中心部付近では、0.8m程度の厚さを持つ。その下位では、青灰色粘質土、灰色土粘質土など、厚さ0.2m程度に積土しながら、筏状遺構を谷筋内に埋設している。この筏状遺構を埋設する青灰色粘質土、灰色粘質土は、上層の褐色系整地土と同じ密度の粘質ブロックを包含し、整地土の単位もほぼ同一であり、一連の整地作業と理解される。整地層上部からは、7世紀第3四半期の遺物が出土している。さらに、筏状遺構周辺や下部付近では、敷粗朶を粘質土と互層に重ねながら埋設されている。その下位では、茶褐色や黒色となる腐植土がある。伐採痕跡を持つ木材や、被熱した炭化材が出土しており、谷筋内への人為的な投棄の可能性が高い。この腐植土の下位では、砂層や黒色

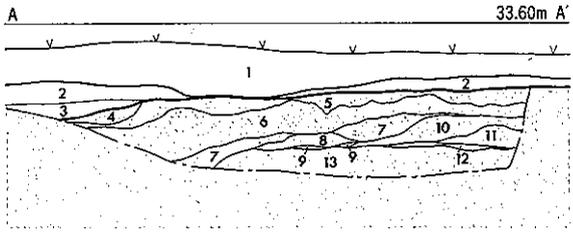
整地層と  
筏状遺構

敷粗朶の  
確認

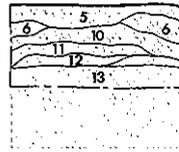


Fig. 2 第136-2次調査遺構配置図 (1/100)

西壁

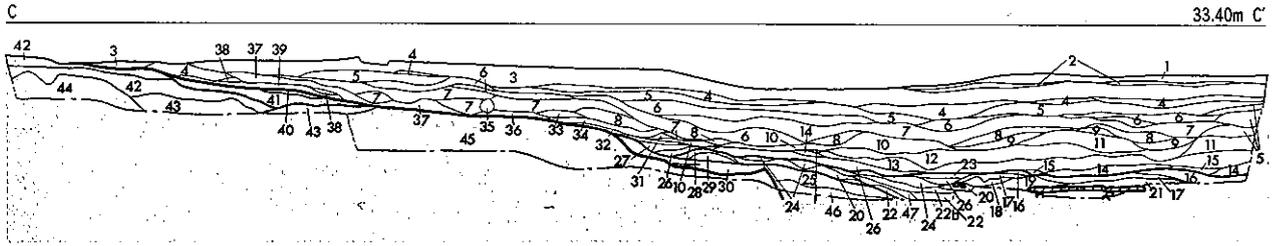


B 33.60m B'

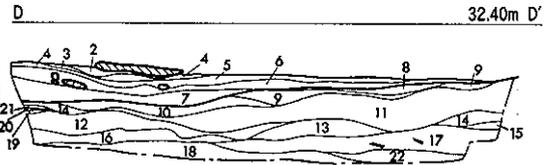


- 1 表土黒灰色土 (産廃が多くまじる)
- 2 淡黄灰色土 (整地層)
- 3 淡黄灰色土 (黒色ブロック混・整地層)
- 4 淡灰色土 (細砂)
- 5 黄灰色粘質土
- 6 暗灰色粘土 (あずき)
- 7 淡黒灰色砂質土
- 8 淡灰色粘砂 (粗砂)
- 9 淡暗灰色砂質土 (7に近い)
- 10 淡黄灰色土
- 11 淡灰色砂質土
- 12 灰色砂 (細砂)
- 13 灰色粘質土 (パイラン粘土)

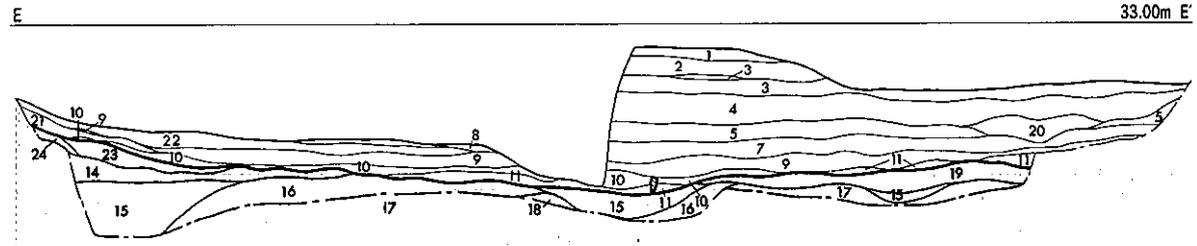
北壁



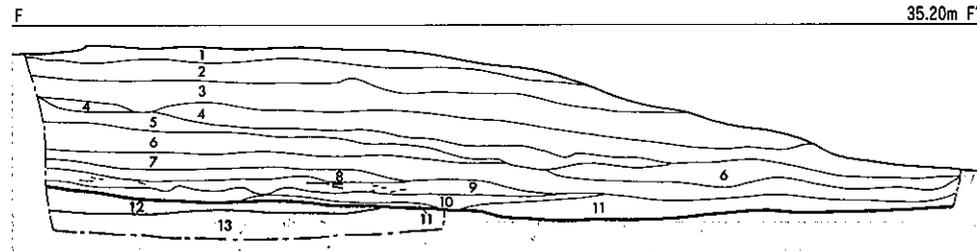
- |                         |                 |                   |
|-------------------------|-----------------|-------------------|
| 1 淡黄褐色土 (粘性強・粗砂混)       | 25 黒灰色土 (腐植土)   | 2 白色砂質土(流砂)       |
| 2 暗茶褐色土 (薬+枝腐)          | 26 黄褐色粘質土       | 3 暗青灰色シルト         |
| 3 暗黄褐色土 (2に近い)          | 27 暗灰色粘質土       | 4 淡茶青灰色シルト        |
| 4 黄褐色土 (茶褐色ブロック混)       | 28 灰色粘質土        | 5 青灰色シルト          |
| 5 暗黄褐色粘質土               | 29 青灰色粘質土       | 6 黒褐色土 (腐植土層)     |
| 6 黄褐色土 (5に近い)           | 30 暗灰色粘質土       | 7 黒褐色土砂質土         |
| 7 暗黄褐色土 (8に近い)          | 31 淡黄灰色粘質土      | 8 茶色砂質土 (流砂)      |
| 8 #                     | 32 淡黄灰色粘質土      | 9 白色砂質土 (漸移的)     |
| 9 淡黄褐色土 (灰色ブロック混)       | 33 灰黄褐色粘質土      | 10 白色砂+黄灰色砂 (漸移的) |
| 10 暗灰色粘質土 (黄灰色ブロック混)    | 34 灰色粘質土 (粘性強い) | 11 青灰色シルト         |
| 11 暗黄褐色粘質土 (暗灰色ブロック混)   | 35 淡茶灰色粘質土      | 12 暗灰色シルト砂質土      |
| 12 黄褐色粘質土 (黄灰色ブロック混)    | 36 淡灰色粘質土       | 13 灰色砂            |
| 13 暗灰色粘質土 (黄色ブロック混)     | 37 暗茶灰色粘質土      | 14 暗灰色砂質土         |
| 14 黒灰色粘質土 (花崗岩レキ含、粘性あり) | 38 暗黄褐色粘質土      | 15 灰色粗砂           |
| 15 黄褐色粘質土               | 39 灰色粘質土        | 16 明灰色砂流砂         |
| 16 暗灰色粘質土 (青灰色シルト)      | 40 淡黄灰色粘質土      | 17 灰色粗砂 (流木含)     |
| 17 青灰色粘質土 (下部に腐)        | 41 暗黄褐色土        | 18 橙褐色粗砂流砂        |
| 18 淡黄褐色粘質土 (上部に腐)       | 42 淡黄灰色粘質土      | 19 明灰色粗砂          |
| 19 暗黄褐色粘質土 (木材を埋める)     | 43 淡黄褐色粘質土      | 20 明灰色粘砂          |
| 20 暗灰色粘質土 (散粗混)         | 44 黄褐色粘質土       | 21 青灰色シルト粗砂       |
| 21 灰色粘質土 (青シルトブロック混)    | 45 淡灰色粘質土       | 22 青灰色シルト         |
| 22 黄褐色粘質土 (散粗混の灰+粘質土)   | 46 灰色砂 (流砂)     |                   |
| 22b 黒褐色土 (散粗混2枚目粘性が強い)  | 47 青灰色シルト       |                   |
| 23 淡灰色粘砂土               |                 |                   |
| 24 淡灰色粘質土 (黄灰色ブロック混)    |                 |                   |



北壁



東壁



- |                              |                       |           |
|------------------------------|-----------------------|-----------|
| 1 黄灰色土 (しまり強) (やや灰色土まじる)     | 12 青灰色シルト (自然堆積)      | 22 黒灰色粘質土 |
| 2 黄灰色土 ( " )                 | 13 青灰色砂とシルトの互層 (自然堆積) | 23 青灰色粘砂  |
| 3 明黄褐色土 ( " )                | 14 暗青灰色粘質土            | 24 黄灰色粘砂  |
| 4 2層に同じ                      | 15 暗青灰色粘質土 (木皮が入る)    |           |
| 5 黄灰色土と灰色土がまじる (しまり強)        | 16 淡青灰色粘砂             |           |
| 6 灰色土 (黄褐色土でブロックがまじる) (しまり強) | 17 灰色粘砂土              |           |
| 7 青灰色シルト (灰色 黄褐色シルトブロック混)    | 18 灰色砂                |           |
| 8 黒灰色粘土 (植物遺体を含む)            | 19 淡黄灰色シルト            |           |
| 9 黒色シルト ( " )                | 20 4b暗黄褐色土            |           |
| 10 9層と11層がまじる                | 21 青灰色シルト             |           |
| 11 灰色砂 (粘砂を多く含む)             |                       |           |

Fig.3 第136-2次調査土層図 (1/60)

II 大宰府跡の調査

土の自然堆積層が続くが、遺物がなく時期を比定することはできない。このような状況から、谷筋S X2318内において認められた下部の敷粗朶、筏状遺構を含む厚さ1.4mの堆積層は、前面広場S H2300造成のため、人為的に埋めた一連の整地作業の結果と理解される。敷粗朶下位の黒色腐植土も純粋な自然堆積では無く、加工痕を持つ伐採木等の投棄から地盤補強の一部と考えられる。

(3) 検出遺構

柵

S A4635 (Fig. 4, PL. 4)

S B2300  
と並列

調査区北側で検出した。東西方向の柵列で一問分東側に折れる。ちょうど第81次調査で検出したS B2300の南側梁行にほぼ並列する形で配されており、整地層S X4642の堆積が上部を覆う。東西に4間、東側に南北1間の規模となることを確認しているが、現状では西側に延びる可能性は低い。また、東側については、河川氾濫による掘削を受けているが、精査した限りでは痕跡を確認できなかった。東西総長7.20m、南北1.50mとなり、東西柱間は東から2.30m、1.50m、1.60m、1.80mを測る。柱掘形は正円に近い楕円形で、大きさは東西列で0.55~0.75m、深さは残りの良いもので0.3mを測る。不明瞭であった1個を除き、柱痕跡を残している。掘形埋土は、柱穴が切り込む整地層と大差ないことから、柱設置の際、掘り込

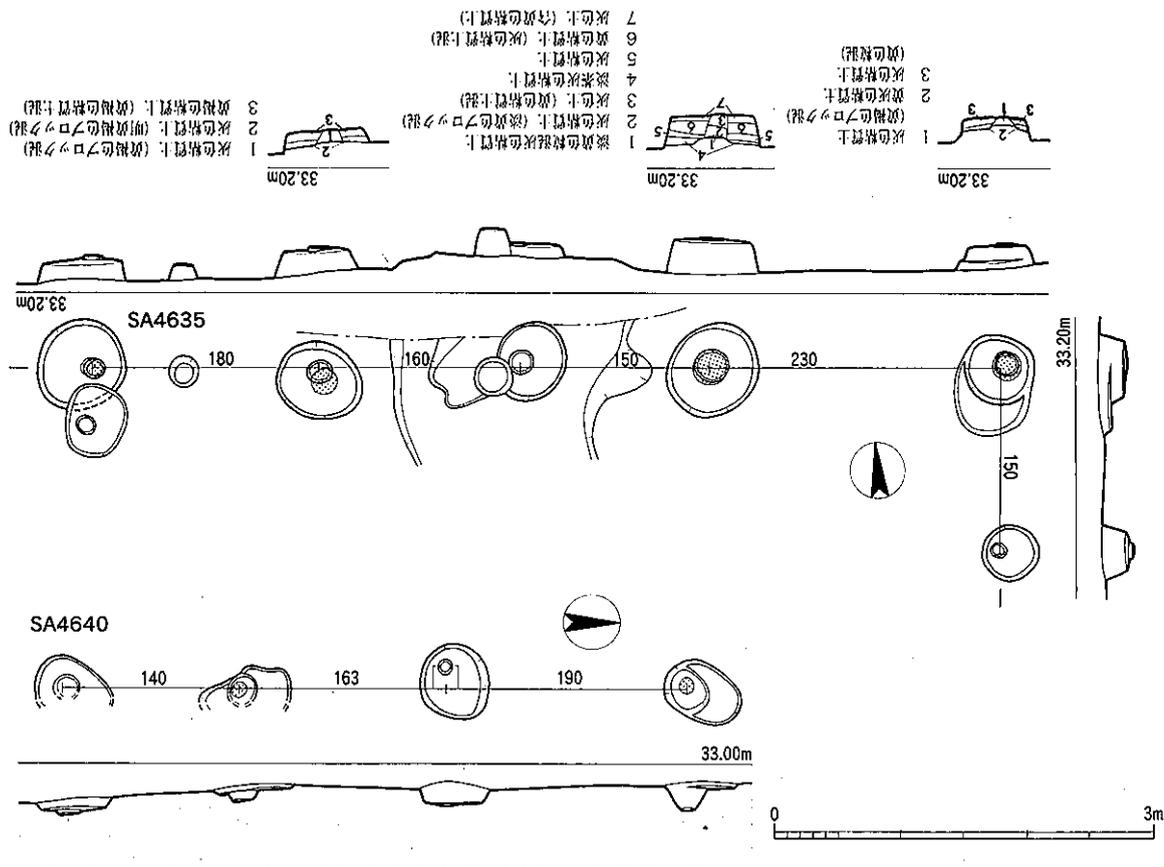


Fig. 4 柵 S A4635・4640実測図 (1/60)

んだ整地土を時間を置かずに埋め戻したことが判る。座標北に対して $4^{\circ}59'1''$ 東偏する。

**SA4640 (Fig. 4)**

調査区中央北側付近で検出した南北方向に延びる柵列である。3間分調査しているが、南側が削平されているため、まだ延びる可能性がある。現状で総長4.93mを測るが、柱間は北から、1.90m、1.63m、1.40mを測る。柱掘形は不正形で、大きさが0.50~0.65mの長楕円形を呈し、残りの良いもので深さ0.2m程度である。柱痕跡については、一番北側の柱穴において確認できたが、他については上部の攪乱が激しく、明確に捉えることはできなかった。時期を比定できる遺物は出土していないが、大きく触れない主軸線などを重視すれば、SA4635など同じく、政庁II期造営の際に配された柵と考えられる。座標北に対し、 $4^{\circ}26'29''$ 東偏する。

**溝**

**SD2296 (Fig. 1)**

調査区東端で検出した南北溝である。東側縁辺は調査区外に延び、南側は河川の氾濫によって削平されている。約2.8m分を調査した。この溝は、北に隣接する第81次調査の際、大半を調査している。幅0.7m程度、深さ0.35mで、谷状遺構SX2318を切る。また、軸方向などを見る限り掘立柱建物SB2300に伴うものではない。青白磁の椀片や斜格子の平瓦が出土しており、9世紀以降と考えられるが、時期を確定できていない。

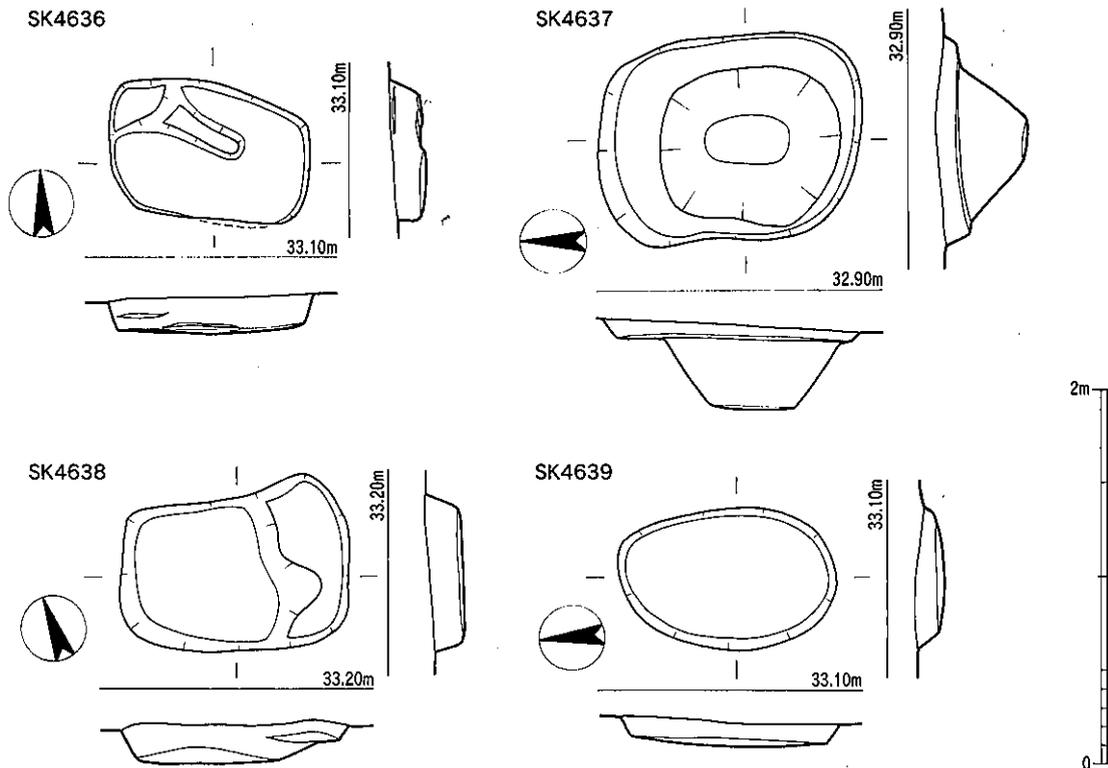


Fig. 5 土坑SK4636~4639実測図 (1/40)

## II 大宰府跡の調査

### 土 坑

#### S K4636 (Fig. 5, PL. 5)

調査区南西隅で検出した。平面は長方形を呈している。遺構検出時は、明確にプランを把握することができたが、床面は、多少の凹凸があり平坦ではない。長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.20mを測る。出土遺物はない。

#### S K4637 (Fig. 5, PL. 5)

調査区南西で検出した。平面は隅丸長方形、断面は挿鉢状を呈している。検出時は、淡茶灰色土の埋土と隅丸方形のプランから柱穴の可能性を考えたが、柱痕跡や抜き取り埋土等を確認することはできなかった。長軸1.35m、短軸1.10m、深さ0.42mを測る。出土遺物はない。

#### S K4638 (Fig. 5, PL. 5)

調査区南西で検出した。平面はやや撥状を呈する長方形を呈し、床面東側に僅かな段を有する。長軸1.20m、短軸0.80m、深さ0.20mを測る。出土遺物はない。

#### S K4639 (Fig. 5, PL. 5)

調査区南西で検出した。平面は長楕円形を呈しており、床面は平坦である。遺構検出の際、明確にプランを把握することができたが、遺構の深さを見る限り残りは良くない。他の遺構と同じく、遺構上部が削平されているためと考えられる。長軸1.15m、短軸0.75m、深さ0.14mを測る。出土遺物はない。

### 広 場

#### S H2500 (Fig. 1, PL. 1・2)

政庁正面では、第58・73・81・136次調査を実施しているが、顕著な遺構としては、第81次調査で検出した四面底の南北棟建物S B2300が存在するだけである。この調査では、政庁II期に谷筋S X2318・2319を埋める大規模な整地地業を確認している。特にS X2319では、谷底付近に石組みの暗渠を埋設しながら整地作業を行っていることが判っている。今回確認した筏状遺構S X3937についても、整地層との時間差は存在せず、整地地業に関わる一連の遺構と捉えることができた。整地層についても、第81次・136-2次調査では、南に向かうにつれて次第に厚くなっている。このことから、第81次調査で理解されたように、政庁正面では、入念な整地作業を南側へ展開しながら広場S H2500を造成したと考えられる。

### 谷 筋

#### S X2318 (Fig. 1, PL. 1)

調査区中央付近で検出した、北東から南西に走る溝状の遺構である。北側の第81次調査区より本調査区に延びているが、東と南側については、河川の氾濫により失われている。第81次調査の所見によれば、上縁幅6～10m、下縁幅3m程度の規模で南北に緩やかに蛇行し、底部では、腐植土層や杭列が確認されている。今回の調査では、底幅約5m、上縁幅約9m以上の規模となる。この溝状遺構の堆積は、上層には広場造成の際の整地層、下層には筏状遺構、敷粗朶、腐植土層、その下位に時期不明の自然堆積の砂層がある。最下層の腐植土層中の木片には、一部加工痕が認められ、人為的投棄の可能性が高い。また、流路内には上部まで、溝堆

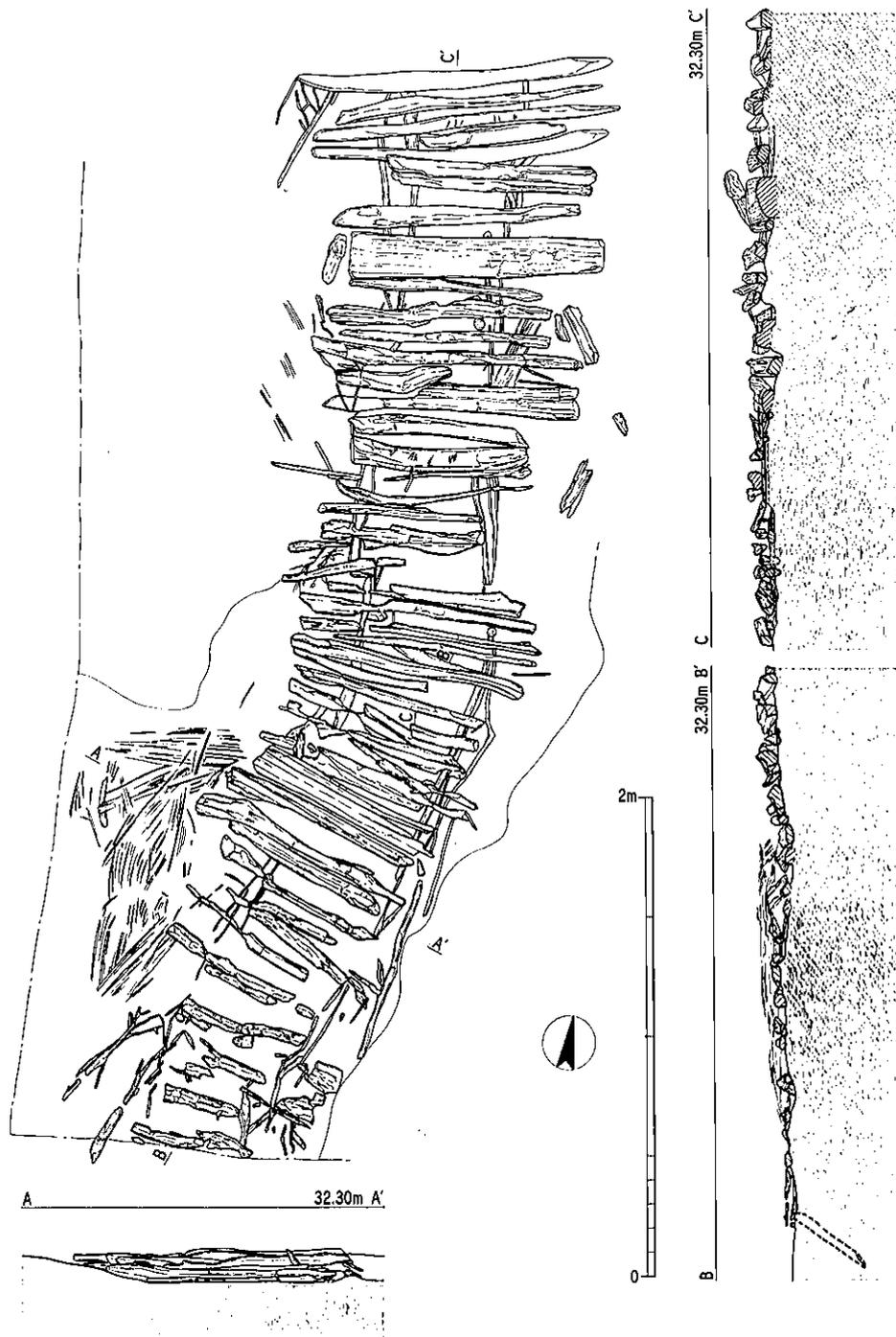


Fig.6 筏状遺構S X3937実測図 (1/30)

積層が見られないことから、各層の在り方は、いずれも人為的な痕跡と理解できる。S X 3937の項でも触れるが、この谷筋の造成に関しては、大きな時間差を想定できない。

**筏状遺構**

S X 3937 (Fig. 6・7, PL. 6~10)

政庁正面広場造成のため、谷筋S X2318を埋めた整地層の下位で検出した。谷筋は、腐植

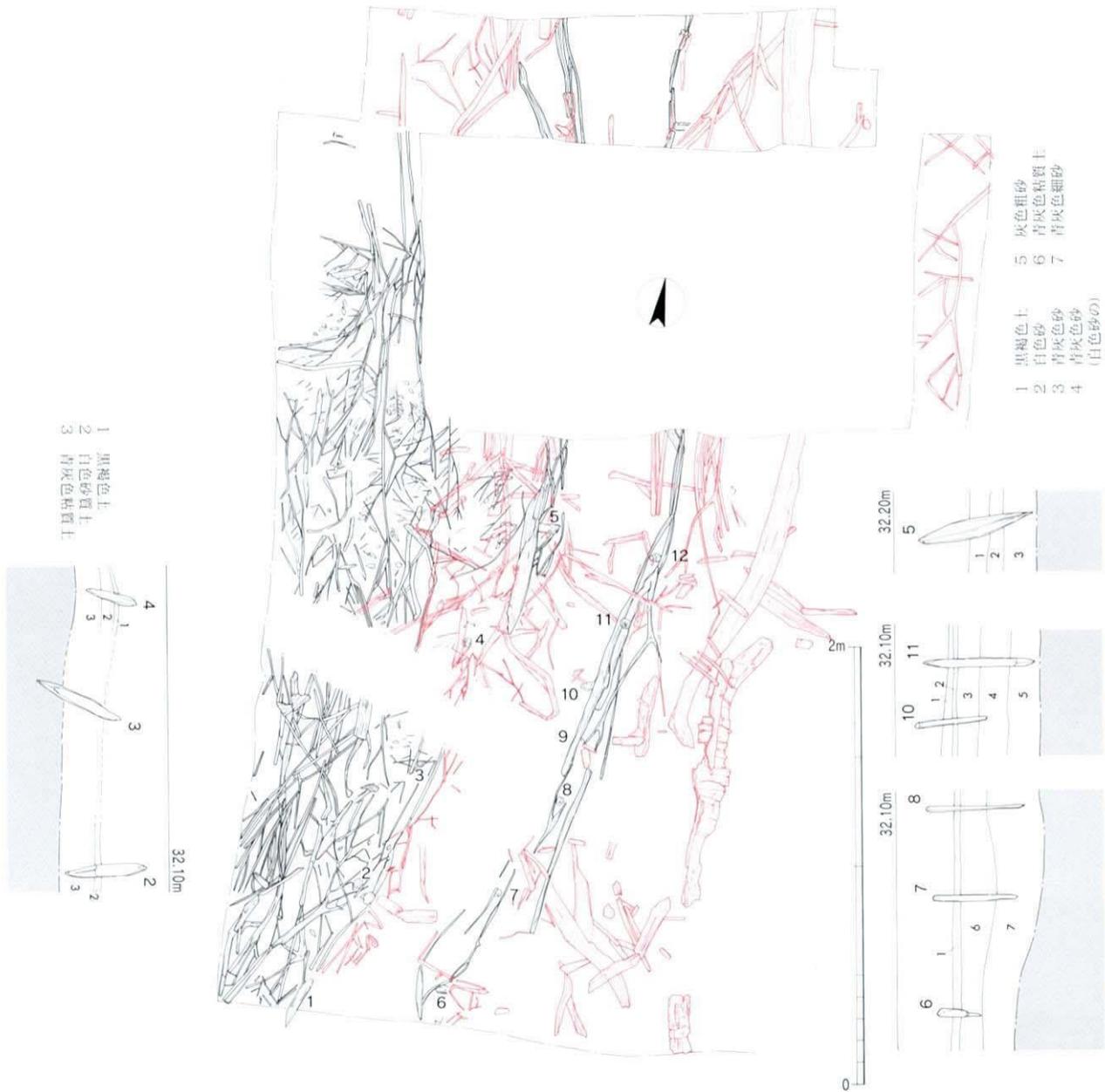


Fig. 7 筏状遺構 S X3937下部実測図 (1/30)

土層、敷粗朶、筏状遺構、整地層の順に埋積している。ここでは、調査の中で明らかにした、筏状遺構の埋設過程と構造について触れる。

筏状遺構の埋設

本調査区では、谷筋（溝）の深さは約1.2mを測る。その最下層となる腐植土層中には、人為的伐採痕や被熱による炭化材（PL.29-a）が認められる。その腐植土層上面に枝葉や大型材を厚さ10cm程度に敷き詰めている。枝葉は端部を裁断しており、大型材は筏状遺構の長軸に併せて配されている。その上層には、厚さ20cm程度に亘り、青灰色や白色の粘質土を積土している。その際、枝葉を粘質土との間に互層となるよう埋設している。枝は筏状遺構と長軸を併せ、節や葉等が付いたものも見受けられる。水城などの基底部積土に埋設される敷粗朶と同様のものであり、地盤補強と理解される。

筏状遺構の埋設は、この粘質土層の上面付近にレール状に縦木を幅0.5~0.6mの間隔で2条配しながら、その上に交差するように枕木を置いている。縦木の設置には、細い木材あるいは枝葉を細く搾るようにしながら配しているが、場所によっては、粘質土中に見られた敷粗朶と層位的に分離することが困難状況であり、一連の埋設作業と理解される。また、縦木を配した周辺では敷粗朶に藁が利用されている。水抜き等の効果を意図したものかもしれない。この縦木に対しては、ずれを防ぐためか0.3~0.5m間隔で2本ずつ杭を打ち込んでいる。長いものでは70cmを越える。そして、枕木はこのレール状に配した縦木の上に配されている。裁断した木材を利用しており、多くは表皮を残している。長いもので80cmを超えるが一定ではなく、縦木間の幅に合えば大きさは関係なく、使用されている。そして、その上面を白色や青灰色の粘質土が覆っている。

縦木と枕木

上部の整地層は、現状で厚さ80cm程度であり、積土状で大きく2つの単位に分れる。下部の中心部を埋める付近では、幅15cm程度と単位は大きく、上部では単位は小さく水平となっている。この整地層下部は、色調や厚さなどから作業単位として筏状遺構埋設の積土と分けることは可能だが、どちらも粘質土にブロックが含まれることなど、ほぼ同じ土質の埋積土を使用している。むしろ、色調の違いは水の影響等による変化と理解される。さらに、検出時の枕木を見る限り、表面に傷などは無く、鋭く尖る縁片が残っており、枕木間には粘質土が充填されている。つまり上面が露出し、踏みつけられた痕跡は無く、配された直後に埋められていることが判る。以上の所見から、最下層の腐植土とその上層の敷粗朶との間には時間差を考慮する余地があるが、敷粗朶から整地層までは、一連の地業と理解される。これは第81次調査における谷筋S X 2319内に埋設された石組暗渠S X 2320とほぼ同様の手順である。この筏状遺構S X 3937は、谷部の整地における軟弱地盤補強とぬかるむこと無く効率的に整地作業を展開するために埋設されと考えられる。

整地層の単位

### 整地層

#### S X 4641 (Fig. 1, PL. 1)

調査区西端で検出した。現状では、褐色粘質土の地山となる自然堆積層の鞍部に僅かに認められる。西側のS X 2319に関わりを持つかは不明だが、土器・瓦片が出土することから政庁II期に並行する広場造成以降の可能性が高い。

政庁II期以降

#### S X 4642 (Fig. 1, PL. 1)

調査区北側で検出した。幅約2mで南北に延びる溝状プランとして確認でき、S A 4635を覆う淡灰色の整地層である。調査区南側では薄くなっており、鞍部に堆積したような状況である。13世紀代の青磁が出土しており、S A 4635, S H 2500の廃絶期を考える上で重要である。

### (4) 出土遺物

#### S A 4635出土土器 (Fig. 8, PL. 28)

##### 土師器

皿(1) 有高台の皿で外底部に回転ケズリの痕跡を僅かに確認できる。復元底径は19.2cm。橙褐色を呈し、胎土は精良である。柱痕跡より出土しており、柵列の下限を示す。

II 大宰府跡の調査

S D2296出土土器・陶磁器 (Fig. 8, PL.28)

須恵器

蓋 (2) 返りを有し、口縁付近を強く屈曲させる。外天井部はケズリ、口縁端部内外面を強くナデる。

白磁

椀 (3) 青白磁で口縁が肥厚しながら内径する椀状の形態をとる。外面には、沈線による短冊状の文様を入れる。

S X2318出土土器 (Fig. 8, PL.28)

須恵器

壺 (4) 壺の外底部片。外底部は回転ケズリで内面回転ナデ調整。このほか、摩滅著しいが、返りを有する杯蓋片が出土しており (PL.28-a)、整地層の年代を7世紀第3四半期以降と考える資料である。

S X4642出土土器・陶磁器 (Fig. 8, PL.28)

須恵器

杯 (5・6) 5の外天井部は回転ケズリ。復元想定される径などから7世紀以前であろう。6の身受けの幅は小さく、口縁部は大きい返りが想定される。

甕 (7・8) 7は頸部を強く屈曲させ、口縁端部を肥厚する。口縁部に1条の沈線が走る。外面正格子のタタキで内面は青海波の当具痕がある。8も頸部を強く屈曲させる。頸部付近は内外面共にナデ。

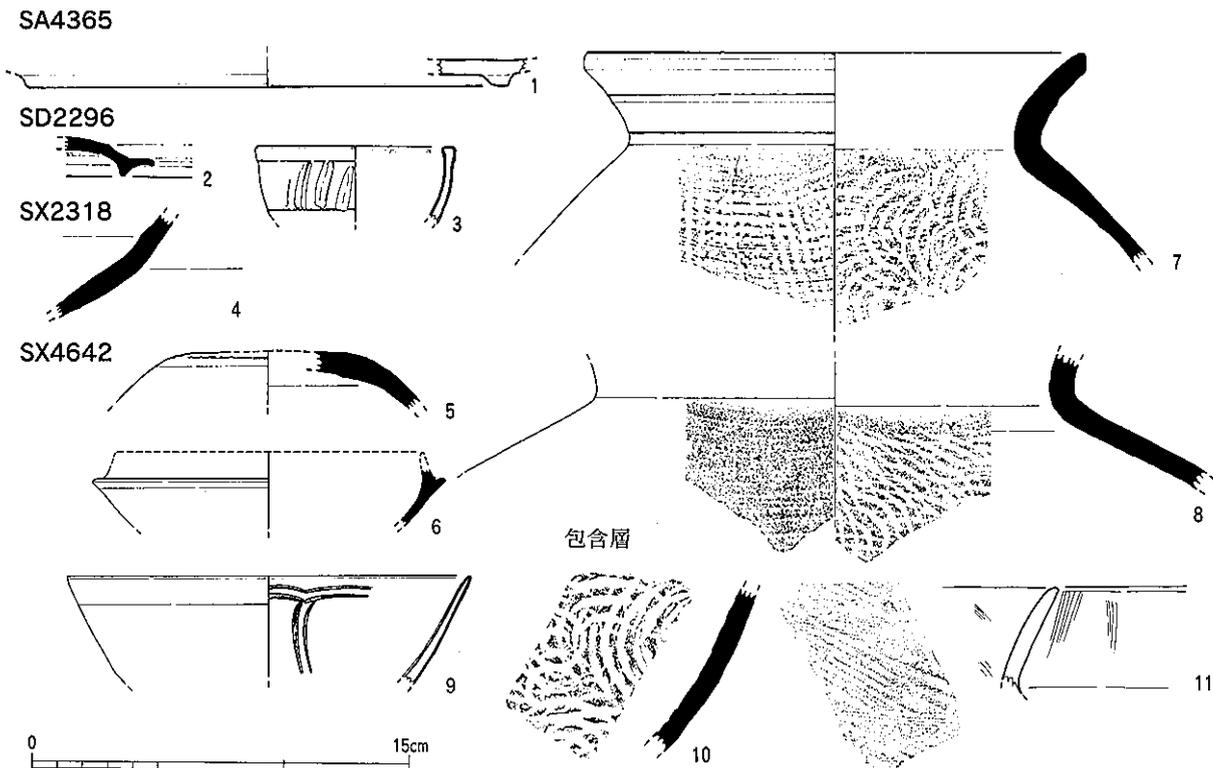


Fig. 8 第136-2次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

青磁

椀 (9) 龍泉窯系青磁 I-4 類の椀。沈線の割付によって体部内面を分割している。

その他の層位出土土器 (Fig. 8, PL.28)

須恵器

甃 (10) 外面はタタキ後に横位に複数単位のカキ目が並走する。内面には同心円状の当具痕。

土師器

壺 (11) 口縁部が直線的に開き、外面に縦位のハケメを施す。古墳時代の所産であろう。



Fig. 9 第136-2次調査出土軒平瓦拓影 (1/4)

瓦類 (Fig. 9)

軒平瓦 (1~3) 1は摩滅著しいが、僅かな凸鋸歯文と3cm程度の顎を有する。老司II式 (275B) であろう。2は上部に珠文を配し、端部を複数面取りする。黒く燻し仕上げる。3の瓦当面の上下幅はやや細目で、小さい珠文と緩やかに流れる唐草文を配する。1~3はいずれも S X 4642 出土。

石製品 (Fig. 10, PL.28)

剥片石器 (1~3) 1は黒耀石製縦長剥片を素材とする石鏃。右側縁を中心に二次調整を行っている。縄文後期の剥片鏃であろう。重さ2.4gで S X 2318 上面出土。2は黒耀石の調整剥片で左側縁端部付近に僅かに微細剥離が認められる。重さ1.6gで S X 2318 出土。3は分割礫を素材とする二次加工剥片。摩滅が著しい。重さ10.8gで S D 2290 出土。

玉石 (4) 正円に近く研磨する。白色で堆積系の石材を使用している。S A 4640 より出土。

鍛冶・鑄造関連遺物 (Fig. 10, PL.28)

鉄滓 (5・6) 5・6は第136次調査 S X 2318 黒色土中より出土した。いずれも褐色を

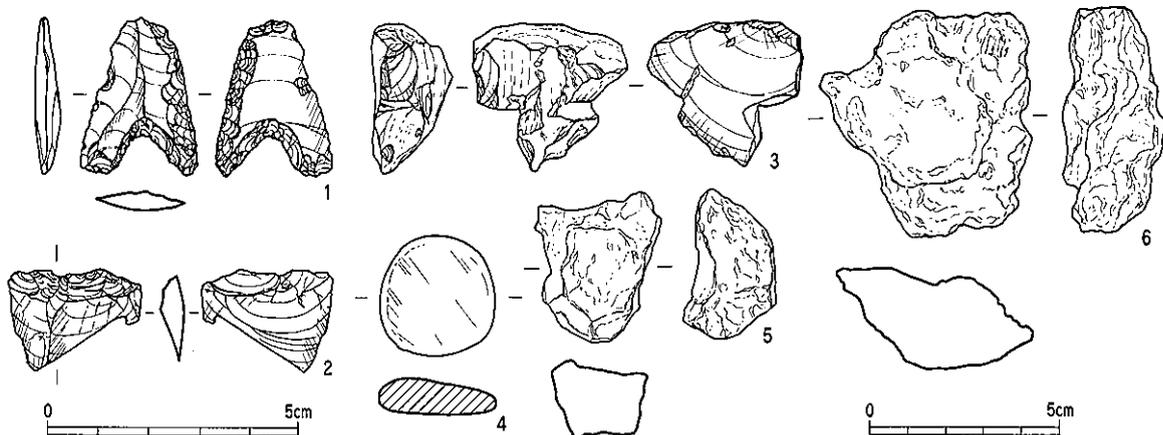


Fig. 10 第136-2次調査出土石製品・鉄製品実測図 (1/2・2/3)

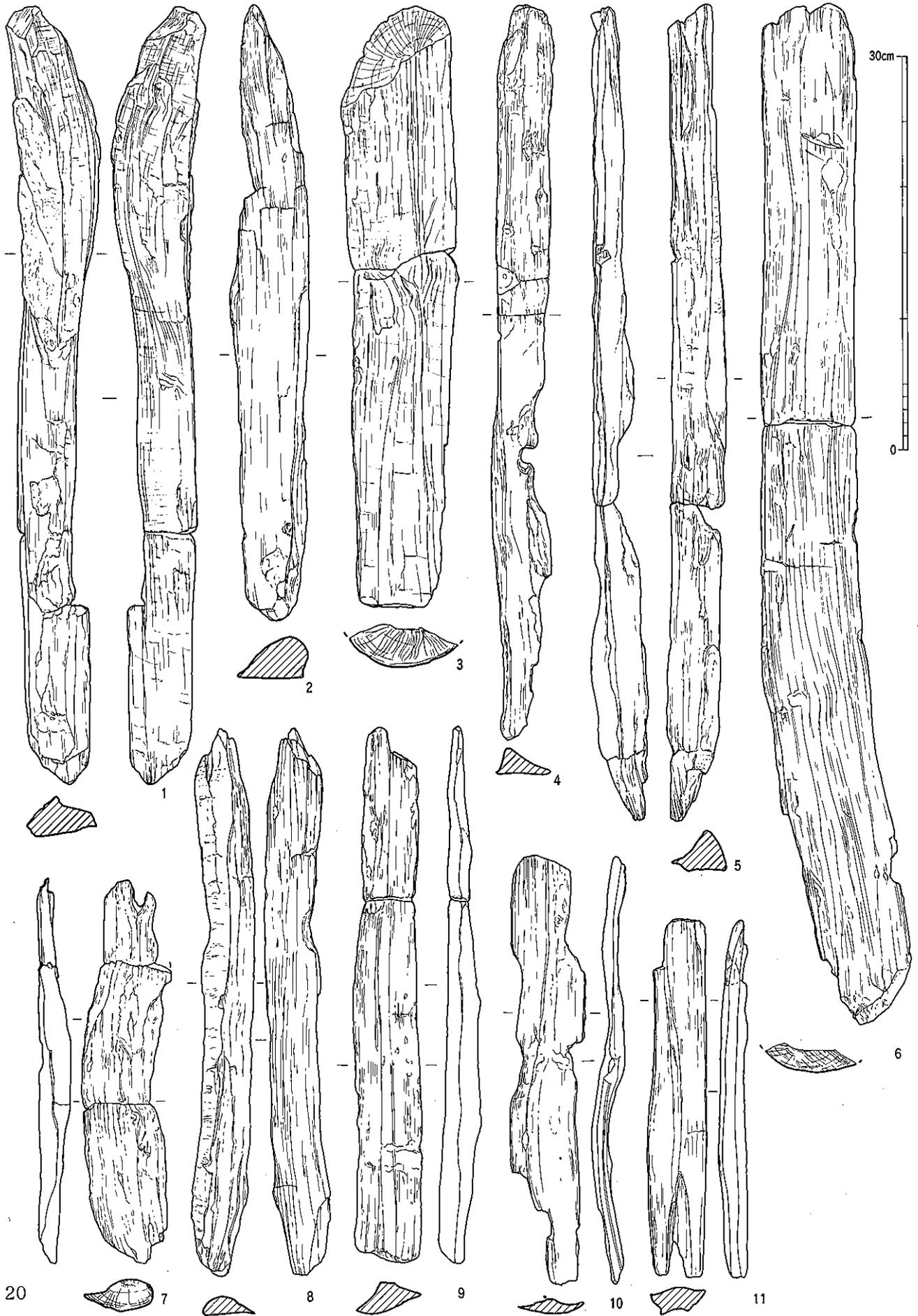


Fig.11 SX3937部材実測図 (1) (1/4)



Fig.12 S X3937部材実測図 (2) (1/4)

II 大宰府跡の調査

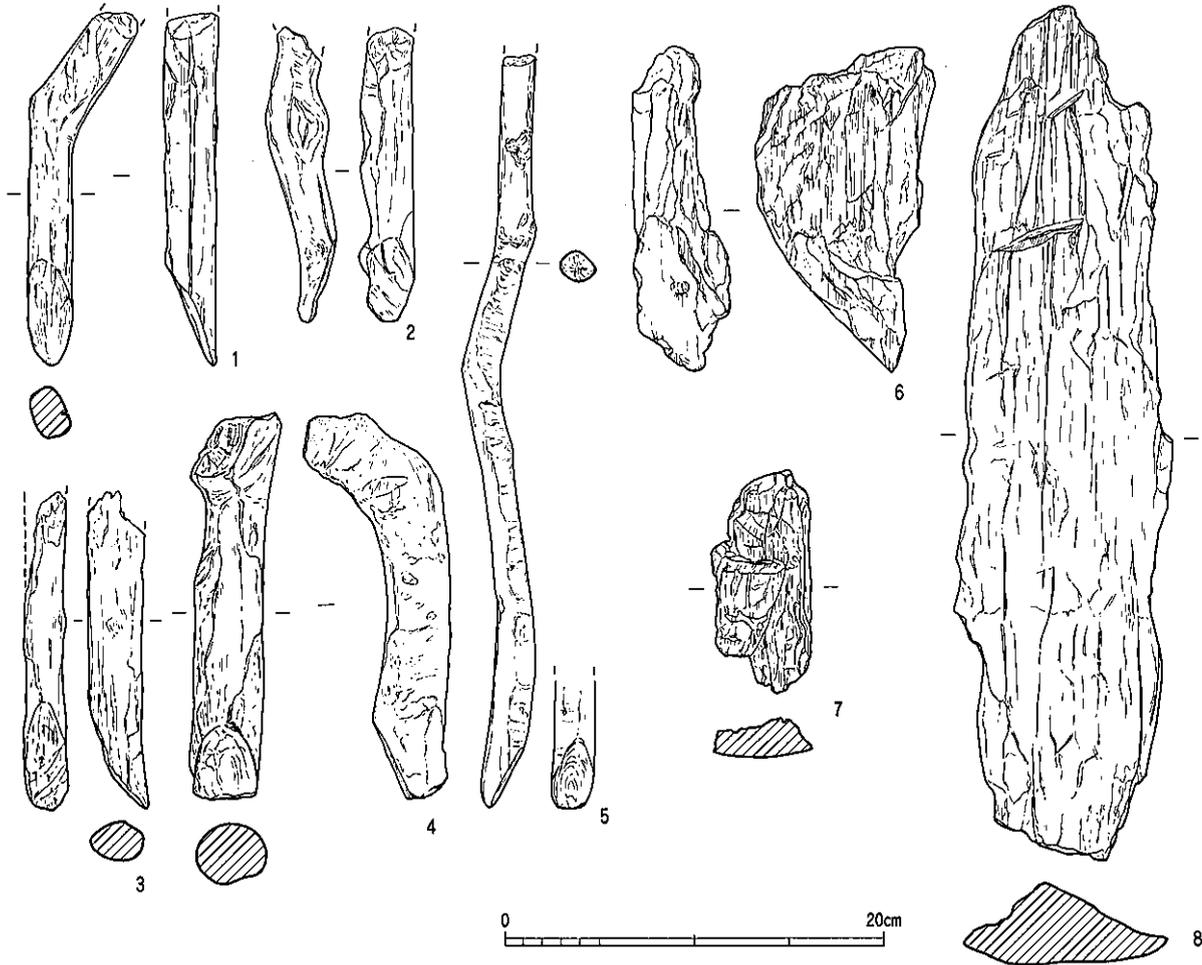


Fig.13 SX3937下層敷粗梁・腐植土木材実測図 (1/4)

呈した椀状である。5は40.0g, 6は84.3g。

木製部材他 (Fig.11~13, PL.28・29)

枕木 (1~11) 縦木を2本レール状に配した後に均等に置かれている。ここでは部材名称として、枕木とした。基本的には切りとられた樹木を縦方向に裁断している。腐植が著しく、端部形状を留めるものは少ないが、僅かに残る資料をみる限り、裁断面が二次的に加工された痕跡はない。1~9は、いずれも複数の裁断面を持ち、樹皮面を残す。1・2には、縦方向に裁断した際の刃部のステップが複数箇所残る。6は枕木部材で最も大きく89cmを測る。10・11は接合しないが、同一個体である。分析によれば、1はコナラ属アカガシ垂属、2・4はアワブキ属、6・10はアカメガシワである。

杭木 (12~20) 12~19は縦木のズレを防ぐために打ち込まれたと考えられる杭である。杭には、切り落とした自然木の先端部を尖らせたもの (12・14~16), 裁断した自然木の端部を尖らせるもの (13・18・19・20), 角柱状に裁断したもの (17) 等がある。特に、裁断形状は枕木と大差なく、一連の素材を加工する中で作出されたと考えられる。12は筏状遺構の一番南で確認した。13は裁断面を取り込みながら5面を加工し尖らせる。同様の加工形態

は19・20にもあり、材質も肉眼でみる限り同一と考えられる。14～16は硬質の樹木のためか、先端部の加工は入念で加工面が複数ある。18は、板状に近く裁断された材の先端部を尖らせる。20は、73cmの長さである。分析によれば、15はムラサキシキブ属、17はツブラジイ、18はヤマモモ、20はコナラ属アカガシ亜属となる。

木片（1～8） 1～5は、S X 3937下位の敷粗朶層中の枝片である。上層の筏状遺構との使用材、加工差等が無いかを確認するため取り上げた。1～5はいずれも、枝を斜めに裁断し、節から伸びる小枝を落としている。肉眼観察では、上層の杭使用材等とは、変らない。樹種同定の結果では、1はヤマモモ、4はヤブツバキとされる。

敷粗朶の枝片

6～8は、S X 2318下部の腐植土より出土した。6には端部を切り落とした痕跡がある。7・8には縦方向に裁断した際のステップが認められる。8はサンプリングの結果、サカキとされる。腐植土層中には、この樹木が多い。これらの資料が敷粗朶層と連続的な関連を示すかは微妙だが、裁断痕跡が認められることから一連の人為的行為と考えるほうが理解しやすい。

#### (5) 小 結

調査では、柵列2条、土坑4基、政庁Ⅱ期造営に関連した整地層とその基底に埋設された筏状遺構を検出した。柵列は、東西4間で東側に1間分とりついてL字となるS A 4635、南北3間となるS A 4640がある。前者は、第81次調査で検出した朝集殿と考えられるS B 2300の南側に近接している。柱筋で見ると約1.5m南側に位置し、主軸方位は4°59' 1"で建物と同じく東へ触れる。S B 2300は、10間×4間の四面庇建物で、柱間は桁・梁行共に2.4mである（九州歴史資料館1983）。掘形埋土から老司Ⅱ式（275B）が、柱痕跡から鴻臚館式軒丸瓦（223A）がそれぞれ出土している。この他、掘形埋土からは、8世紀第1四半期の土器が出土しており、造営は政庁Ⅱ期に併行すると考えられている。また、観世音寺創建瓦の老司Ⅰ式に後出する老司Ⅱ式と大宰府政庁Ⅱ期の創建瓦である鴻臚館式との時間的前後関係から、長期的に置かれた建物でないとして理解される。S A 4635については、現状の規模で収まる限り、S B 2300と一時期併存した可能性もある。またS A 4640については、南側で削平を受けている可能性があるが、主軸の振れから、ほぼ同時期と考えることができる。

S B 2300  
の位置

これらの遺構が配された広場S H 2500は、第81次調査において、東西の谷筋S X 2318・2319を整地しながら埋めたことが明らかとなっている（Fig.14, PL.1）。特に西側のS X 2319は、黒色の腐植土に盛土を行って幅1mの溝を造りながら石組暗渠S X 2320を埋設し、整地を行っている。その埋設過程は南へ展開する整地作業と連動しており、蛇行する暗渠の屈曲部と整地土の傾斜が対応することから、両者は一連の造作と理解されている。

S H 2500  
の造成

今回検出した東の谷筋S X 2318では、最も深くなる中央付近において、腐植土層上面に敷粗朶を置き、その上に枝葉を挟みながら粘質土を埋積し、筏状遺構S X 3937を配している。そして、そのまま上層へと連なる整地を行っている。このS X 2318については、北側の第81次調査において、腐植土が認められるが堆積は浅く、下縁幅3m程度の溝の中に谷筋の長軸に併せて杭が打ち込まれていることを確認している。今回検出したS X 3937はこの南側の延長となる。作業工程という点からみる限り、谷筋S X 2318・2319の造成に大差は無い。また、第86次調査では、石組暗渠S X 2320下位で一部ではあるが、敷粗朶と捉えうる枝片も確認し

II 大宰府跡の調査

ている。

さらに出土遺物から見た場合、SX2318の整地土には7世紀第3四半期以降の土器が含まれていることから、SX2319の時期とも矛盾はない。SX3937は、調査状況から理解する限り、一連の作業の中で埋設されたものであり、一定の時間地表に露出した状況はない。また、

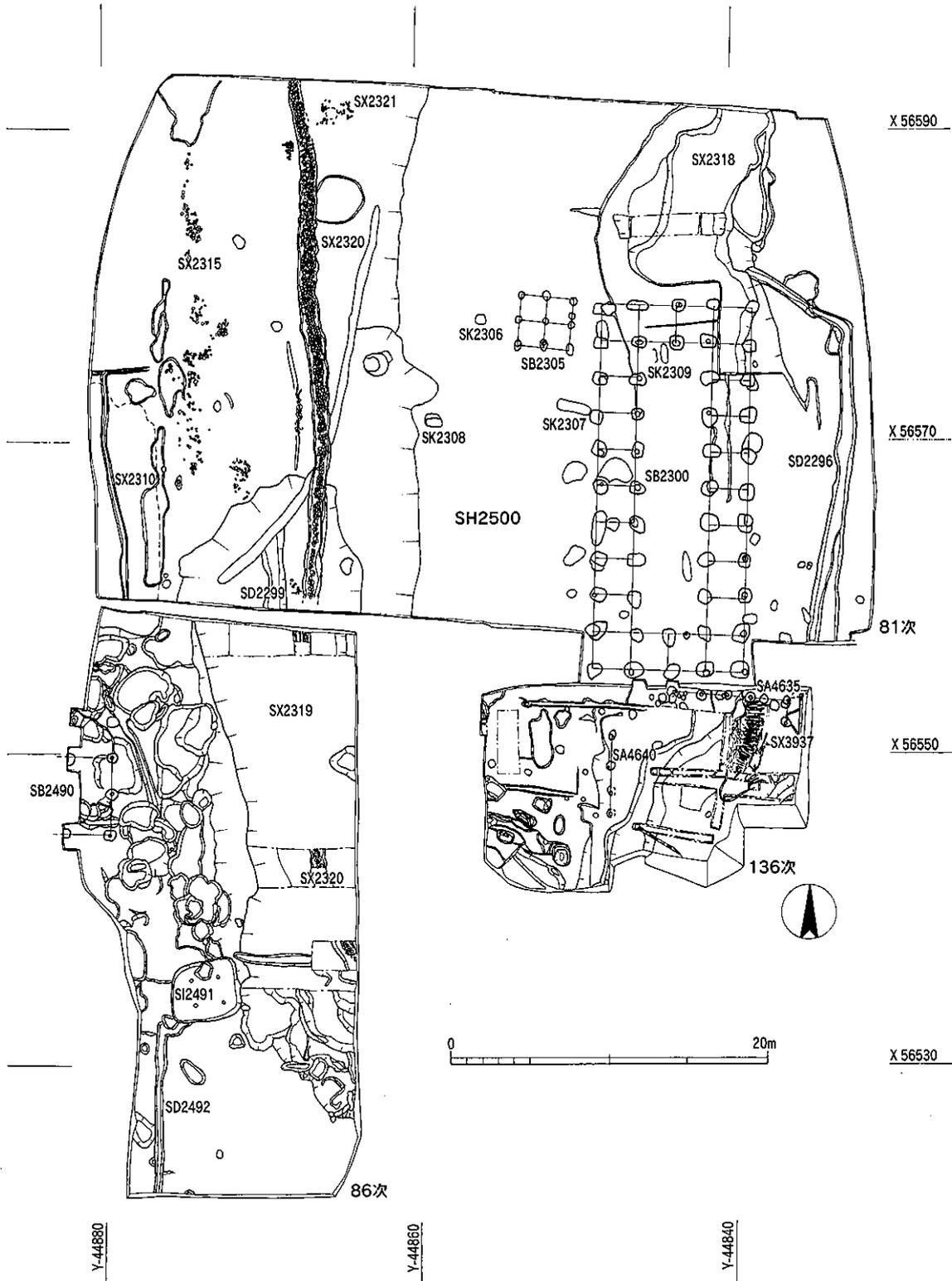


Fig.14 政庁域前面広場SH2500遺構配置図 (1/300)

遺構の在り方から、水抜きの効果は期待できるが、枕木と縦木の間には流水の痕跡は見られなかった。むしろ具体的な機能を想定すれば、谷部を埋める際の地盤強化が主目的であったと考えられ、ぬかるみを防ぎながら効率よく整地作業を展開するために配されたと理解される。

これらの整地層は、第81次調査区よりもさらに北から始まることが分かっており、南に向かって展開した一連の整地作業と考えられている。これまでも指摘されているように、政庁正面に広場を造成するために行われたのであろう。この整地事業によって埋められた、2条の谷筋S X 2318、2319については、造成以前の旧地形の上部削平によるものか、あるいは別の遺構を埋めたものか、調査では確認できていない。ただ、蛇行する両谷が北から南へ向かうにつれて、深くなる状況や今回検出したS X 2318が南方で著しく南西に進路を変える状況から、東西に谷を持った低丘陵地を削平して埋めた状況も十分考えられる。

大宰府内において、このような軟弱地盤の補強を目的とした技術は天智天皇三年（664）に築造された水城にまで遡る。水城では、第24・35次調査などで基底部内に敷粗朶を埋設したことを確認している（九州歴史資料館1994・2003）。また、第25次調査では、梯子状に置かれた枕木状遺構も検出されている（城戸編1994）。

大宰府の  
地盤補強

さらに政庁域周辺官衙では、蔵司地区第54次調査の築地S A 1400整地層下位において、表皮を残した「丸太材」を配したS X 1406と、その周辺部に「植物繊維」が敷き詰められた状態が確認されている（九州歴史資料館1979）。そして、その下位には腐植土がある。谷部の軟弱地盤上に築造された築地S A 1400は8世紀初頭～前半とされ、S X 1406では、7世紀後半～8世紀の遺物が出土しており、時間的には連続した一連の整地地業と見られる。詳細は本報告に譲るが、性格不明とされたこのS X 1406もS X 3937と同様に、地盤強化を目的として設置された可能性が高い。

このような官衙施設造営に関する地盤補強技術は、東北地方の多賀城でも確認されている（宮城県多賀城跡調査研究所1982・2006）。第38次調査では、低地における地盤沈下を防ぐための基礎事業として筏状に組まれたS X 1261が検出されている。

以上のような状況から、古代における地盤補強技術の一つとして、筏状遺構S X 3937を理解することができる。大宰府内では水城の築堤以降、地盤強化を目的とした土木技術として保持されていたと考えられ、政庁Ⅱ期の造営に連動して各施設が造営・整備される中で、積極的に採用されたと理解される。

#### 【参考文献】

- 九州歴史資料館1979『大宰府史跡昭和53年度発掘調査概報』
- 九州歴史資料館1983『大宰府史跡昭和57年度発掘調査概報』
- 九州歴史資料館1994『大宰府史跡平成5年度発掘調査概報』
- 九州歴史資料館2003『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 城戸康利編1994『水城跡』太宰府市の文化財 第24集 太宰府市教育委員会
- 宮城県多賀城跡研究所1982『宮城県多賀城跡調査研究所年報1981 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡研究所2006『宮城県多賀城跡調査研究所年報2006 多賀城跡』

## 2 第196次調査（大楠地区の緊急調査）

### （1）調査概要

**経 過** 今回の調査は大楠地区の宅地の新設に伴い実施したものである。太宰府市教育委員会及び地権者との協議により、平成18年6月5日に調査を開始し、トレンチをA～Dの4ヶ所を設定した上で、重機による掘削を行い、さらに作業員による人力掘削の後、6日に各トレンチの写真撮影を行い、図面作成の後、6日にAトレンチ、8日に残りのトレンチを重機により埋め戻しを行って終了した。調査面積は18㎡である。

**位 置** 大楠地区官人居住域の南部にあたり、御笠川北岸の標高約32mの沖積地に立地している。今回の調査対象地の南東部は、第88次調査地の北西隅部と重複している。第88次調査地では小型の掘立柱建物や井戸など、官人の居住を示すような遺構が多く検出されている。地番は観世音寺2丁目129・130番地にあたる。

### （2）基本層序

本調査区の基本層序（Fig.15土層図）は、上層から表土（約10cm）、区画整理事業時の盛土（花崗岩パイラン土・約50～90cm）が堆積し、その下層に旧表土の黒～黒褐色土（約20cm）、旧耕作土（床土）の黄灰～灰色土（約20～30cm）が堆積する。さらにその下層には、遺構面となる褐～黒褐色の整地層が約30～50cm堆積し、地表下約110～200cmで暗褐色土の地山層に達する。ただし、Aトレンチでは、整地層は確認されなかった。整地層からは9世紀代を基調とする時期の遺物が含まれており、その時期の整地の後に、遺構が形成されていると考えられる。

### （3）検出遺構

今回の調査では、柵列1条、溝2条、溝状遺構1箇所と整地層が確認された。

#### 柵 列

#### SA2564 (Fig.16, PL.12)

Aトレンチのほぼ中央でSD2582の北端部にかかる形で柱穴1基を検出した。隣接する第88次調査北西隅部においてSD2582の北端部に併行する柵列が検出されており、その柵列とつながることから同じ柵列SA2564の柱穴と判断した。第88次調査では柱間2.12mもしくは2.36mであるが、今回検出した柱穴と第88次調査区の一番西側の柱穴との間隔は5.00mあり、この間にもう1つ柱穴がある可能性が高い。柵列はSD2582に沿う形で作られており、SD2582が第88次調査区の東側でやや北側に軸を曲げているが、柵列もそれに合わせてやや北側に軸を曲げている。今回の調査で検出した柱穴よりさらに西側にも柵列が続くと考えられるが、調査が遺構の上面検出にとどまったことと、調査範囲が狭いことにより明瞭には判明していない。また今回検出の柱穴の深さ等も不明だが、第88次調査検出の柱穴は深さ約0.15～0.4mで、穴の底面の標高は30.80m前後に位置している。おそらく単なる柵列というよりはSD2582に付属する施設であると考えられる。

SD2582  
に付属する  
柱穴列

#### 溝

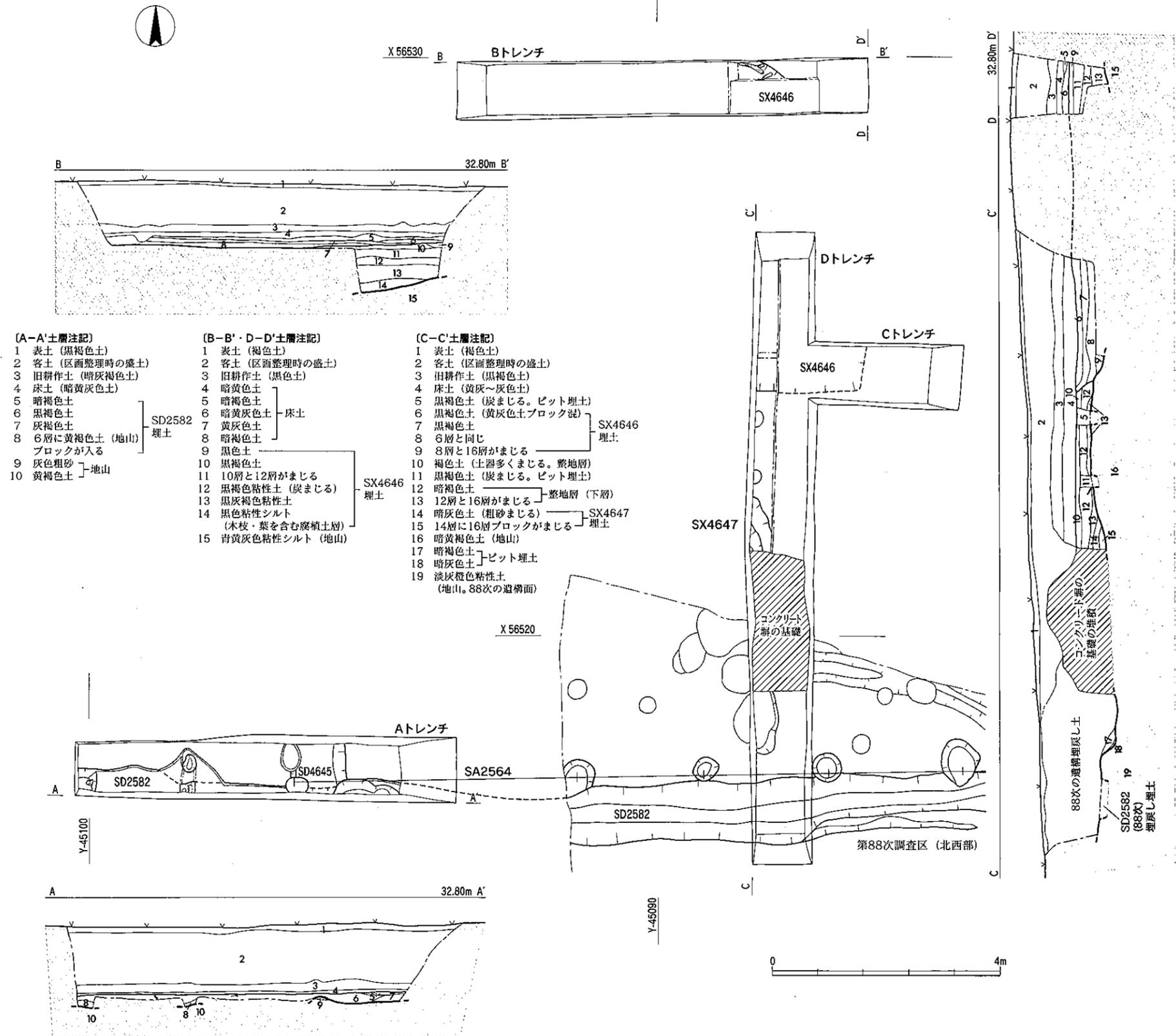


Fig.15 第196次調査遺構配置図・土層図 (1/80)

**SD2582 (Fig.15, PL.12)**

Aトレンチの南半部を東西に走る形で検出された。第88次調査においても検出されており、併せて約20m分検出したこととなる。幅や深さ等は今回の調査ではわからないが、第88次調査では幅0.85~1.0m、深さ0.35mの規模で、緩やかに西側に傾斜した形で検出されている。今回の調査では溝には黒褐色土が堆積し、検出した範囲では幅0.4m以上、深さ0.2m以上である。

88次調査区  
からつながる  
東西溝

**SD4645 (Fig.15, PL.11)**

Aトレンチの東側を南北に走り、南端部をSD2582に切られる。幅1.0m、深さ0.1mと浅い溝で、切り合い関係からSD2582より古いと考えられるが、黒褐色を基調とする埋土でSD2582と類似する。さほどの時期差はないのかもしれない。

**溝状遺構**

**SX4646 (Fig.15, PL.12)**

B・C・Dの各トレンチで検出された。C・Dトレンチの北部で北西側に落ち始め、Bトレンチは全てSX4646の遺構内にあたる。地山層から切り込んでいるのではなく、他のピットと同様、その上層の褐~暗褐色整地層から切り込んでいる。現状で南北6m以上、東西7m以上、深さ0.8mの溝状を呈するが、全体の形状については不明であるため「溝状」遺構とした。Bトレンチ東側の掘り下げ状況からみて、西側に落ちている状況が看取することができる。埋土は上層は黒~黒褐色を基調とする土層だが、下層へ行くに従い、黒~黒灰色の粘性の強いシルト層へと推移する。最下層は腐植土層となり、枝や葉の植物遺体が出土した。一定の期間、滞水状況にあったことを示すものであろう。

**整地層**

**SX4647 (Fig.15, PL.11)**

Dトレンチのほぼ中央で検出された。南西側にかけて地山を掘り込む形で広がっており、南側はかつての地割りの段差と区画整理事業時に崩されたコンクリート塀により不明瞭となっている。深さ0.3m。落ち込み内には整地により、暗灰色土層が堆積する。この遺構の上層に覆わ

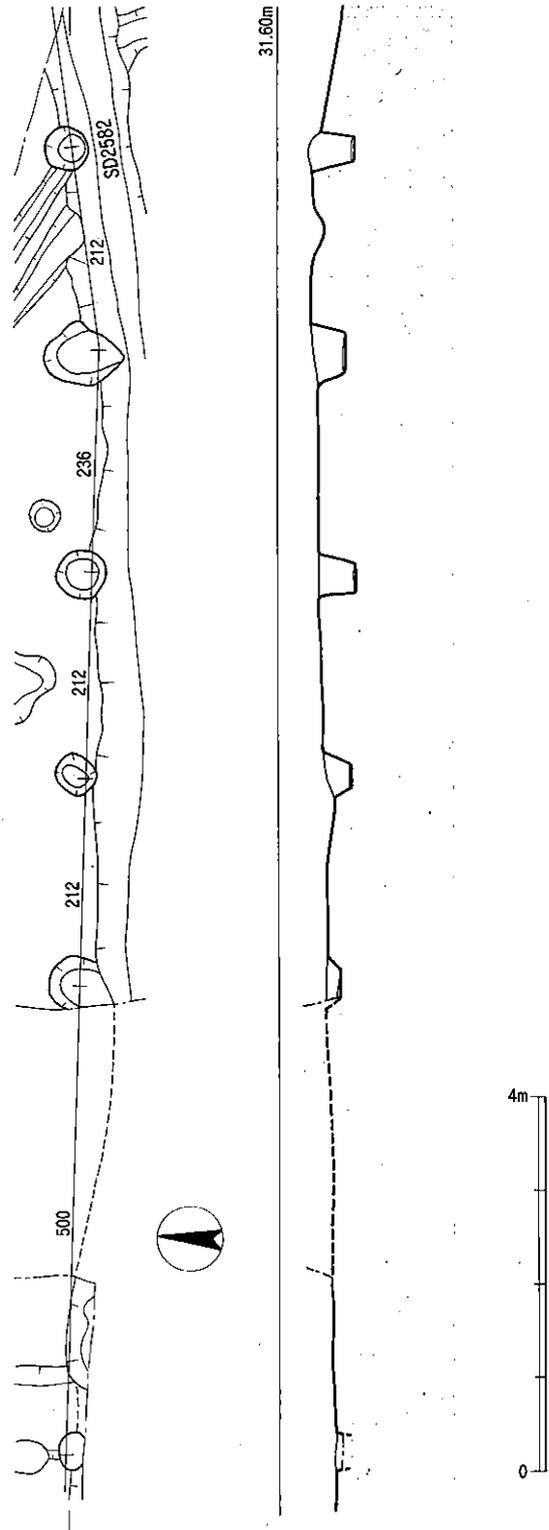


Fig.16 柵 S A2564実測図 (1/80)

II 大宰府跡の調査

れる整地層と一連のものと考えられる。

(4) 出土遺物

S A 2564出土土器 (Fig.17, PL.30)

須恵器

壺 (1) 有頸壺の体部の破片で、内外面にヨコナデを施す。焼成良好で胎土は堅緻。

S D 2582出土土器 (Fig.17, PL.30)

土師器

椀 (2) 体部から高台部にかけての破片。赤褐～明褐色を呈し、胎土はやや軟。

黒色土器

椀 (3) 内面のみ黒色のA類。断面三角形の高台が付される。復元高台径6.7cm。

S D 4645出土土器 (Fig.17, PL.30)

土師器

椀 (4) 高台部の破片で、明褐～明赤色を呈する。復元高台径8.3cm。

S X 4646出土土器・陶磁器 (Fig.17, PL.30)

当該遺構はDトレンチの調査において、当初、下層の整地層との峻別がつかないまま掘り下げたため、遺構内であることが確実なBトレンチ出土の11の黒色土器を除き、下層の整地層から出土したものと混在した状況である。しかし、それらの遺物にはあまり時期差はないようであることを付け加えておく。

須恵器

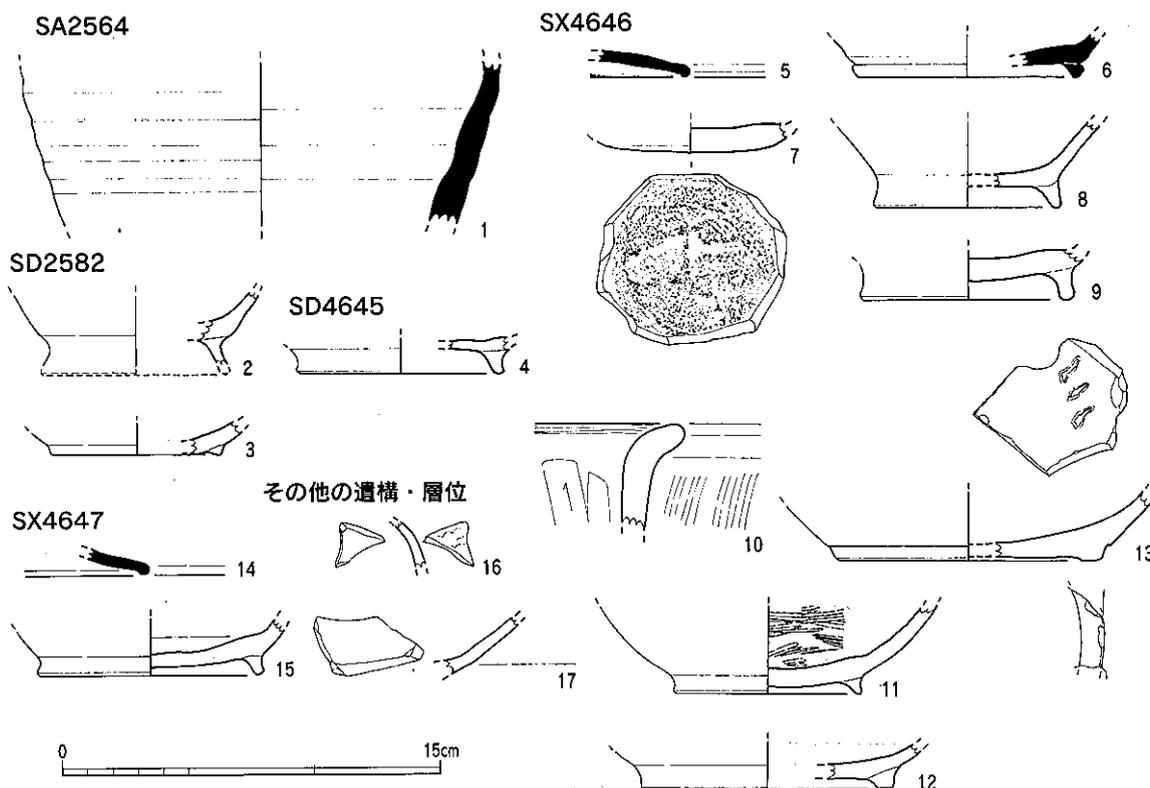


Fig.17 第196次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

蓋 (5) 口縁端部をわずかに膨らませる形態のもの。内面がわずかに平滑で、硯に転用された可能性も考えられる。

坏 (6) 外底端部に断面略三角形の高台が付される。胎土はやや粗い。復元高台径9.2cm。

#### 土師器

坏 (7) やや厚いへら切りの底部が残る。底径6.6cm。残存する平面形態が円形を呈し、意図的に再加工されている可能性がある。

碗 (8・9) 8は赤褐色を呈し、やや高めの高台を持つ。復元高台径7.5cm。9は底部が完存する。高台径8.5cm。

甕 (10) 石英や雲母を多く含む暗褐色の胎土で、外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケ、内面に縦方向のへらケズリを施す。

#### 黒色土器

碗 (11・12) 共に内面黒色のA類。11の内面には明瞭に細かいへらミガキが残る。11の底径は7.5cm、12の復元底径は10.0cm。11は赤褐色、12は白っぽい褐色の胎土。

#### 青磁

碗 (13) 全面にやや白濁した淡緑灰色の釉がかかり、輪状高台を持つ越州窯系のI-2類。内面見込みと高台付部に白色の目跡が残る。復元高台径10.5cm。

S X 4647出土土器 (Fig.17, PL.30)

#### 須恵器

蓋 (14) 口縁端部の破片で、端部にわずかに段を施す。内面は平滑で、硯に転用された可能性も考えられる。

#### 土師器

碗 (15) 体部下位から高台にかけての破片。赤褐色を呈する胎土で、復元高台径9.0cm。

その他の遺構・層位出土陶磁器 (Fig.17, PL.30)

#### 灰釉陶器

壺 (16) 灰白色の精良な胎土に、外面にのみ緑灰色の釉がかかる小片。他の器種の可能性も考えられる。AトレンチS-5 (ピット) から出土した。

#### 青磁

碗 (17) 越州窯系の体部片で、灰色の胎に内面のみ暗緑黄灰色の釉がかかる。外面は露胎で、表面は暗赤色を呈する。Dトレンチ遺構面上から出土した。

瓦類 (Fig.18, PL.30)

本調査区では、パンケース1箱分の丸瓦・平瓦片が出土している。そのほとんどは縄目の叩打痕を持つものであるが、ごく一部に斜格子の叩打痕を持つものも出土している。また、道具瓦は面戸瓦が1点出土しており、以下に報告する。

面戸瓦 (1) 右側部の内湾部分が残存するため、面戸瓦と推測されるもの。凸面に縄目、凹面に布目を残す。右側部とそれに接する内面はケズリを施す。S X 4646 (Bトレンチ) から出土した。

鉄製品 (Fig.18, PL.30)

板状製品 (2) 厚さ2mm、重さ1.8gの鉄板状の破片。Dトレンチ遺構面上から出土した。

II 大宰府跡の調査

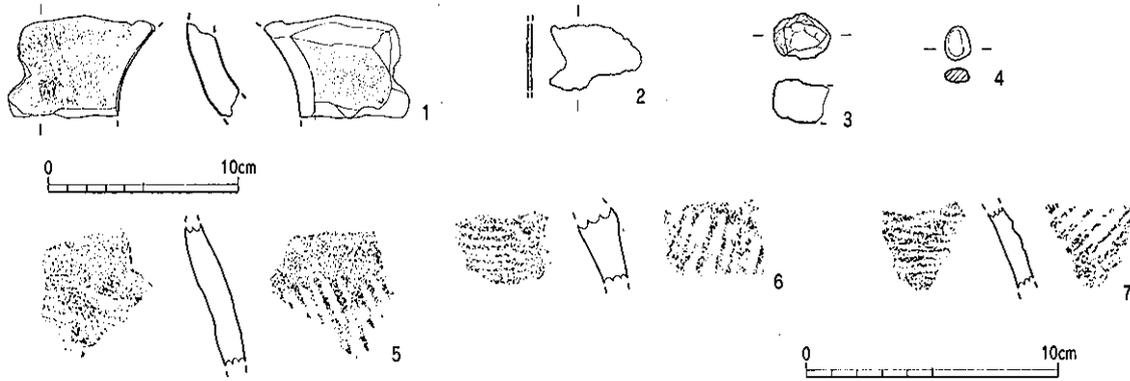


Fig.18 第196次調査出土瓦・鉄製品・製塩土器等実測図 (1/3・1/4)

鑄造・鍛冶関連遺物 (Fig.18, PL.30)

不定形鋳滓 (3) 暗灰～暗褐色を呈する小片。破面が多く、所々に気泡が見られる。メタル度は錆化 (△) で、重さ10.1g。S X4646 (Dトレンチ) から出土した。今回の調査では他に鑄造・鍛冶関連遺物の出土はない。

石製品 (Fig.18, PL.30)

碁石状石製品 (4) 白色を呈し、平面形が長楕円形の石英製。重さ1.0g。S D2582から出土した。今回の調査では他に石製品の出土はない。

製塩土器 (Fig.18, PL.30)

5～7はI類の製塩土器で、いずれも暗褐～赤褐色の胎土で、外面に縦方向のタタキ、内面に横方向の当て具痕が残る。5は頸部に近い破片であり、内面上位にヨコナデが確認される。いずれもS X4646 (Dトレンチ) から出土した。これらの他にI類は何点か確認されている。

(5) 小 結

繰り返しになるが、今回の調査では、柵列1条、溝2条、溝状遺構1箇所と整地層が確認された。中でも東西溝S D2582が検出されたことで、第88次調査で検出された同溝がさらに西側へ延伸することが判明した。また、Dトレンチにおいていくつかのピットと溝状遺構S X4646が検出されたが、それらの遺構は地山直上から掘り込まれているのではなく、上層の暗褐色の整地層から掘り込まれていることがわかった。この整地層からは9世紀代の遺物が見られることから、整地と遺構の構築の時期がおよその時期であることが特定できる。第88次調査では地山直上において遺構が検出されていたが、おそらくこれは遺構面が削平されていたためであり、本来は整地層から掘り込まれている可能性が考えられる。また、B～Dトレンチで検出された溝状遺構S X4646は、調査区の西側にかけて傾斜していることがわかったが、トレンチ調査であるため全体のプランを確認するまでには至らなかった。大型の遺構であり、大楠地区の南側の官人居住域を区画するような遺構である可能性も考えられる。

今回検出された遺構の多くは、9世紀代に構築され、遅くとも10世紀前半には埋没しているようであり、さほど長期間にわたって継続したようではないと考えられる。今回は調査範囲も狭かったため、今後、周辺の状態とも考え合わせながら、これらの遺構の性格について大楠地区の正式報告時までには明らかにしていきたい。

玄海灘式製塩土器の出土

9世紀の整地の上面から遺構が形成

### 3 第197次調査（日吉地区の緊急調査）

#### (1) 調査概要

**経 過** 第197次調査は、日吉地区の住宅建設に伴い実施した。太宰府市教育委員会及び地権者との協議により、平成18年12月14日に調査を行った。バックホーを使用して、調査区北側に3箇所のトレンチを設定し掘り下げた (Fig.19)。しかし遺構を確認できなかったため、同日にトレンチの埋め戻しを行い、調査を終了した。調査面積は9㎡である。

**位 置** 当調査地は御笠川の氾濫源に当たる日吉地区官衙の南西側に位置し、御笠川北岸の標高約31mの沖積地に立地している。日吉地区官衙では、北側の第75次・80次・114次・153次調査から政庁第II期の成立期を前後した段階に造営された大型掘立柱建物と柵列を検出している。しかし南側では、ほとんど調査は行われておらず、日吉地区官衙域の全体像について不明な部分は多い。地番は観世音寺1丁目341・342番である。

#### (2) 基本層序

本調査区の基本層序 (Fig.20, PL.13) は、厚さ40cm程の表土下に昭和54年度に行われた土地区画整理事業時の盛土である厚さ約2.2mの橙白色砂質土を確認した。遺構面を確認するために3つのトレンチの第1トレンチを可能な限り掘削し、約3m下 (標高30.4m) の青灰色砂質土まで確認した。しかし、遺構や遺物は検出できなかった。遺構面は客土された青白灰色砂質土のさらに下にあるか、又は御笠川の氾濫によって削られてなくなっていると思われる。

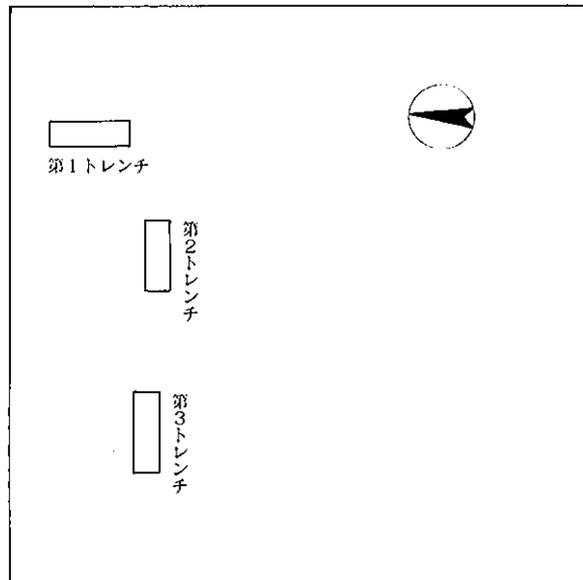


Fig.19 第197次調査トレンチ配置図 (1/300)

#### (3) 小 結

当調査区は土地区画整理事業時の盛土が厚く存在していた。土地区画整理前の地図によると、当調査区から現在の南側の国道3号線付近は一段低い水田地となっており、遺構や遺物を検出するには現表土より3m以上掘り下げる必要がある。御笠川の氾濫の影響がなければ、下層からは遺構・遺物を検出できるかもしれないが、その可能性は低いと考えられる。引き続き周辺の調査を行い日吉地区官衙の解明を行いたい。

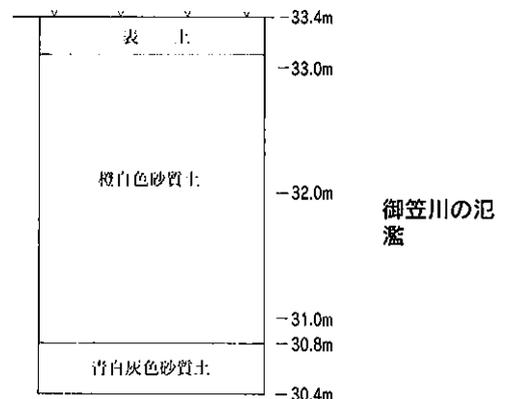


Fig.20 第197次調査土層模式図

## 4 第86-2次調査（不丁地区の緊急調査）

### (1) 調査概要

**経 過** 不丁地区の住宅建設に伴い平成19年1月22日～3月9日にかけて調査を実施した。当調査地は昭和58年度に一度調査を行った第86次調査地の南側部分にあたる。太宰府市教育委員会と地権者との協議により、住宅の建築に際しては、第86次調査の遺構図を元に現状保全を前提とし、遺構を避けて杭打ちすることで了解を頂いた。ただし、避けがたい箇所については記録保存で対応することとした。そのため、住宅建設部分にあたる第86次調査箇所を面的に再発掘し、消滅に関わる箇所を図面で確認しながら調査を行った。南北溝SD2492、竪穴住居SI2491、調査区北側の第81次調査から続く谷筋SX2319や暗渠施設SX2320、土取りの土坑などを再確認した。

なお、工事の関係上、谷筋・暗渠施設部分の調査を行うために3トレンチを西側へ延長し、さらに暗渠施設下の整地層まで掘り下げた。3月9日には埋め戻しを行い、調査を終了した。調査面積は210㎡である。

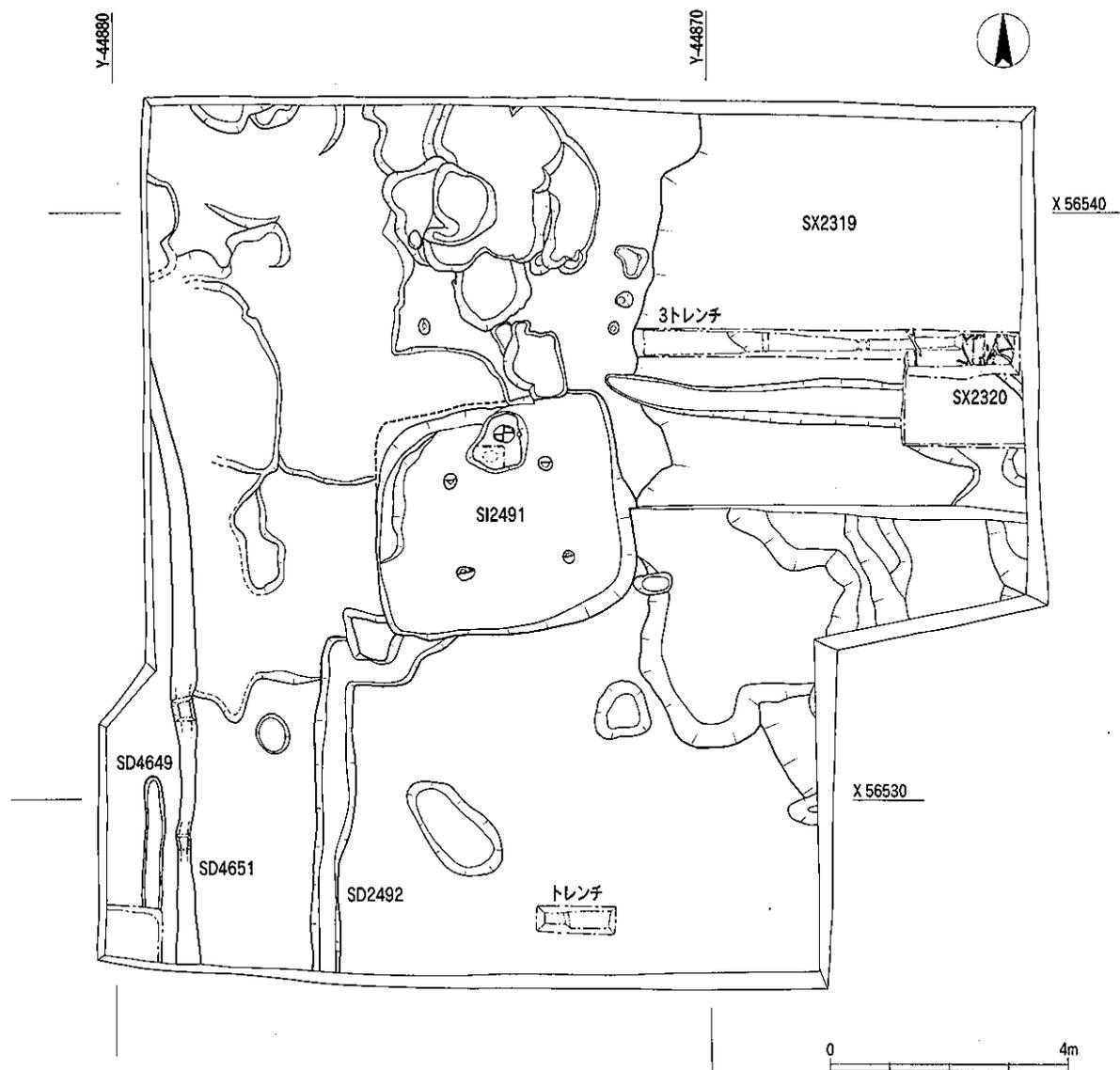


Fig.21 第86-2次調査遺構配置図 (1/120)

**位置** 不丁地区官衙の東部にあたり、御笠川北岸の標高約31mの沖積地に立地している。北東側の第81次調査地では、政庁正面広場S H2500と朝集殿と考えられる掘立柱建物S B2300や当調査地へ続く谷筋S X2319を埋めた整地層及び暗渠施設S X2320を確認している。また東側の第136次調査地では、平成17年度に第136-2次調査として再度調査を行い、整地層の下部から筏状遺構を検出している。地番は観世音寺2丁目24・25番である。

## (2) 基本層序

本調査区の基本層序 (Fig.22) は、表土下に厚さ約70cmの客土層を確認した。遺構面は標高32.8m前後の黄色粘質土で溝、土取り土坑、竪穴住居、谷筋を埋める整地層を確認した。



Fig.22 第86-2次調査土層略図

## (3) 検出遺構

### 溝

#### S D4649・4651 (Fig.21, PL.14)

調査区南西隅部分において南北方向の溝2条を新たに検出した。埋土は灰色土に粗砂や10cm程の礫石などを含んでいた。S D4649は長さ約2.4m、幅0.3m、深さ0.15mの比較的浅い溝で、南側部分は攪乱されていた。S D4651は長さ10.4m、幅0.4m、深さ0.35mを測る。北側部分では北東方向へ向きを変えている。この2条の溝は、共に遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 竪穴住居

#### S I2491 (Fig.23, PL.15)

前回の調査では、竪穴状遺構として報告した遺構である。再調査の結果、遺構内からは径0.2m、深さ0.2mの4本の支柱穴、また北側中央付近に径0.3m、厚さ0.2m程の焼土面を確認し、この部分に竈を付設していたものと思われる。竪穴住居は隅丸方形の形状を呈し、長軸4.3m、短軸4.0m、深さ0.3mを測る。出土遺物はほとんどなかったが、谷筋S X2319の整地層との関係から、7世紀以前の住居跡と考えられる。なお、竈の右袖部分からは土師器甕の底部片が1点出土した。

7世紀以前の竪穴住居

### 谷筋・暗渠施設

#### S X2319・2320 (Fig.24, PL.16~18)

谷筋S X2319と北側の第81次調査から続く暗渠施設S X2320は、水の通りを良くするために幅約1.3m、深さ0.15mの溝の内部に約10cmの礫石を敷き、砂で覆った遺構である。この礫石を外して整地層最下部まで掘り下げた。結果、谷底に10~15cmの厚さで木や葉などを敷き詰めた敷粗朶の層を確認した。さらにその上には粘質土や暗褐色土などを埋めて整地していた。またS X2320は整地の途中で、厚さ約15cmの灰白色粘質土層（53層）を掘り込む形で造られていた。調査範囲が狭いため、第136-2次調査検出の筏状遺構S X3937のような施設は

敷粗朶

II 大宰府跡の調査

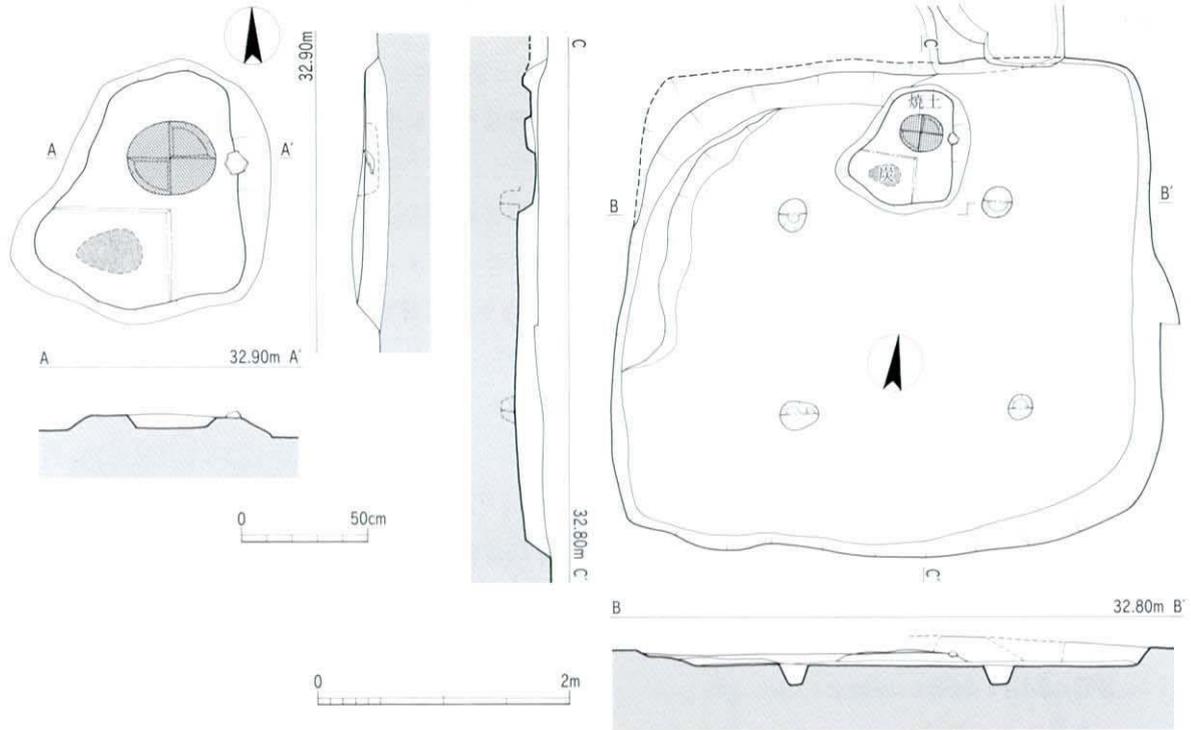
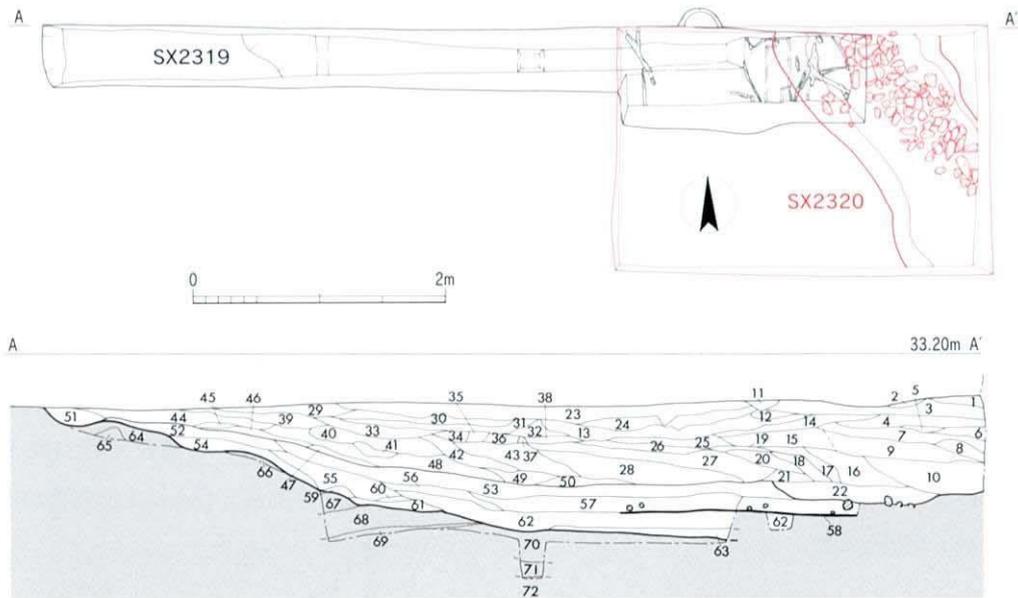


Fig.23 竪穴住居S 12491実測図 (1/30・1/60)



- |                    |                              |                             |
|--------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1 茶灰色砂礫            | 27 淡灰黄色砂質土                   | 50 49層とほぼ同じ                 |
| 2 濁茶色土             | 28 17層に黄色の斑点入り               | 51 黄褐色土に黄褐色土が混ざる            |
| 3 黄色粘質土 (黒色斑点入り)   | 29 暗褐色土 (固くしまる)              | 52 灰白色土に黄褐色土が混ざる            |
| 4 黒茶色粗砂            | 30 暗褐色土に黄色土が混ざる              | 53 灰白色粘質土に黄褐色粘質土と           |
| 5 4層に淡黄色の斑点入り      | 31 黄色土に暗褐色土が混ざる              | 灰黒色粘質土が混ざる                  |
| 6 淡黄色砂質土           | 32 暗褐色土に黄褐色土が混ざる (炭入り)       | (粗砂及び土器片あり)                 |
| 7 暗灰色砂質土           | 33 32層と同じ                    | 54 灰白色粘質土 (黄褐色土、鉄分)         |
| 8 濁茶色砂質土           | 34 31層に灰黒色土が少し混ざる            | 55 灰黒色粘質土に黄褐色粘質土と           |
| 9 黄褐色砂質土           | 35 灰黒色土                      | 灰白色粘質土が混ざる (木片を含む)          |
| 10 黒灰黄色砂質土         | 36 33層と同じ                    | 56 暗黒色粘質土                   |
| 11 黒茶色土            | 37 35層と同じ                    | 57 青灰色粘質土に暗灰色粘質土を含む (木片あり)  |
| 12 茶黄色土 (炭入り)      | 38 32層とほぼ同じ                  | 58 葉や枝の層                    |
| 13 黄色砂質土 (炭入り)     | 39 暗褐色土に鉄分を多く含む              | 59 灰黄色砂質土 (鉄分含む)            |
| 14 4層と同じ           | 40 黄褐色土に暗褐色土が混ざる             | 60 暗褐色土と灰黄色砂質土が混ざる          |
| 15 7層と同じ           | 41 暗褐色土 (やや粘質あり)             | 61 暗灰色砂質土                   |
| 16 10層と同じだが、砂を含む   | 42 灰褐色粘質土に黄色土を少し含む (炭入り)     | 62 暗褐色土 (木片を多く含む)           |
| 17 灰黒色砂質土          | 43 灰褐色粘質土 (炭入り)              | 63 灰黄色砂質土                   |
| 18 10層と同じ          | 44 暗褐色土 (固くしまる)              | 64 黄褐色土と黄褐色土が混ざる (わずかに炭を含む) |
| 19 灰黄色砂質土          | 45 暗褐色土に黄褐色土が混ざる             | 65 淡暗灰色砂質土                  |
| 20 濁黄色砂質土          | 46 暗灰色土 (少量の炭が混ざる)           | 66 黄褐色粘質土                   |
| 21 濁茶色砂質土          | 47 暗褐色粘質土                    | 67 灰黄色砂質土                   |
| 22 灰黄色 (傘穴の礫入り) 暗渠 | 48 暗褐色土と黒灰色土が混ざる             | 68 灰黄色砂質土 (鉄分を含む)           |
| 23 黒茶色土            | 49 灰白色粘質土と暗褐色粘質土が混ざる (粗砂を含む) | 69 暗灰色粘質土                   |
| 24 灰黄色砂質土          |                              | 70 青灰色粘質土 (粗砂を含む)           |
| 25 淡黒茶色砂質土         |                              | 71 暗灰色粘質土                   |
| 26 黄灰色砂            |                              | 72 灰黄色砂                     |

Fig.24 3トレンチ (SX2319・2320) 実測図 (1/60)

確認できなかったが、第81次調査時の写真には、それらしき木片が見られる (PL.18-4)。敷粗朶は、特にS X2320の下層に枝が多く敷き詰められていた。なお、S X2320下層の青灰色粘質土層 (57層) からは、7世紀初め頃の須恵器坏片が出土した。

#### (4) 出土遺物

##### S I 2491出土土器 (Fig.25, PL.31)

###### 土師器

甕 (1) 指押さえの痕跡が内面に残る。竈右袖部分の客土最下層から出土した。

##### S X2319出土土器 (Fig.25, PL.31)

###### 須恵器

坏 (2・3) 2は復元口径12.0cmを測る。口縁部はやや内傾し、外面底部は回転ヘラケズリ調整である。3は底部片で焼きが甘く軟質である。外面底部にヘラケズリの痕跡が残る。

##### その他の層位出土陶磁器 (Fig.25, PL.31)

###### 青磁

碗 (4) 同安窯系の碗I類の口縁部片で、内面に櫛描文が残る。廃土から出土した。

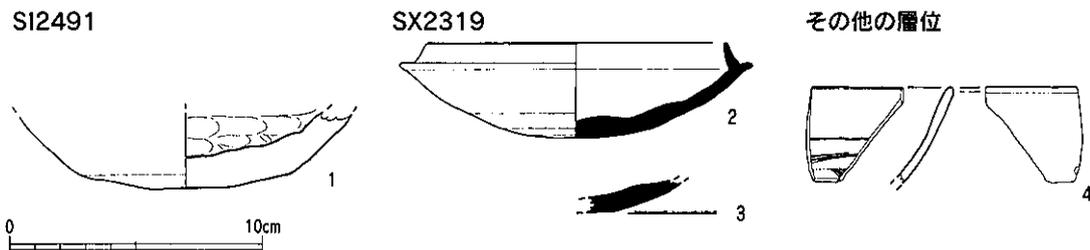


Fig.25 第86-2次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

#### (5) 小 結

今回、検出した谷筋S X2319の整地は、谷底に敷粗朶を施し、その上に粘質土や暗褐色土を埋めていた。また暗渠施設S X2320は、幅約1.3m、深さ約0.15mの溝の中に10~20cmの石を敷き、その石を砂で覆って造られていた。第81次調査の北側では30~40cmの石を蓋にして、石で組まれたような所もある。このS X2320は、S X2319内で確認されており、ここでは特に地中の水を谷筋に沿って、御笠川の流れる南側へ流すことを目的に造られたと思われる。

なおS X2319と第81次調査地検出の谷筋S X2318の整地は、政庁正面広場S H2500を造成するために、S X2320や敷粗朶、第136-2次調査検出の筏状遺構S X3937等と同じく、第81次調査検出の腐植土層を谷底に埋めて地盤補強している。その整地された場所には、政庁第II期造営と併行する掘立柱建物S B2300が造られており、このS B2300とS X2318・S X2320出土土器からS X2318・2319の整地の時期は7世紀後半以降、8世紀前半までの間と考えられる。

次に竪穴住居S I 2491は、谷筋S X2318・2319の整地から少なくとも7世紀以前の住居跡と思われる。政庁前面の造成のために竪穴住居などは削平され消滅したと考えられるが、S I 2491の存在から集落が周辺に展開していた可能性を示している。

## 5 第92-3次調査（大楠地区の緊急調査）

### （1）調査概要

**経 過** 第92-3次調査は大楠地区の住宅建設に伴い調査を実施した。太宰府市教育委員会と地権者との協議により、平成19年4月11日～4月20日にかけて調査を実施した。当調査地は昭和59年度に調査を行った第92次調査の南側部分にあたり、すぐ北側では8世紀中頃の掘立柱建物S B 2620（5間×3間の東西棟）とそれ以前の時期と考えられる土坑S K 2641が確認されている。今回の調査では、掘立柱建物S B 2620などと関連する遺構を確認するために南側の未調査地部分にL字型のトレンチを設定して調査を実施した。暗褐色整地層面で古代の遺構を確認したので調査を行った。同月20日には埋め戻しを行い、調査を終了した。調査面積は24㎡である。

**位 置** 当調査地は大楠地区官人居住域にあたり御笠川北岸標高約31mの沖積地に立地する。第92次調査では8世紀中頃～12世紀にかけての掘立柱建物・井戸・溝・土坑が確認されている。今回の調査でも暗褐色整地層上面から掘立柱建物又は柵列と考えられる柱穴列2条と溝2条を確認し、8～9世紀代の須恵器片、土師器片、平瓦、丸瓦が出土した。地番は観世音寺2丁目153番である。

### （2）基本層序（Fig.26, PL.21）

トレンチの土層は大きく4層に分けられる。第1層として表土等が厚さ20～30cm、第2層に攪乱土が厚さ30～55cm、第3層として暗褐色土の整地層を確認し、この上面において遺構を検出できた。なお、第3層の下には、地山層の灰色砂を確認し、東側では溝状遺構S D 4655を検出した。

### （3）検出遺構

#### 柵 列

##### S A 4652（Fig.27, PL.21）

柱間で約2.1mを測る東西方向に並ぶ柱穴列を確認した。柱穴は隅丸方形及び長円形で、長さ0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。中央と東側の柱穴では柱痕跡を確認し、掘形から8世紀代の須恵器片が出土した。

##### S A 4654（Fig.27）

各柱穴間で約1.2mの間隔で東西方向に並ぶ柱穴を確認した。円形～長円形の柱穴で径0.2～0.4m、中央の柱穴のみ掘下げ、深さ約0.1mを測る。土師器など小片が出土した。

#### 溝

##### S D 4653（Fig.26, PL.22）

西側で確認できた北西方向へ延びる溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.2～0.35mを測る。埋土は暗褐色土で土師器小片が出土した。

##### S D 4655（Fig.26, PL.22）

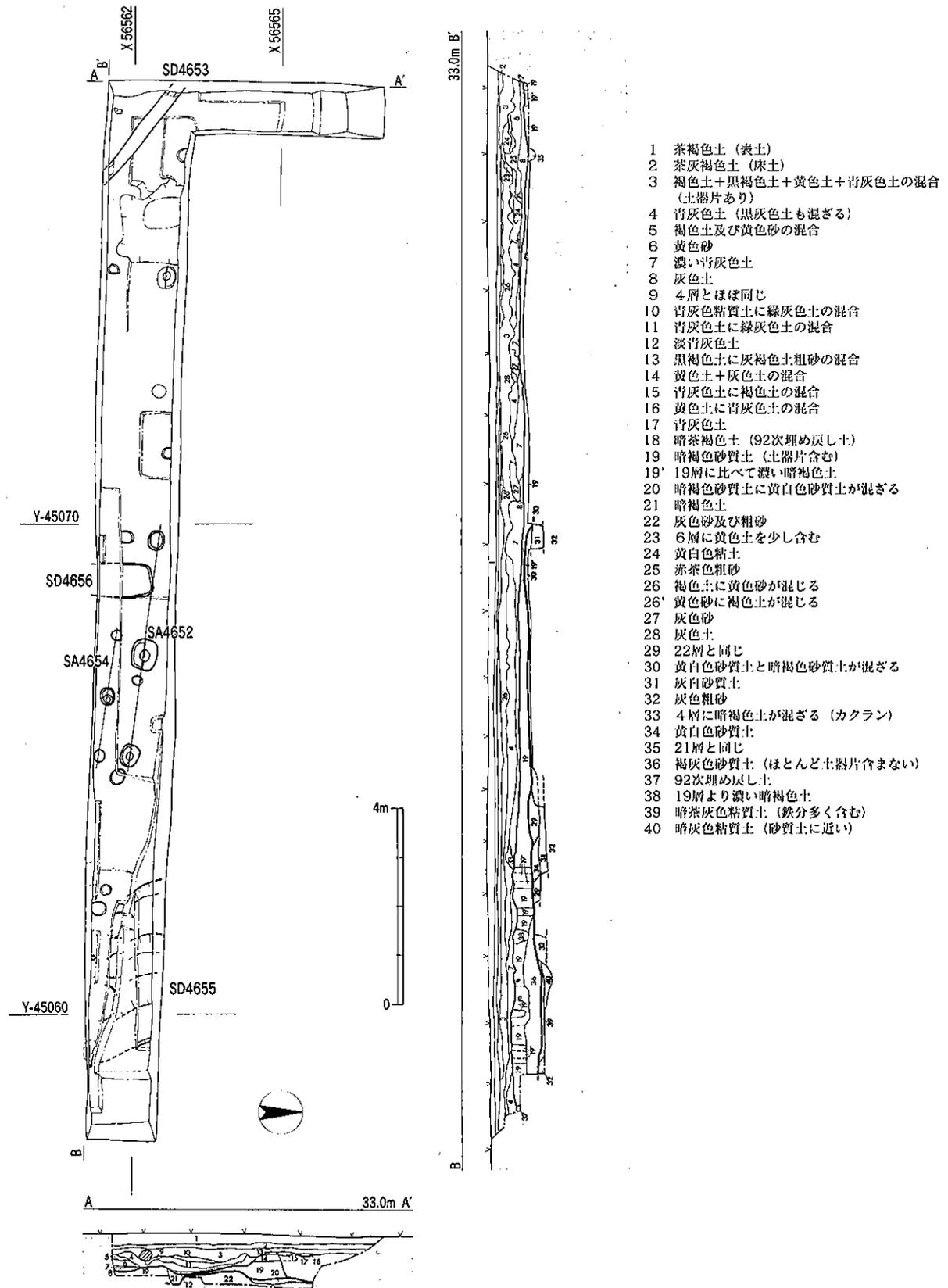


Fig.26 第92-3次調査遺構配置図・土層図 (1/120)

## II 大宰府跡の調査

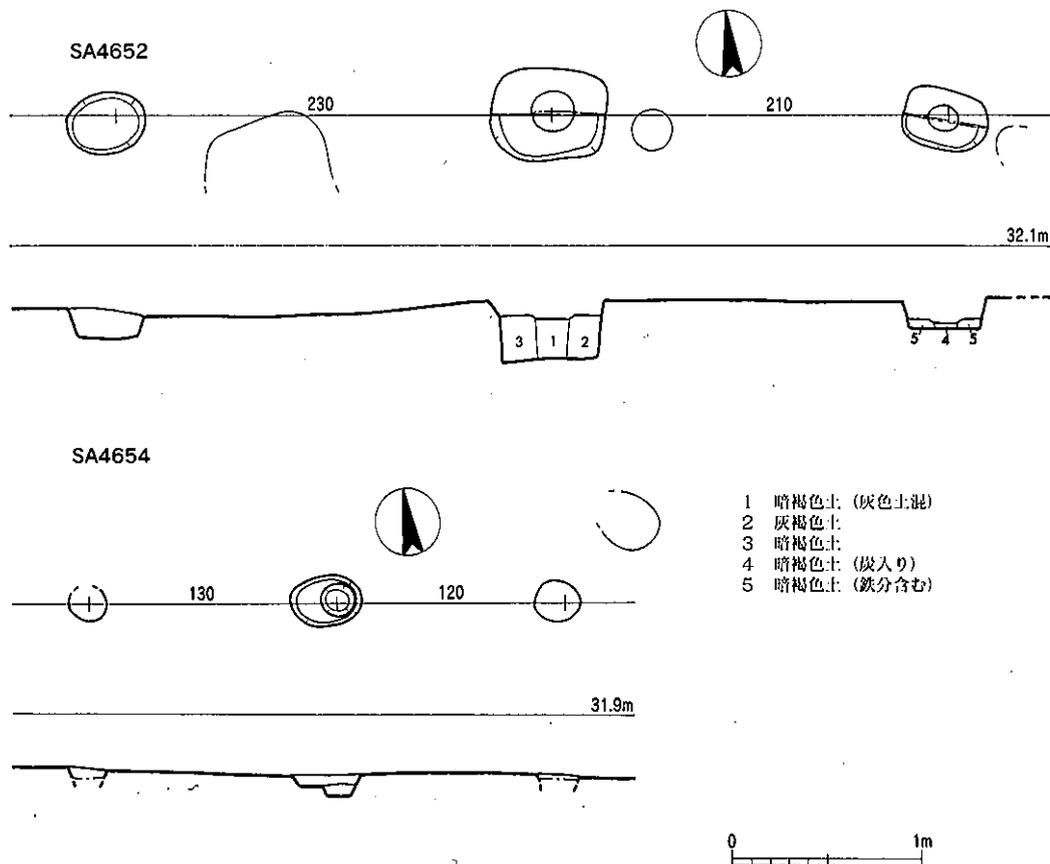


Fig.27 柵 S A 4652・4654実測図 (1/40)

前回調査の埋め戻し土を掘り下げ、東側で確認した南北方向の溝で幅2.2~3.6mを測る。埋土は暗茶色粘質土及び暗灰色粘質土が混ざっていた。遺物は出土しなかったが第3層及び第4層の整地層下から確認しており、9世紀以前の時期の遺構と考えられる。

### S D 4656 (Fig.26)

南北方向へ伸び、幅約0.6m、深さ約0.05mを測る浅い溝である。埋土は暗褐色土である。

### (4) 出土遺物

#### S A 4652出土土器 (Fig.28, PL.31)

##### 須恵器

蓋 (1) 同一個体の破片を接合して図化した。口縁部は断面三角形状を呈し、天井部外面が回転ヘラケズリで、内面はナデ、他は横ナデ調整である。復元口径21.8cm。

坏 (2~4) 2・3は共に断面四角形の低い高台を持つ。調整は底部外面がヘラ切りで、他は横ナデ調整である。それぞれ復元高台径9.2cm, 8.2cm。4は破片で、外面底部はヘラケズリ調整で、灰白色を呈する。

##### 土師器

坏 (5) 外面底部はヘラ切りで、他はナデである。黄白色を呈する。

#### 暗褐色整地層出土土器・陶磁器 (Fig.28, PL.31・32)

##### 須恵器

SA4652

5 第92-3次調査

暗褐色整地層

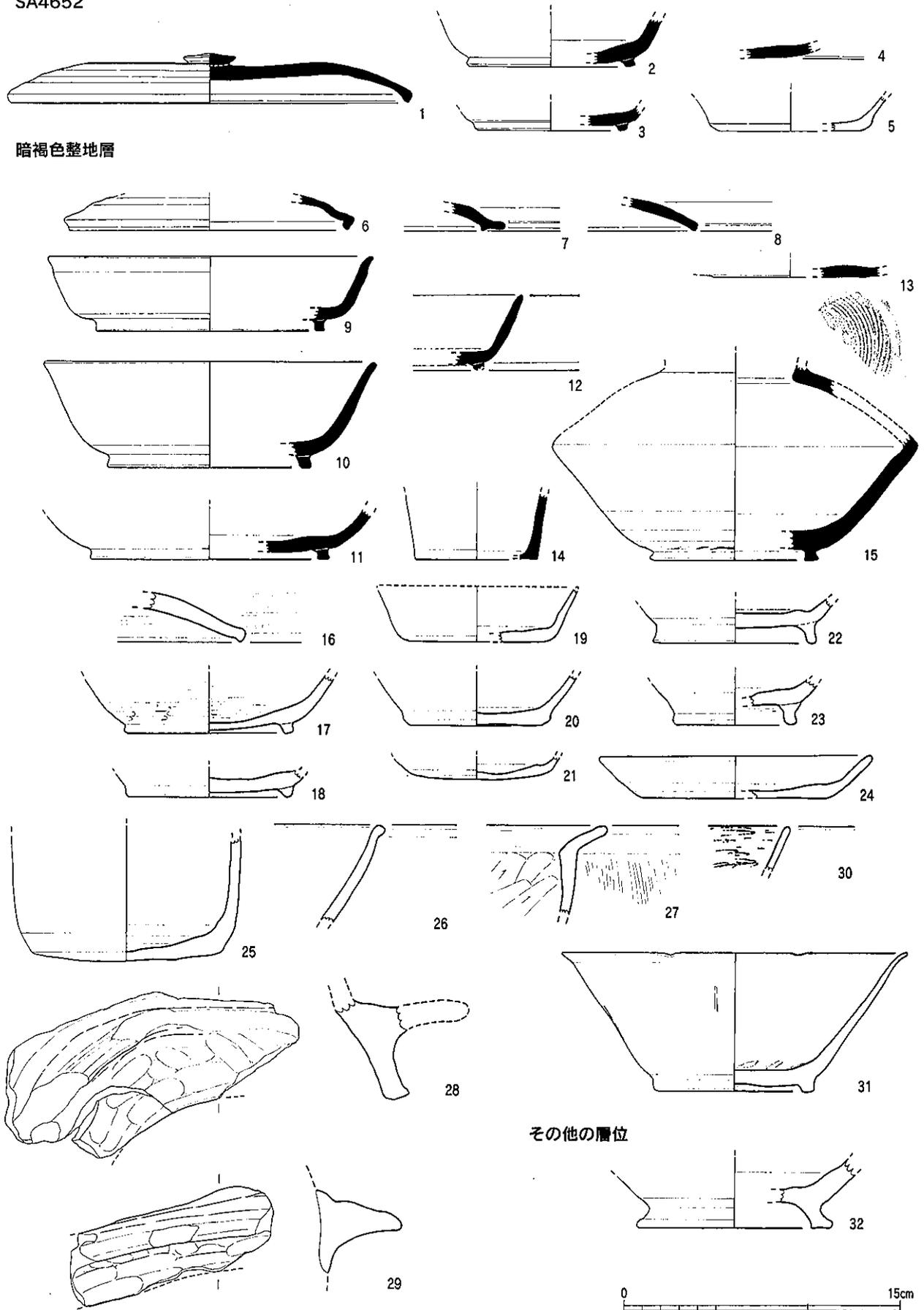


Fig.28 第92-3次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

## II 大宰府跡の調査

蓋 (6~8) 6は口縁部が三角形状を呈する。復元口径15.6cm。7は口縁部内面に僅かにかえりを有する破片である。8も破片で口縁部が三角形状を呈する。

坏 (9~12) 高台断面が四角形を呈し、色調は9のみ黒灰色で、他は灰色である。それぞれ復元口径17.6cm, 18.0cmを測る。11は復元高台径12.8cm。12は高台を欠損する破片である。

皿 (13) 底部片で外面に糸切りの痕跡が残る。色調は灰色である。

壺 (14・15) 14は底部片で、復元底径6.6cmを測る。きれいにナデ調整される。15は体部片及び肩部片から復元して図化した。高台周辺ではヘラケズリが残るが主に回転横ナデ調整である。復元高台径9.2cm。

### 土師器

蓋 (16) 口縁部は僅かに嘴状を呈し、内外面にミガキの痕跡が僅かに残る。

坏 (17~21) 17は体部下半に横方向のミガキを施し、断面四角の低い高台を持つ。18も低い高台を有する。復元高台径9.2cm, 9.0cm。19~21は高台を持たないタイプで、外面底部はヘラ切りである。19は僅かに口縁部が欠損する破片である。それぞれ復元底径8.4cm, 7.2cm, 7.8cmを測る。

椀 (22・23) 体部下半から高台にかけての破片で、23の高台は高く、断面は厚い。復元高台径8.9cm, 6.7cmを測る。

皿 (24) 口径14.8cm, 底径10.0cm, 器高2.4cmを測る。外面底部はヘラ切りで、他はナデ調整である。

壺 (25) 内外面ともナデ調整で、外面底部のみヘラ切りである。

鉢 (26) 丸みのある膨らんだ口縁部片で、内外面とも摩滅して調整不明である。

甕 (27) 外面体部は縦方向の刷毛目で、内面はケズリを施す。内面の口縁部は僅かに、横方向の刷毛目が残る。他はナデ調整である。

カマド (28・29) 移動式竈の焼き口部の破片で、つばの部分は指ナデが明瞭に残る。29はつば部分を貼り付けるタイプである。

### 黒色土器

椀 (30) 内面のみ黒色に焼されるA類で横方向のミガキ調整を施す。

### 青磁

碗 (31) 口縁端部に輪花と体部外面に篋押縦線文を有する。また内面には目跡が残る。高台壘付部のみカキ取る。他は全面に緑灰色を施釉する。越州窯系I-2・e類である。

### その他の層位出土陶磁器 (Fig.28, PL.32)

#### 灰釉陶器

壺 (32) 高台を有し、断面は肉厚である。外面はヘラケズリ、他はナデ調整である。廃土から採集した。

### 瓦磚類 (Fig.29, PL.33)

暗褐色整地層からはパンケース1箱分の丸平瓦が出土した。大半は凸面に縄目の叩打痕を持つものだが、わずかに格子目を持つものも出土している。

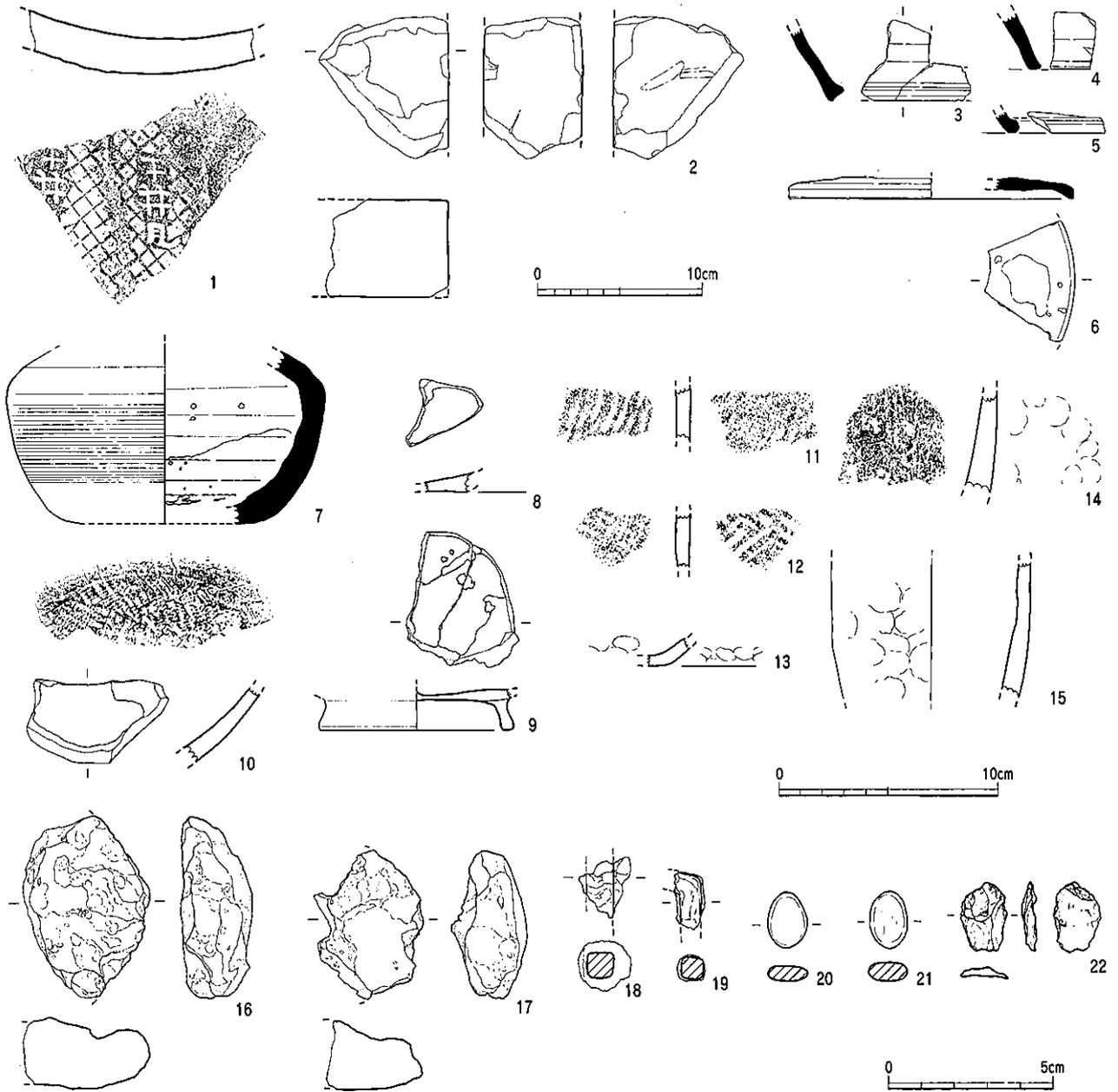


Fig.29 第92-3次調査出土瓦・硯・鉄製品等実測図 (1/2・1/3・1/4)

文字瓦 (1) 「平井瓦」銘の破片で、901B型式である。暗褐色整地層から出土した。 平井瓦  
(901B型式)  
 無文埴 (2) 3面が僅かに残る破片で色調は黄褐色を呈する。暗褐色整地層から出土した。

硯 (Fig.29, PL.33)

円面硯 (3~5) いずれも脚部下端部の破片で、3は透かし孔の部分が僅かに残る。  
 須恵器蓋転用硯 (6) 破片で復元口径13.0cmを測る。内面には僅かに墨痕が残る。3~6は暗褐色整地層から出土した。

## II 大宰府跡の調査

### 漆付着土器 (Fig.29, PL.33)

**漆付着土器** 須恵器壺 (7) 外面はナデ及びカキ目で、底部付近には格子目状の叩きを施す。内面に体部下半の内面に漆が少量付着する。攪乱から出土した。

土師器坏 (8) 底部片で、内面に暗赤色の漆が付着する。

土師器椀 (9) 高台片で、内面には暗赤色の漆が付着する。外面底部はヘラ切りを施す。高い高台を持ち、端部は外側に張る。復元高台径8.8cm。

土師器壺 (10) 体部片で内面には暗赤色の漆が剥げ落ちた痕跡が残る。内面に縦方向のケズリを施す。8~10は暗褐色整地層から出土した。

### 製塩土器 (Fig.29, PL.33)

**製塩土器** 11および12はI類の体部片で内外面に叩きと当て具痕が残る。13, 14はII類で、13と14は外面に指ナデの痕跡が残るが、内面は摩滅する。15はIII類の底部片で、指ナデの痕跡が残る。すべて暗褐色整地層から出土した。図化はしていないが他にもI類が1点、II類が1点、III類が4点ある。

### 鑄造・鍛冶関連遺物 (Fig.29, PL.33)

椀状滓 (16・17) 底面には酸化土砂が面的に付着する。16には櫛羽口の先端部が溶着した黒色溶解物がある。重さは順に213.9g, 126.7gで暗褐色整地層から出土した。

### 鉄製品 (Fig.29, PL.33)

釘 (18・19) 2点とも鉄釘の頭部近くの破片で、ほとんど残存していない。第92次調査の埋め戻し土から出土し、重さは順に2.9g, 1.6gである。

### 石製品 (Fig.29, PL.33)

玉石 (20・21) 共に白色の石英製で、碁石として使用か。重さは順に1.4g, 1.8gである。20はS A 4652出土で、21は暗褐色整地層から出土した。

### 打製石器 (Fig.29, PL.33)

微細剥離を有する剥片 (22) 最大長2.1cm, 最大幅1.3cm, 最大厚2.5mm, 重さ0.8gを測る。第92次調査の埋め戻し土から出土した。

## (5) 小 結

今回の調査では、暗褐色整地層から、8世紀後半の遺物を主体として9世紀以降の土器、陶磁器を含む多くの遺物が出土した。また調査範囲は狭いが、暗褐色整地層上面からは柵列2条と溝2条を、暗褐色整地層下からは南北方向の溝1条を検出した。

**4期の変遷** 第92次調査では、建物9棟、柵3条、井戸4基、溝、土坑、ピットを検出している。ここでは、特に建物の変遷から4つの時期を考えている。最初の第I期では、8世紀中頃の掘立柱建物S B 2620・2625・2650・2655の遺構を確認している。次に第II期では、8世紀後半

～9世紀初頭頃の掘立柱建物S B2660・2640・2645を確認している。また第Ⅲ期では、暗褐色整地層除去後に検出した円形の小掘形の建物群と井戸からなる。時期は9世紀～10世紀頃となる。最後に第Ⅳ期では、暗褐色整地層中位につくられた遺構で12世紀を下限とする時期が考えられている (Fig.30)。

今回の調査で検出した柵列S A4652は、8世紀代の土器が柱穴から出土してはいるが、I・II期の建物群と比較すると柱穴も円形の小掘形からなり、9世紀以降の暗褐色整地層の上面から掘り込まれていることから、9世紀初頭以後の第Ⅲ期頃の柵列と考えられる。他にも溝S D4653・4656の2つの溝を確認しているが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。

なお、調査区東側では、南北方向の溝S D4655を検出している。出土遺物はないが、暗褐色整地層の下層に位置するため、少なくともS A4652より古く、9世紀以前である可能性が考えられる。

いずれにせよ、今回の調査により、第92次調査区よりもさらに南側へ遺構群が広がる可能性が指摘できよう。

92次調査区より南へ遺構が広がる可能性

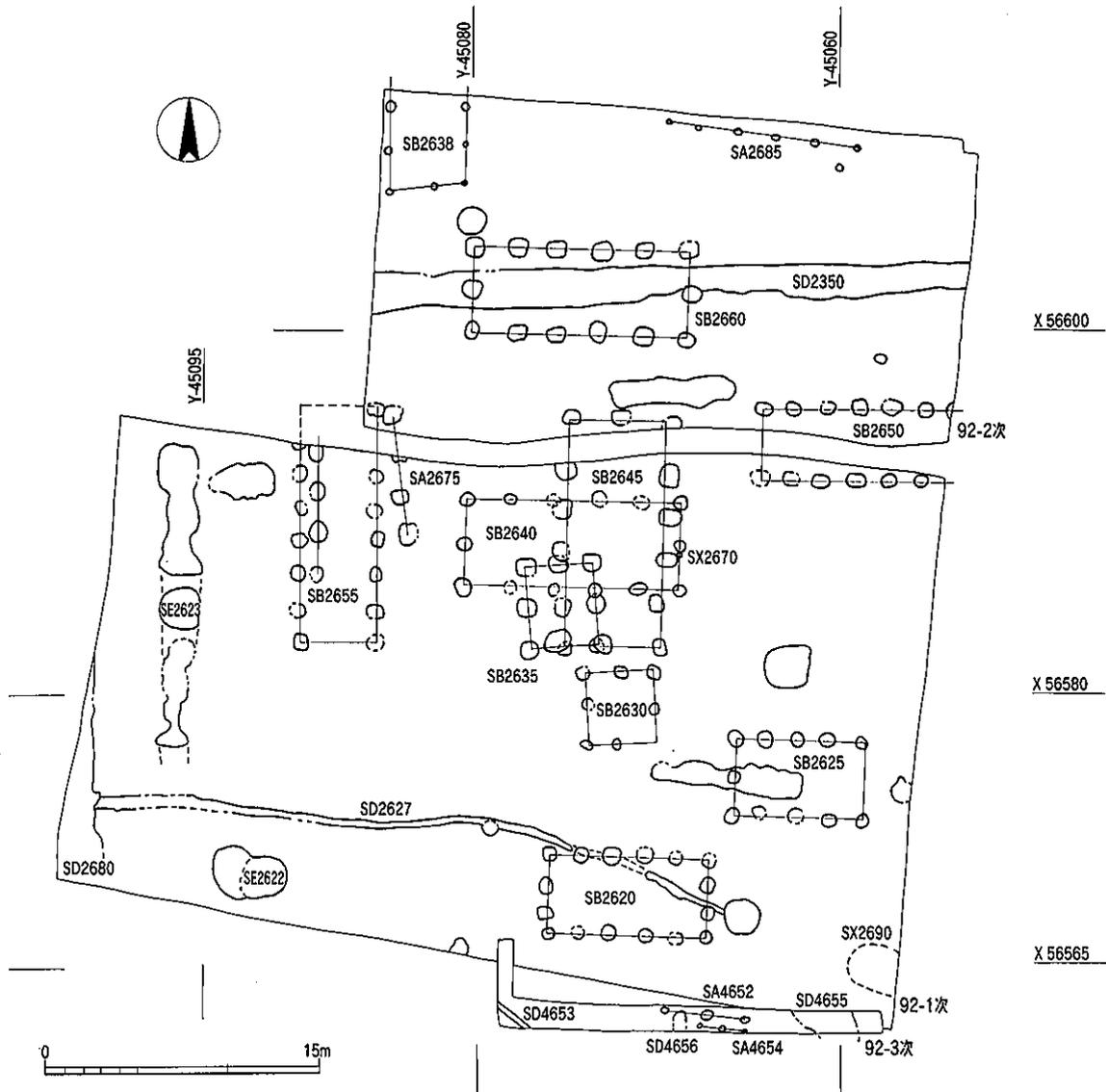


Fig.30 第92次調査主要遺構配置図 (1/400)

## 6 第198次調査（五反田地区の緊急調査）

### (1) 調査概要

**経 過** 政庁跡の南側一帯、通称「政庁域周辺官衙前面地区」の調査については、太宰府市教育委員会との協議の元、日吉地区の東側にある月山地区から南流する用水路を境界とし、その西側の4箇所（広丸地区、大楠地区、不丁地区、日吉地区）については、指定地外でありつつも重要地区であることから、九歴が確認調査を行い、用水路から東側については太宰府市教育委員会が調査を行ってきた。

今回の調査は、日吉地区の東側にあたる五反田地区の宅地の新設に伴い実施したものある。上記とおり、当該地区は太宰府市教育委員会が調査を行ってきた箇所であるが、政庁域周辺官衙の正式報告書を作成するに当たり、現段階においても未確定である官衙の東限を確認する意味において重要な地点であると認識したため、太宰府市教育委員会との協議の結果、九歴が確認調査を行う運びとなった。

実際の調査は、太宰府市教育委員会及び地権者との協議により、平成19年8月28日に行った。トレンチをA・Bの2箇所設定した上で、重機による掘削を行い、写真撮影と略図作成の後、同日に埋め戻しを行って終了した。調査面積は10㎡である。

**位 置** 日吉地区官衙の東側の五反田地区にあたり、御笠川北岸の標高約32~33mの沖積地に立地している。周辺では、過去に太宰府市教育委員会によりいくつか試掘調査が行われているが、自然流路等の自然堆積層が確認されたのみで、遺構は確認されていない。地番は観世音寺1丁目279-1番地にあたる。

### (2) トレンチ設定と基本層序

本調査区の西側には前述のとおり、月山地区から南流してくる用水路があり、そちらに向かって地形が傾斜していることが想定されたため、その落ち具合を確認する意味で、東西方向に2本のトレンチ（A・B）を設定し（Fig.31, PL.23）、調査を行った。

両トレンチの基本層序（Fig.32）は、上層から表土（約20cm）、区画整理事業時の盛土（花崗岩バイラン土・約140~150cm）が堆積し、その下層に旧表土の暗灰色土（約10~20cm）、旧耕作土（床土）の黄褐色粘性土もしくは暗褐色土（約20~30cm）が堆積する。さらにその下層には、古代の遺物を含む灰色

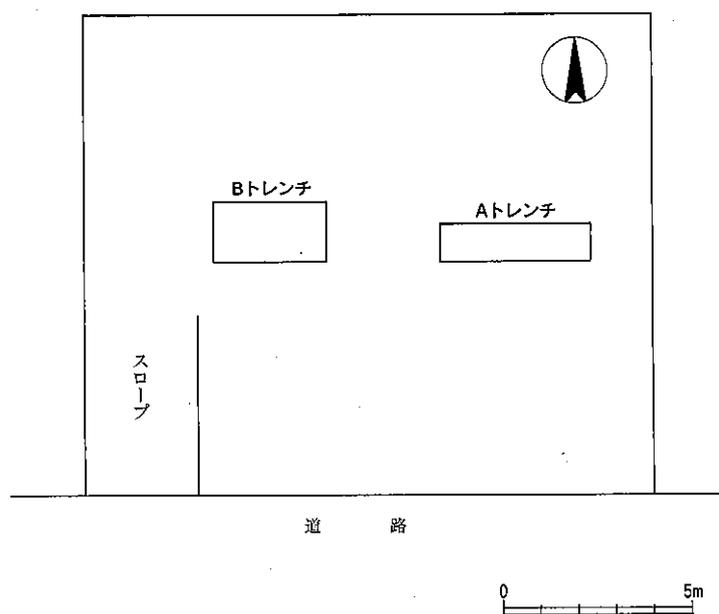


Fig.31 第198次調査トレンチ略配置図 (1/200)

砂層（約30～40cm）と黄褐色砂層（20cm）が堆積し、地表下約250cm、標高31.50mで暗灰色粘性土の無遺物層に達する。灰色砂層とその下層黄褐色砂層は、古代の遺物を含むものの、遺物自体も摩滅を受けており、流路等による自然堆積と考えられる。また、その砂層上面の標高から、当該地の地形がわずかに西側へ傾斜している可能性が考えられる。そして最下層の暗灰色粘性土には植物遺体等も含まれ、いわゆる地山層と考えられる。顕著な遺構は確認されなかった。

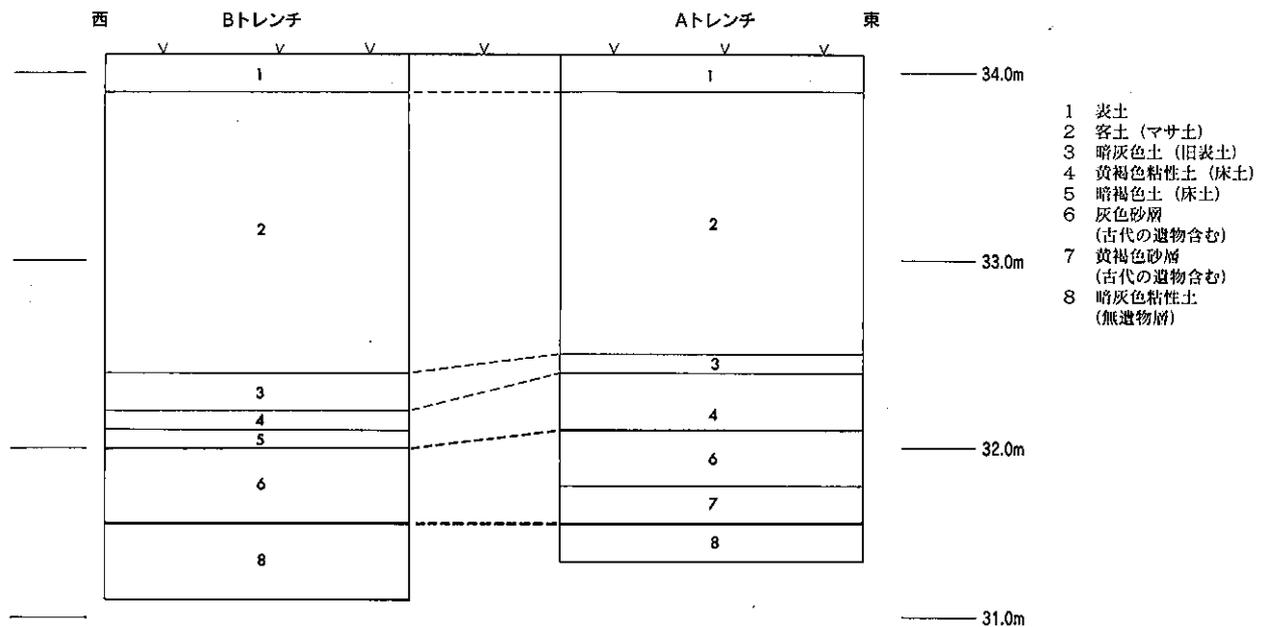


Fig.32 第198次調査土層模式図

### (3) 出土遺物

#### 灰色砂層出土遺物 (Fig.33, PL.34)

いずれもAトレンチから出土したものである。

#### 土師器

坏 (1) 底部は板状圧痕を残すヘラ切りで、復元底径8.0cm。胎土は明褐色を呈する。

椀 (2) 暗灰褐色を呈する胎土で、復元高台径8.2cm。高台端部は摩滅気味。

#### 瓦類

平瓦 (3・4) 共に左側面が残る、凸面に縄目、凹面に布目の痕跡が残る。側面はケズリにより面取りする。4の凸面は燻しにより黒灰色を呈する。このほか、縄目の瓦の小片が1点出土している。

### (4) 小 結

今回の調査では、建物等の遺構はおろか、官衙の東限を示すような区画溝等の遺構も確認されなかった。最下層の暗灰色粘性土の堆積、さらに当調査区が旧地形から見て谷地形にあたることなどから、古代以前に既に低湿地のような状態であったと考えられる。政庁域周辺で官衙

II 大宰府跡の調査

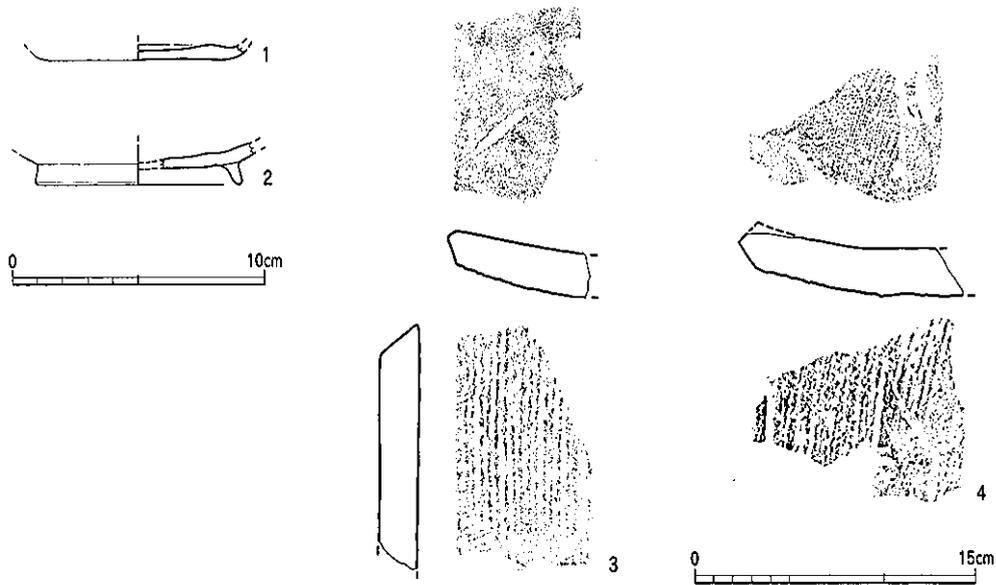


Fig.33 灰色砂層出土遺物実測図 (1/3・1/4)

10世紀代以降は谷地形

が形成された奈良時代以降についての状況は判然としないが、灰色・黄褐色砂層の堆積から考えると、遅くとも10世紀代にはこの場所は洪水等の流水の影響により、谷地形となっていた可能性が考えられる。

谷地形が官衙の東側の境界の可能性

推測にはなるが、奈良時代に政庁域周辺で官衙が形成された際にも、この五反田地区には、現在の用水路と対応するように、南北方向に大きな谷が形成されており、その自然地形が官衙の東側の境界をなしていた可能性が考えられる。

今回の調査では以上のような結果となったが、五反田地区の東側やそのさらに東側の土井ノ内地区では、今回のような谷地形ではなく、古代～中世の遺構が太宰府市教育委員会の調査により確認されている。

今後、今回検出された谷地形のみならず、その東側の状況も視野に入れつつ、政庁域周辺官衙前面地区の東側の範囲・実態を、周辺官衙前面地区の正式報告書を作成するにあたり、解明していく必要がある。

## 7 政庁域後背官衙・松ヶ浦地区の調査

### (1) 調査経過と報告内容

大宰府政庁跡の北側にあたる後背地区は、大宰府史跡の計画調査の一環として九歴により発掘調査が行われてきた。中でも西側の小字辻地区や、政庁跡と同じ小字の大裏地区では、7世紀後半代を初現とした古代の官衙施設が検出されている。また、政庁跡のちょうど背後にあたる小字古野添地区では発掘調査はなされていないが、10世紀代の2基の瓦窯が発見されており、「賀茂」銘文字瓦を焼いた都府楼北瓦窯跡として知られている（高橋1992）。

その一方で、後背地区の東側にあたる小字松ヶ浦地区では、ほとんど調査が行われていないことも相まって、古代の顕著な遺構は確認されていない状況にある。

この松ヶ浦地区では、過去2回の調査が行われている。1つは日管寺の東隣接地を対象とした第150次調査（観世音寺4丁目603-7番）であり、もう1つは第150次調査対象地の西側

松ヶ浦地区  
では過去2  
回の調査



Fig.34 松ヶ浦地区調査地位置図 (1/5,000)

## II 大宰府跡の調査

面を対象とした第158次調査（観世音寺4丁目603-4番）である。第150次調査は住宅増改築に伴い平成5年4月13日～19日に九歴により調査が行われている。また、第158次調査は第150次調査の住宅改築に伴う法面工事に伴い平成6年5月9日～13日に、これも九歴により調査が行われている。調査内容については、概要報告等も含め、現在も未公表である。

その後、平成17年度に日菅寺境内の住宅の増改築に伴う現状変更の申請が行われ、それに伴い平成17年11月4日に、太宰府市教育委員会により事前の確認調査が行われ、地下遺構の状況が確認された。また、その後、住宅の設計が確定し、実際の改築が行われる直前の平成19年10月23日と11月13日にも再度、住宅の改築範囲の確認調査が、同市教育委員会により行われた。そしてこの19年度の調査をもって当現状変更に基づく確認調査が終了したため、その時点で調査次数をつけ、第199次調査とした。当該調査地の地番は、観世音寺4丁目604-1番地である。

今回の報告は第199次調査の報告が主たる目的である。しかし、松ヶ浦地区の既往の調査は上記のとおり全て未報告であり、また後背地区全体の正式報告時までは松ヶ浦地区を本格的に調査が行う計画は現在のところない。そのため正式報告時には、報告の主体は官衙としての顕著な遺構が検出されている辻地区、大裏地区となり、松ヶ浦地区についてほとんど扱うことがないことなどから考え、今回の報告にあわせ、松ヶ浦地区の既往の調査である第150次、第158次も併せて報告することとした。

また、松ヶ浦池周辺において昭和44年12月24日に表面採集された遺物が九歴に保管されており、未公表であるため、これを機会に本書第V章にて紹介する。

なお、今回の報告をもって松ヶ浦地区の正式報告とする。

今回の報告  
が松ヶ浦地区の正式報告

### (2) 第150次調査

#### 1) 調査区の設定

現状変更の対象となる箇所については、その一部に既存建物があつたため、調査区は対象地内の東側に東西2m×南北4mのトレンチを設定し、掘削を行った (Fig.35, PL.24)。調査

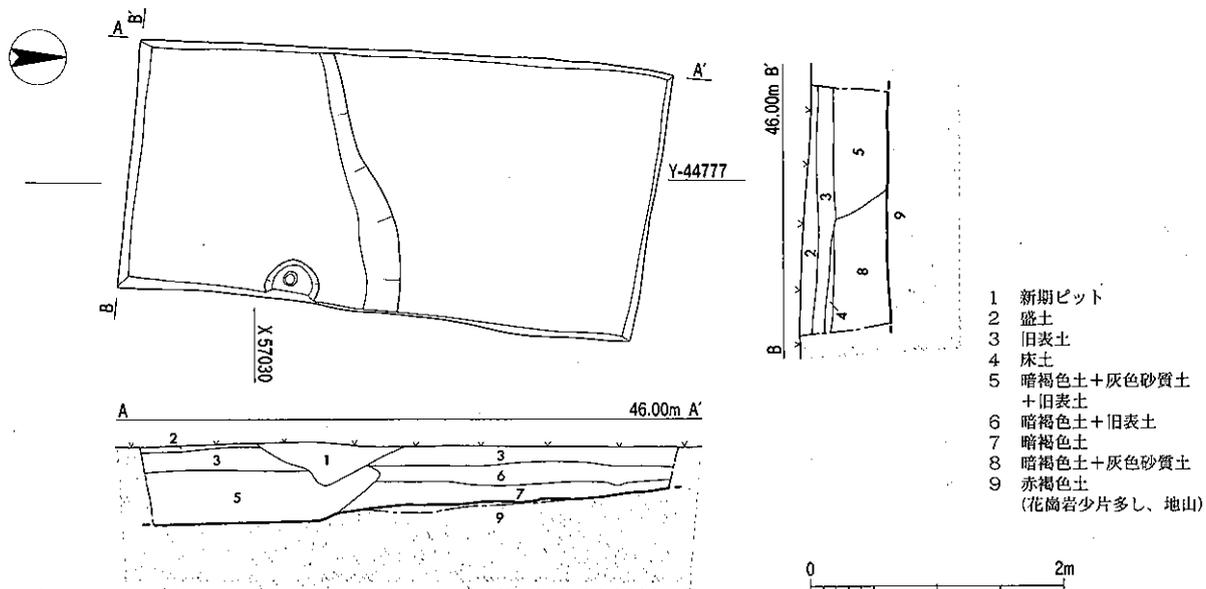


Fig.35 第150次調査遺構配置図・土層図 (1/60)

面積は8㎡である。

## 2) 基本層序と検出遺構

基本層序 (Fig.35) は上層より盛土 (5~10cm)、旧表土 (15cm)、暗褐色土 (30cm) で、地表下約40~60cm (標高45.20~40m) で地山層の赤褐色土に到達する。地山直上の暗褐色土には古代の須恵器・青磁・瓦類の他、近世の陶磁器も出土している。

検出した遺構は、地山面において径20cm、深さ約20cmのピット1個を検出したのみである。上層の状態から考えて近世以降の遺構であると考えられる。

## 3) 出土遺物

出土遺物は全て暗褐色土から出土し、パンケース1箱分に満たない量である。

### 暗褐色土層出土遺物 (Fig.36, PL.34)

#### 須恵器

蓋 (1・2) 共に口縁端部の破片で、1は端部を明瞭に折り曲げるのに対し、2はわずかに屈曲するのみである。

坏 (3・4) 共に体部下位から高台部にかけての破片で、3の高台は断面逆台径であるのに対し、4の高台はやや高く外側に踏ん張る形態をなす。復元高台径は3は6.2cm、4は7.3cm。

壺 (5) 口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は強く外反し、頸部に波状のヘラ描きが見られる。

#### 緑釉陶器

椀 (6) 体部下位の破片と思われる。灰白色の須恵質の胎土に淡緑色の釉が両面にかける。釉の残りはあまりよくない。

#### 青磁

碗 (7) 灰色の胎に貫入のある緑灰色の釉がかかる越州窯系の口縁端部である。

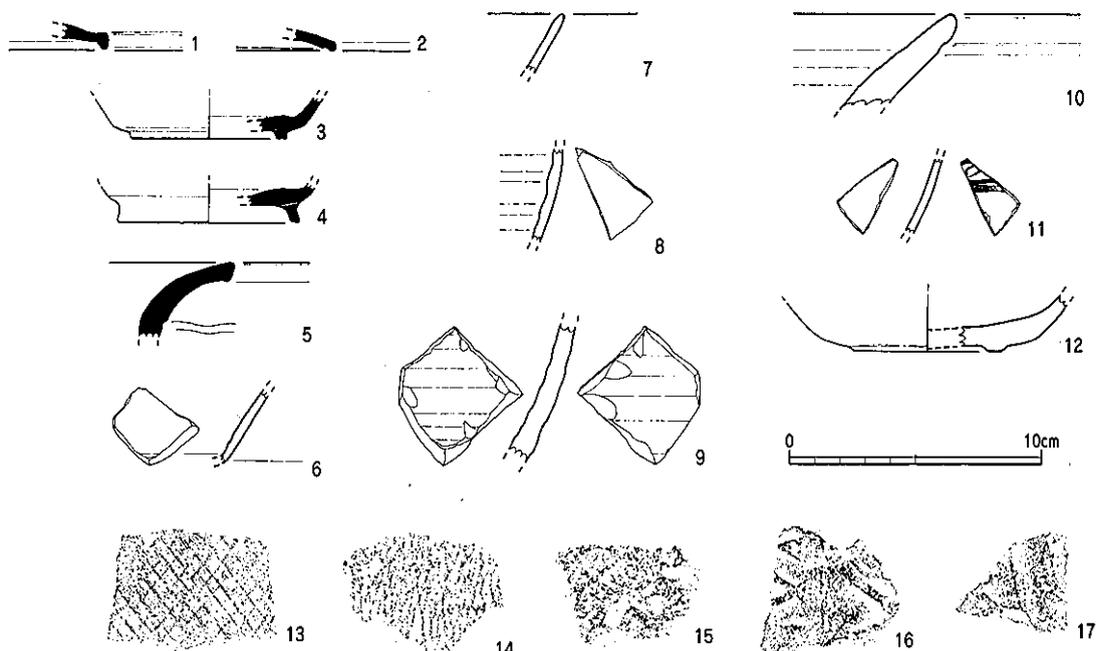


Fig.36 暗褐色土層出土遺物拓影・実測図 (1/3)

## II 大宰府跡の調査

壺(8・9) 8は暗赤褐色の胎に、白濁した緑灰色の釉が外面にのみかかる。9も灰色の胎に緑灰色の釉が両面にかかる。共に越州窯系の壺の体部と考えられるが、8については不確かである。

### 須恵質土器

摺鉢(10) 外面口縁部付近に一条の沈線を持つ。暗灰色を呈し、内面は平滑。東播系のこね鉢の可能性も考えられる。

### 中国産染付

碗(11) 白色の胎に水色の釉がかかり、外面に藍色の染付が見られる。釉調や呉須の具合から不明確ではあるが、中国・明代のものと考えられる。

### 国産陶器

皿(12) 暗褐～暗灰色の粗い胎土に内面及び外面体部に青灰色のいわゆる鉛釉がかかる。高台はケズリ出しで露胎。復元高台径5.8cm。近世の高取系の陶器と思われる。

### 瓦類

丸・平瓦片が20点弱出土しているが、それらの内、叩打痕がわかるものを報告する。

丸瓦(13) 凸面に細かい斜格子の叩打痕が施される。右側部はケズリにより面取りされる。湾曲具合により丸瓦と類推した。凹面には布目痕が残る。

平瓦(14～17) 凸面には14は縄目、15～17はやや大きめの斜格子が叩打痕として残る。凹面には全て布目痕が残る。いずれも端部は欠損する。

## 4) 小 結

第150次調査では、地山面を検出したものの、その上層は近世以降の堆積であり、それ以前の遺構については確認することはできなかった。しかし、上層の出土遺物には奈良・平安時代のものもいくつか見られ、かつてこの場に古代の遺構が存在したことを類推させる。おそらくは、西側の丘陵を削って調査区周辺の平坦面を作り出す際に、近世以前の遺構もろとも大幅に削平等の改変が受けられていると考えられる。

古代の遺構  
が存在した  
可能性

### (3) 第158次調査

#### 1) 調査の経緯

日管寺境内の南端部の東側斜面は、調査以前の段階から高さ約1～2mの擁壁が構築されていた。平成6年5月、対象地の宅地改築に伴い、この斜面の擁壁のさらに上部に擁壁を増築する工事が行われ、前述のとおり都府楼北瓦窯跡の隣接地ということもあり、壁面の土層の堆積状況の確認調査を行った。

#### 2) 土層の観察範囲と堆積状況

増築を行った法面幅は、尾根の先端部から北側へ約26mに及び、その範囲について壁面の清掃及び土層の堆積状況の確認と土層図の作成を行った。

土層の堆積状況(Fig.37, PL.24)は、上層から客土(約20～50cm)、旧表土(約20～30cm)で、上面より約100cm(標高46.40m)で黄褐～赤褐色土の地山層に達する。土層南端が

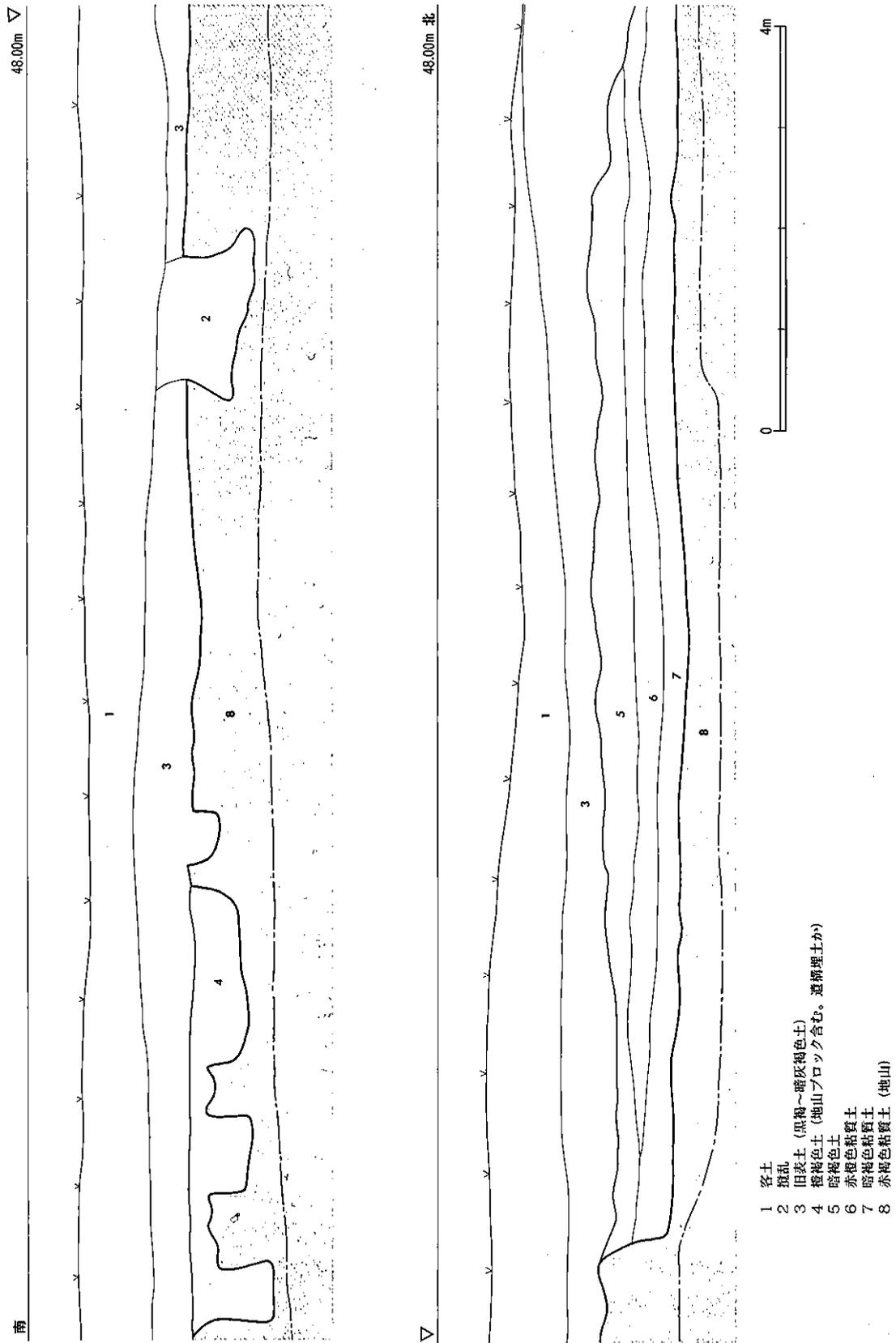


Fig.37 第158次調査土層図 (1/60)

## II 大宰府跡の調査

ら5m地点あたりまでの地山上面からは遺構のような深さ約50～60cmの掘り込みが見られ、その中には橙褐色の埋土（第4層）が確認できる。また、土層南端より14m北側から土層北端までの間には、地山の落ちが確認でき、そこに整地層と思われる暗褐色もしくは赤橙色の土層（第5～7層）が水平に堆積する状況が確認できる。

この調査においては土層の確認にとどまったため、それら遺構もしくは整地層と考えられる土層の平面的な広がりには確認できなかった。

### 3) 小 結

この調査では、日菅寺境内南端部の平坦面の土層堆積状況を確認することができた。土層の堆積状況の確認にとどまったため、確定的なことはあまりいうことはできないが、標高46.40m付近に地山層が水平に伸びる状況が確認でき、丘陵の南端部では、遺構のような掘り込み、やや北寄りでは、落ちを埋めるような整地層が確認された。

これらの遺構もしくは整地の時期であるが、遺物がほとんど検出されなかったために確実ではないが、第150次調査とは異なり近世以降の遺物が存在しないことを考えれば、古い時期、すなわち古代のものである可能性も十分に考えることができる。

### (4) 第199次調査

#### 1) 調査の経緯と位置

第199次調査は、特別史跡大宰府史跡内における日菅寺境内の個人住宅増改築に伴って行われた (Fig.38)。本調査地周辺においては、先に報告されている第150・158次調査のみとなっており、日菅寺境内における基本層序・遺構の展開状況については不明であった。そのため、住宅増改築時における遺構面に達しない掘削深度を確定する目的から、平成17年11月4日に建物建設範囲の一部において基本層序の確認を主たる目的として、太宰府市教育委員会が調査を行った (第199-1次調査)。その後、基本層序把握作業の結果をうけて建築設計が行われ、実際の増改築工事中における平成19年10月23日の建物建築範囲に接していた樹木の移植作業 (第199-2次調査) と、平成19年11月13日の建物建築範囲掘削作業時に同市教育委員会によって立会調査を行った (第199-3次調査)。

#### 2) 基本層序

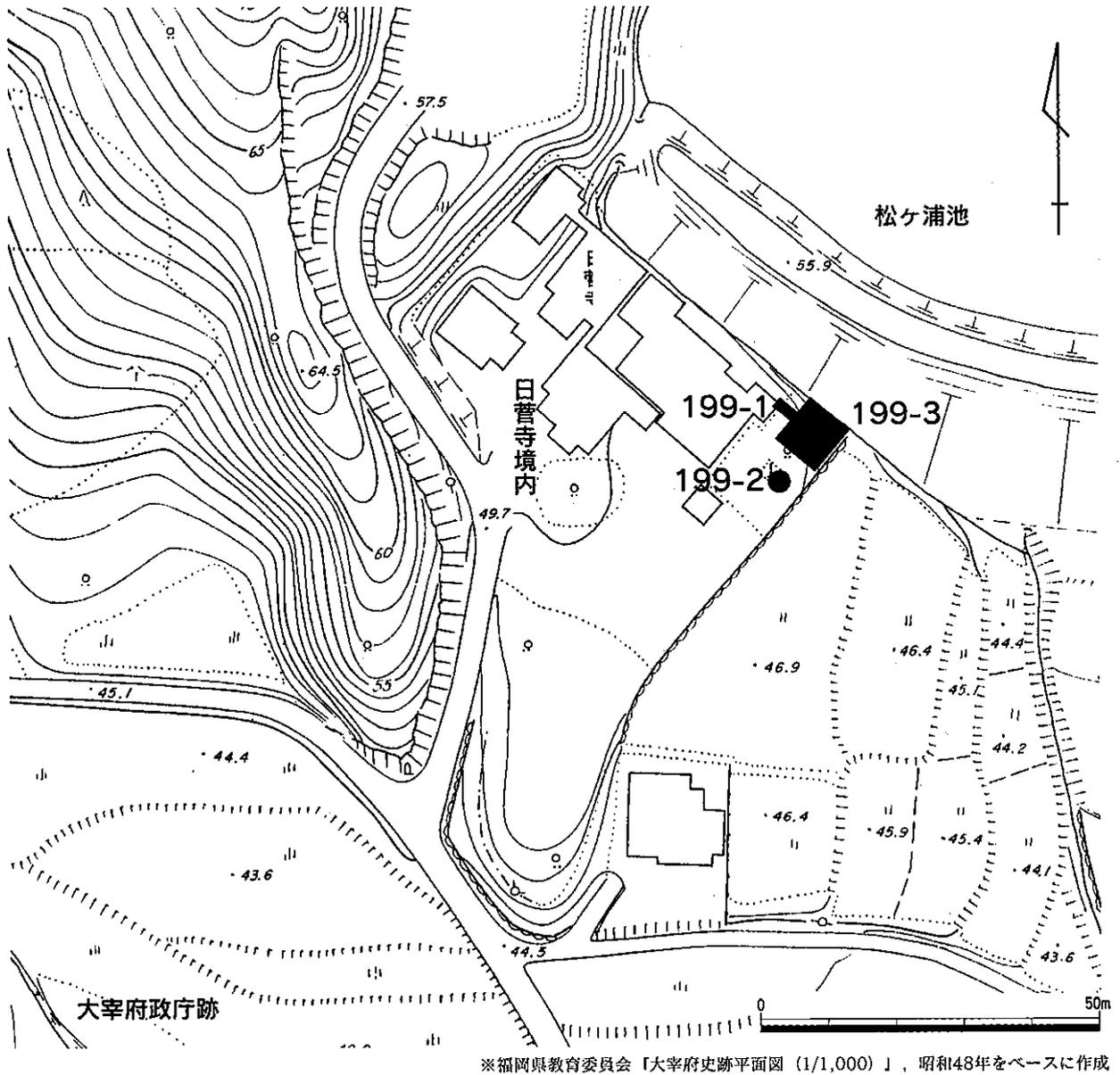
第199-1次調査の結果、Fig.39の通りの基本層序を確認した (PL.25-1・2)。上位より、地表面 (GL) から約50cmが砂利と真砂土による現代盛土層、さらにそれから15cm前後が旧耕土層、さらにそれから15cmが灰茶色土による遺物包含層で、これらを除去すると10世紀代を下限とする土師器・須恵器・瓦・塼などを濃厚に包含する硬くしまった暗茶色土層に達する (地表面より80cm前後)。本調査次において、この上面が遺構面である可能性が極めて高いと判断し、特別史跡内における建築設計配慮が可能であるという状況から、この面の破壊行為がないと判断して掘削せずに現状保存することとした。

なお、旧耕土下層の遺物包含層直上において上面が平らな石が出土しており (PL.25-3)、これが礎石建物に伴う石とするとこの層の上面も遺構面の可能性が指摘できる。

地山層と掘り込みを  
確認

10世紀代の  
遺物層

礎石の可能  
性のある石



※福岡県教育委員会「大宰府史跡平面図 (1/1,000)」, 昭和48年をベースに作成

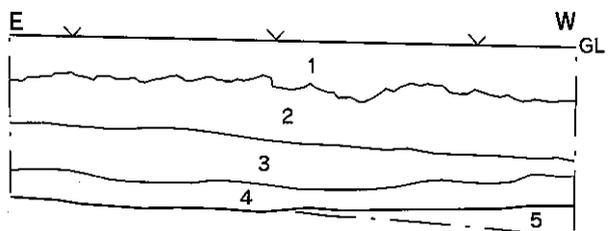
Fig.38 第199次調査区位置図 (1/1,000)

その後、第199-2次調査においては、基本的に先述の成果を踏襲する形の所見が得られたが、樹木の移植作業という性格上、前回の調査よりもさらに深度があるところまで掘削したために、さらに下層の状況把握が可能となった。その結果、先に確認した遺構面を形成する暗茶色土層厚は25cm前後であることが確認でき、さらに下層には淡赤褐土の存在を確認し、この層の上も遺構面の可能性が指摘できる。

なお、第199-3次調査は、地表面 (GL) から50cm弱の掘削深度にとどまっていることを確認したのみである。

### 3) 小 結

以上、基本層序把握を主たる目的と



- 1 砂利 (近現代瓦含む)
- 2 真砂土
- 3 茶褐色土 (橙土がブロック状に混入、遺物少量含む) [旧耕土か]
- 4 灰茶色土 (遺物少量含む)
- 5 暗茶色土 (硬く絞まっている、遺物多い)

Fig.39 第199-1次調査土層模式図 (約1/40)

## II 大宰府跡の調査

する調査成果により、日菅寺境内における遺構面に達する深度想定が可能となった。また、当該地区において10世紀代を下限とした何らかの痕跡を確認できた。特別史跡内という性格上、現状保存が可能であるため、破壊されない部分の掘削調査を避けたがために具体的な遺構の展開状況については不明のままではあるが、後世にこれらの遺構・遺物を継承できたことは幸いである。

### (5) まとめ

以上、松ヶ浦地区の3箇所の調査地点について報告を行った。これらの調査から得られる所見は非常に限られるが、次の2点であろう。まず1点目は、小字古野添地区の尾根筋のすぐ東側にあたる日菅寺境内の位置する平坦面においては、第158次と199次調査からの成果により、古代の整地もしくは遺構の存在が確認できたことである。特に第199次調査で検出された包含層暗茶色土は、10世紀代を下限とする土層であり、西側に隣接する都府楼北瓦窯が営まれた時期と重複する可能性が高く、瓦窯との関連性を想定できる。2点目は、日菅寺境内の更に東側の平坦面においては、第150次調査からの成果により、平坦面自体は近世以降の改変により、既にそれ以前の土層については削平されていた。そのため、近世以前の遺構が存在したにせよ、既に削平されている可能性が高いということである。ただし、近世の包含層には、報告したように古代～中世の遺物が含まれており、その時期の遺構が周辺に存在した可能性は十分に考えられる。

古代の整地  
・遺構を  
確認

このように、松ヶ浦地区の調査における成果は、史跡の構造解明という点から見ると、限られた調査成果に留まっている。その理由として、松ヶ浦地区を対象としたこれまでの調査は、他の地区のように史跡自体の構造解明を目的とする年次計画にのっとりたものではなく、いずれも史跡の現状変更に伴う調査であることがあげられる。

そのため、具体的な調査あるいは整備に関する計画がない松ヶ浦地区においては、今回のように現状変更に伴う調査においても必要最低限の掘削によって、一定の評価が得られたことも確かである。しかしながら、この現状変更に伴う調査でも、遺構保護の観点から掘削を必要最低限に抑えることは当然としても、指定された史跡の内容に関する情報を最大限に得る作業は必要であろう。そのような作業によって、調査地周辺の史跡に対して復元可能な状況が生み出されてくるはずである。

いずれにせよ、今回の調査所見の内容が、正式報告という形で公表されたことは望ましいことであることには変わりがない。

前述したように、現在のところ松ヶ浦地区を対象とした具体的な調査・整備計画については存在しないため、近い将来については松ヶ浦地区を学術的に調査・報告する機会はおそらくやって来ないと思われる。また、いずれの日か松ヶ浦地区を対象とした調査・整備計画が持ち上がって来た際に、今回の報告が、いくばくかにせよ、その計画の基礎資料の一つとして貢献することができることを願いつつ、報告を終えることとしたい。

### 【参考文献】

高橋 章1992「都府楼の瓦を焼く」『太宰府市史』考古資料編

## 8 第136-2次調査の筏状遺構 S X 3937部材の樹種同定

### (1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### (2) 試料

試料は、筏状遺構 S X 3937の部材（横木、杭、敷粗朶など）について採取された12点である。

### (3) 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### (4) 結果

Tab. 6に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. ヤマモモ科

横断面：小型で角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。軸方向柔細胞が散在及び短接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で階段の数は2～10本ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりヤマモモに同定される。ヤマモモは本州（関東南部、福井県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は器具、旋作などに用いられる。

#### ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなり同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布

## II 大宰府跡の調査

する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

### コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

### アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. Arg. トウダイグサ科

横断面：やや小型の道管が年輪のはじめに単独あるいは2～数個放射方向に複合して散在し、晩材部では小型の厚壁で丸い道管が放射方向に数個つらなって散在する環孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりアカメガシワに同定される。アカメガシワは本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ10m、径30cmに達する。材はやや軽軟で、木器としてはほとんど用いられない。

### アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科 図版5

横断面：小型の道管が単独ないし2～4個放射方向にむかって複合して散在する散孔材である。道管の複合部に1～2個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマハウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

### ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

横断面：小型でやや角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

Tab.6 第136-2次調査の筏状遺構 S X 3937部材の樹種同定結果

No.	備考	結果 (学名/和名)
1	横木部材	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
2	横木部材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
3	横木部材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
4	横木部材	<i>Mallotus japonicus</i> Muell. Arg. アカメガシワ
5	横木部材	<i>Mallotus japonicus</i> Muell. Arg. アカメガシワ
6	杭	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
7	杭	<i>Callicarpa</i> ムラサキシキブ属
8	杭	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
9	杭	<i>Myrica rubra</i> Sieb.et Zucc. ヤマモモ
10	敷粗朶	<i>Myrica rubra</i> Sieb.et Zucc. ヤマモモ
11	敷粗朶	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ
12	腐植土	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

#### サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

横断面：小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で階段の数は多く40を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

#### ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科

横断面：小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で道管相互ないし道管と放射組織間の壁孔は小型で密である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。直立細胞からなる単列部が長い。

以上の形質よりムラサキシキブ属に同定される。ムラサキシキブ属には、ヤブムラサキ、ム

## II 大宰府跡の調査

ラサキシキブなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉ないし常緑の低木から小高木である。

### (5) 所見

筏状遺構 S X 3937 の部材（横木、杭、敷粗朶など）について樹種同定を行った。その結果、コナラ属アカガシ亜属 2、アカメガシワ 2、アワブキ属 2、ヤマモモ 2、ツブラジイ 1、ムラサキシキブ属 1、ヤブツバキ 1、サカキ 1 が同定された。多様な樹種が利用されており、部材による樹種の選択性は低いと考えられる。いずれも照葉樹林域に分布する樹木であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

照葉樹林域  
の 樹 木

### 【参考文献】

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版，290p.
- 島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣，296p.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別 1 号。植生史研究会，242p.



Ⅲ 大野城跡の調査

Ⅳ 観世音寺境内出土遺物の追補

Ⅴ 松ヶ浦池周辺表採資料

Ⅲ 大野城跡の調査	61
1 大願寺境内の立会調査	61
(1) 調査概要	61
(2) 基本層序	61
(3) 表採遺物	63
(4) 周辺の地表面観察調査の成果	63
(5) 小 結	65
2 大野城跡第46次調査（北石垣地区）C区城門跡 出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査	66
(1) はじめに	66
(2) 調査概要	66
(3) 出土遺物の概要	67
(4) 軸受金具の理化学的分析	70
Ⅳ 観世音寺境内出土資料の追補	80
Ⅴ 松ヶ浦池周辺表採資料	82

# 1 大願寺境内の立会調査

## (1) 調査概要

**経過** 本調査は、特別史跡大野城跡内における現状変更許可申請に伴い行ったものである。現状変更内容は、昭和32年より当地にて宗教活動を行っている宗教法人大願寺の墓地造成と境内入口の拡張である。本調査地においては、古代山城跡である大野城跡はいうまでもなく、中世城郭遺跡である岩屋城跡の遺構が存在する可能性が想定された。しかし、現状変更部分における地形は、深い谷状地形を呈しており、さらに昭和48年7月31日の集中豪雨によって土砂崩れを起した場所にもあたることもあって(註1)、造成工事中に立会調査を行いつつ、遺構が確認された時点で保存協議を行うというものであった。調査期間は平成19年9月7～13日、同年11月1日で、九州歴史資料館の岡寺良氏が立会いのもと、太宰府市教育委員会の城戸康利・下高太輔が行った。この時、明瞭な遺構が確認されなかったため、立会調査及び周辺地形の把握調査成果を報告するものである。

**位置** 本調査地は、太宰府市大字太宰府字岩谷1818、字横岳1821、連歌屋1丁目1817-4・1817-19にあたる場所であり、その内の2,323㎡に相当する。大野城跡南側の推定土塁線より南東に約700m、岩屋城跡南端(註2)に接する位置に相当する(Fig.41)。

## (2) 基本層序

立会調査は、主に谷状地形を形成する斜面の削り込みが行われる箇所を中心に実施している



Fig.41 調査位置図 (1/10,000 大宰府史跡平面図1/5,000に岡寺2006掲載図を挿入・加筆)

### Ⅲ 大野城跡の調査

(Fig.42, PL.26-1)。これは先述の通り、現状変更地が昭和48年の集中豪雨によって土石流の被害を受けた地区に相当するために、調査前からかなりの土砂堆積が想定されたからである。

大願寺本堂南西部分に展開する調査地である谷状地形部分の造成に伴い、谷地形東側の水路法面の補強工事が行われる。これにより、谷地形の現地表面から約1.4mの深度、現行水路西壁から約1m幅にわたって掘削された(PL.26-2)。掘削部分の土層観察から今回掘削された土砂は谷上部からの崩落土及びその後の造成土であることが確認できた(PL.26-3)。また、仮設橋から南の部分に至っては地山が確認できなかったことからさらに同様の堆積があるものと考えられる。なお、掘削土中には昭和期の瓦や土管が、水路底部には近世の土器・陶磁器を

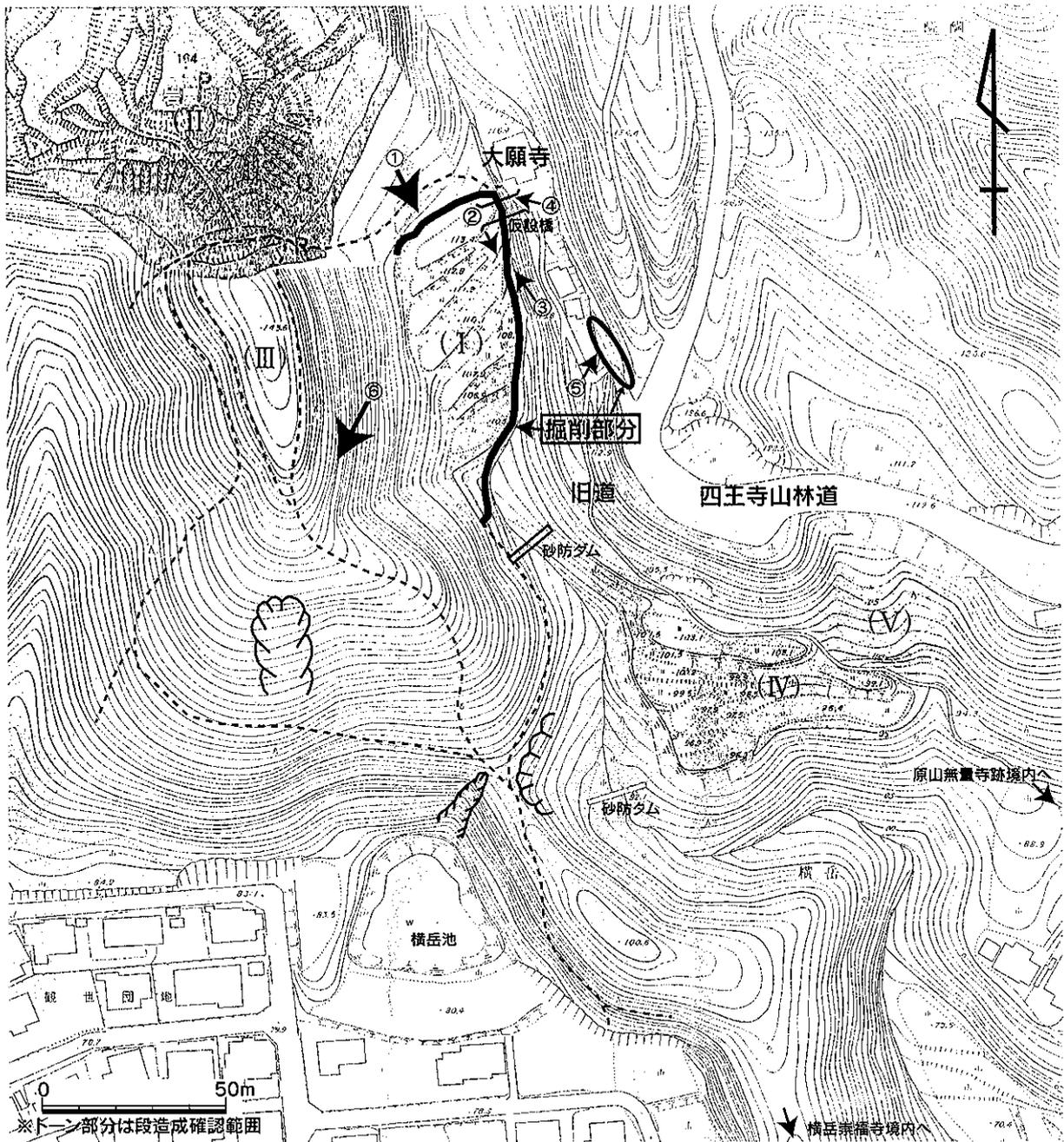


Fig.42 大願寺周辺図 (①～③はPL.26-1～3, ④～⑥はPL.27-1～3にそれぞれ対応)  
(2007年9月11・13日踏査 大宰府史跡平面図1/10,000に岡寺2006掲載図を挿入・加筆)

数点確認・表採した（後述）。このことから、現地表面を形成しているのは、昭和48年に発生した土石流により堆積した土砂とその後の造成土であることを裏付けている。谷状地形東側現行水路の一部のコンクリートによる擁壁もこの時の造成に伴って築かれたものと考えられる。

また、谷状地形北側斜面掘削部分の土層観察では、地山（花崗岩風化土と一部に岩盤）とその上層に崩落土（岩屋城に伴う畝状縦堀群が現地表土面から観察できることから戦国期以前と考えてもいいかもしれない）、さらに上層に現地表土の順に確認できた（PL.27-1）。同様の傾向は境内入口掘削部分においても確認できた（PL.27-2）。

以上のことから、今回の掘削部分においては当初想定していた大野城跡・岩屋城跡に伴う遺構は確認できなかった。

今回の対象地には大野城・岩屋城の遺構はなし

(3) 表採遺物 (Fig.43)

先述した水路底部より表採した遺物を報告する。

国産陶磁器

土瓶（1） 口縁部の小片である。胎土は密で、色調は内外面ともに淡橙茶色を呈し、焼成は良好。若干ではあるが外面に緑色系の釉が確認できる。

丸椀（2） 高台から体部下位部が残存。硬質で焼成は良好。外面に呉須による文様が施される。肥前系磁器。

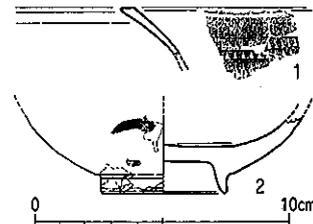


Fig.43 大願寺周辺表採遺物実測図 (1/3)

(4) 周辺の地表面観察調査の成果

目的 今回の現状変更地は昭和48年の災害以前から段造成が存在したことが確認できることから（註3）、当地における段造成がどのような起因によるものかを明らかにする基礎材料を提示するために上記の立会調査に合わせて周辺踏査を実施した。想定される起因としては、大野城・岩屋城の築城の他に、当地の南東方面に展開した原山無量寺（註4）、横岳崇福寺（註5）による開発、近世以降の田畑開墾などである。

現況 踏査の結果、今回造成された谷状地形周辺には複数の段造成があることを確認した。Fig.42中の今回の立会調査地を含めたトーン部分（I～V）に段造成が複数展開する。この内、(II)に関しては岩屋城跡に伴うものと認識されている（註6）。その最大の根拠としては、段造成の周囲に堀切と畝状縦堀群が確認できて、これらによって段造成が防御されているということである。

問題の段造成は、立会調査地を含む（I・III・IV・V）である。

(III)に関しては、西側の大浦谷と呼称されている部分にまで展開しているのが確認できた。この部分は岩屋城跡と認識されている南端に接しており（註6）、今後さらに岩屋城跡の城域に関して議論を要する部分といえる。

今回の立会調査地（I）とその南東に位置する（IV・V）に関しては同一の谷部に存在するものであり、これらをさらに下ると東側に原山無量寺跡の寺域、南側に横岳崇福寺跡の寺域に達する（Fig.44）。横岳崇福寺跡の寺域に関しては近年の調査・研究によって（註5）、現在の崇福寺別院が存在する丘陵が北限の可能性が高い。そのため、谷部の段造成を古く見るならば原

Ⅲ 大野城跡の調査

山無量寺跡に伴うものと考えられる。現在のところ、原山無量寺跡の寺域は不明といわざるを得ない(註7)。また、これらの段造成に接して四王寺山山頂付近(大野城跡太宰府口門跡, Fig.41)を経て宇美町方面へ至る山道が存在していた。この道は大日本帝国陸地測量部作成

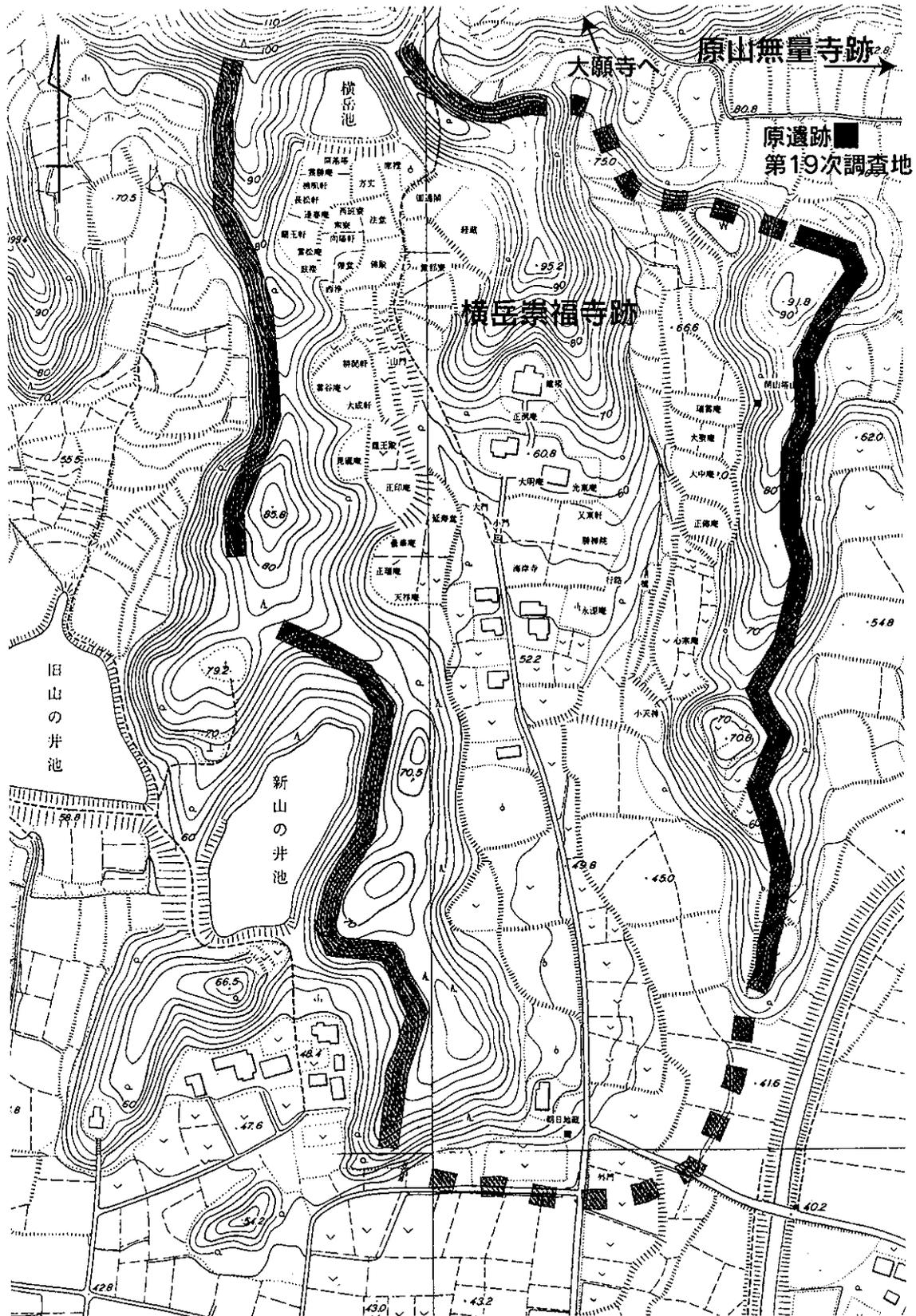


Fig.44 旧地形への横岳崇福寺伽藍推定図(註5文献より転載・加筆)

地図（明治33年測量）において確認できるため、近世段階で存在していた可能性が高い。先述の表採遺物は江戸中期から末期にかけてのものであるが、これらのことを勘案すると段造成（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ）は、近世段階に山道の際に開削されていた可能性が想定される。

以上のことから、昭和23年の段階<sup>(註3)</sup>から数十年前まで田畑として利用されていた段造成としか言及できないのが現状である。なお、四王寺山全域において大正年間から1950年代頃まで植林が行われているが<sup>(註8)</sup>、植林樹木の生息地形をほぼ全山において確認した結果（PL.27-3）、段造成や斜面にかかわらず生息していることを勘案すると、植林に伴って大規模な造成行為は行われていないと考えられる。

### (5) 小 結

以上のことから、今回造成された谷状地形は、中世末期の岩屋城の城域外に相当し、近世以降に開削されて現代まで継続的に田畑として利用された可能性を想定するにとどまる。なお、大野城跡・原遺跡に関わる遺構の有無については、今回造成される谷状地形部において調査時の地表面より掘削深度が1.4mを超える構造物が建設される場合においては確認を要するものである。

今回の調査は、当初想定されていたような遺構は確認できなかった。しかし、大願寺周辺は先述の通り大野城跡はいうまでもなく、岩屋城跡・原遺跡などの中世遺跡に接した地区に相当するために今後とも慎重な調査・検討が不可欠な場所といえる。その基礎データとしても地表面観察による調査や現況地形の詳細な測量作業が急がねばならない。

### 【註】

- 1) 地権者である宗教法人大願寺御住職よりご教示いただいた。
- 2) 岩屋城跡についてはこれまで行政による本格的な調査は行われていないが、『太宰府市史 考古資料編』（太宰府市、1992年）において城跡の範囲を探る試みがなされている。しかし、提示された図には段造成と掘り込みのみが記されているだけで、通常の城郭研究において作成されるいわゆる「縄張図」に記される段造成間の接合部分（具体的には虎口や城道など）や防衛施設である土塁などが無記入である。この手法によって作成された図だと城域の確定は極めて困難であり、段造成が続く限りすべて記入しなければならず、むしろ「段造成把握図」と呼称した方が妥当であろう。また一方で、城郭研究者による「縄張図」の作成は行われており、その先駆的なものが村田修三・廣崎篤夫氏による図（廣崎「岩屋城」『中世城郭事典』3 新人物往来社、1987年）、それを継承していわゆる本丸・二の丸・三の丸跡を中心に詳細な検討がなされたものが中西義昌氏による図（中西「筑前岩屋城の縄張り構造」『福岡地方史研究』36 福岡地方史研究会会報、1998年）である。近年では、これらの研究を踏襲しつつ最大の城域を提示しているのが岡寺良氏による図（岡寺「太宰府岩屋城の研究（上）」『九州歴史資料館研究論集』31 九州歴史資料館、2006年）である。本報告においては最大城域を提示している岡寺氏の図を基に報告している。
- 3) 太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡Ⅴ－昭和23年の太宰府－」『太宰府市の文化財』13、1989年。
- 4) 太宰府市「原山無量寺」『太宰府市史 考古資料編』、1992年。
- 5) 太宰府市教育委員会「横岳遺跡－横嶽崇福寺跡の調査－（遺構編）」、1999年。
- 6) 岡寺良「太宰府岩屋城の研究（上）」『九州歴史資料館研究論集』31 九州歴史資料館、2006年。
- 7) 原山無量寺跡を含む原遺跡においては、平成18年度に開発に伴って太宰府市教育委員会が発掘調査を実施している（原遺跡第19次調査、未報告、Fig.44）。その結果、原山無量寺跡に関わる12世紀以降の集落関連遺跡と考えられる遺構・遺物が検出・出土している。現在では、本調査が原遺跡内における最も西に位置している。
- 8) 太宰府市『太宰府市史 環境資料編』、2000年。

## 2 大野城跡第46次調査（北石垣地区）C区城門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査

### (1) はじめに

**経 過** 大野城市・太宰府市・糟屋郡宇美町の境界に位置する四王寺山には、白村江の戦いでの敗戦を受けて大宰府防衛のため天智四年（665）に築かれたとされる朝鮮式山城「大野城跡」がある。

大野城と  
豪雨災害

平成15年7月19日未明に福岡県をおそった豪雨により、四王寺山一帯では計400箇所近くにもよぼる山腹崩壊（土砂崩れ）などが発生し、大野城跡にも大きな被害をもたらした。福岡県教育委員会では、関連三市町の教育委員会と連携して、平成16年より被災箇所の復旧事業に着手した。北石垣地区については、平成18年度より3カ年計画での復旧事業計画を立案し、平成18年度には被災箇所の発掘調査を行った結果、C地区にてこれまで存在が知られなかった城門跡を発見し、あわせて鉄製の扉軸受金具を発見した。そこで九州歴史資料館では、(株)九州テクノロジーに依頼して金具の理化学的解析を行った。

北石垣地区  
の概要

**位 置** 北石垣地区は大野城跡の北側に位置し、北側二重部の内周側、西の百間石垣地区と東の小石垣地区のちょうど中間に位置する。過去には昭和47年の豪雨災害により被災しており、昭和54年に発掘調査が行われている（横田編1980）。それによると、北石垣地区では2カ所に石垣が確認され、ともに土塁の外側に石垣を貼った構造であることが知られていた。今回の豪雨災害により、昭和47年の大雨の際に崩れた2カ所が再び被害を受けてさらに広範囲に崩落したほか、そのさらに東側の土塁部分が新たに崩落を起こし、合計3カ所が被害を受けたため、これらの3カ所を北石垣地区の災害復旧事業の対象とし、西側からそれぞれの崩落をA区・B区・C区として、平成18年8月より発掘調査に着手した。従って、A区・B区は既知の石垣部分の再調査であり、C区はこれまで知られていた「北石垣」の東側約50mに位置する土塁部分であってこれまで発掘調査が行われていなかった箇所となる。以下まず、C区の調査成果のうち重要遺構確認調査として発掘した第3トレンチと、この調査で出土した鉄製軸受金具について概要を記しておく。

### (2) 調査概要

北石垣地区  
の調査

**調査経過** C区は調査着手前は土塁の外側法面が崩落した箇所と考えられていた。しかしながら、調査着手後周囲の雑草木の伐採を進めるに従い、土塁上の平坦面に大きな凹みが存在することが分かった。また、崩落内のこの凹みに対応する位置に石垣のような構造物の一部が露出していた。そのため、ここに土塁以外の何らかの施設が存在する可能性があると考え、災害復旧の方針を決定するためトレンチ調査を行うこととした（第1トレンチ）。第1トレンチは土塁上面に土塁と直交方向に露出していた石列に沿って設定して掘り下げたが、掘り下げるに従って露出していた石列が石垣となって姿を現すとともに、最下面から西側の城門礎石（唐居敷）が確認され、この凹み部が城門であることが確定した。これを受けてこの城門の名称を北石垣城門と命名した（Fig.45～47）。

以上の調査成果を大宰府史跡整備指導委員会に諮ったところ、城門の規模を把握すべきとの

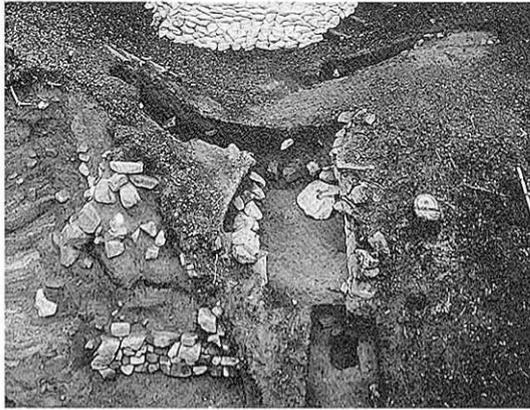


Fig.45 城門検出状況（北から）



Fig.46 トレンチ掘削状況（上が南）

指導があった。そこで、これに従って調査を重要遺構確認に切り替えて第1トレンチで検出された西側礎石部分から東側に直交トレンチ（第3トレンチ）を設定して掘り下げたところ、東側の城門礎石（唐居敷）を発見すると共に、軸摺穴に鉄製の扉軸受金具が原位置で残存している状況が確認された。

**東側礎石（唐居敷）** 東側の礎石（唐居敷）は花崗岩製で、城門の床面に埋設されていた。礎石（唐居敷）の東側には城門の東を画する石垣があり、高さ約1.3mほどが残存していたが、城門内側に著しく倒れ込んでいた。礎石（唐居敷）と石垣基部との間に直径約45cmを測る円形状の痕跡が確認された。門の建物の支柱痕跡と考えられる。ピンポールにより深さを測ったが1m以上あり結論は得られなかった。この円形状の柱痕の周りには小角礫が配されており、根固めの役割を果たしたものであろう。特に南側には数段にわたって柱痕に沿う位置に石材が積み重なっていたが、これは意図しておかれていたものか東側石垣の石材が崩落して積み重なったものかは分からない（Fig.48・49）。

この柱痕の西側に礎石（唐居敷）が埋設されていた。礎石（唐居敷）には半円形の貫通する削り込みがあり、この削り込みが支柱の約1/3周に沿うように配置されていた。支柱削り込みから西側に深さ約9cm、幅14cm、長さ33cmほどの平面長方形の非貫通の削り込みがあり、方立穴である。またこの方立穴の南約5cm、支柱穴の西約20cmの位置に非貫通の軸摺穴があり、扉の回転軸を受けるための金具が嵌っていた。金具の嵌っていた軸摺穴は一辺11×12cmの北面－南面間がわずかに狭い長方形の平面形態を呈し、壁面はほぼ垂直に近くわずかに下すぼまりの形状を持つ。深さは17cm、底面は1辺約9×10cmをはかる。金具は下半部の方柱部分をこの穴に埋設しており、方柱部と円柱部の境界部の段を穴の上面にあわせていた。後述のように金具の方柱部の高さは穴の深さより低く、底部には約1.5cmほどの隙間があって土が充填していた。穴の北面－南面間が狭く、金具の側面と穴の側面はほぼ密着した状態である一方、東面－西面間はやや幅が広く金具の側面とはやや隙間があった（Fig.50・51）。

### （3）出土遺物の概要

**金具について** 金具については、発見直後より原位置で保存するか取り上げるかの検討が行われたが、金具が腐食せずに残存していた環境は調査により失われてしまっており、このまま埋め戻しても元の安定した状態には戻らないとの見解が自然科学分野から示され、取り上げを行

III 大野城跡の調査

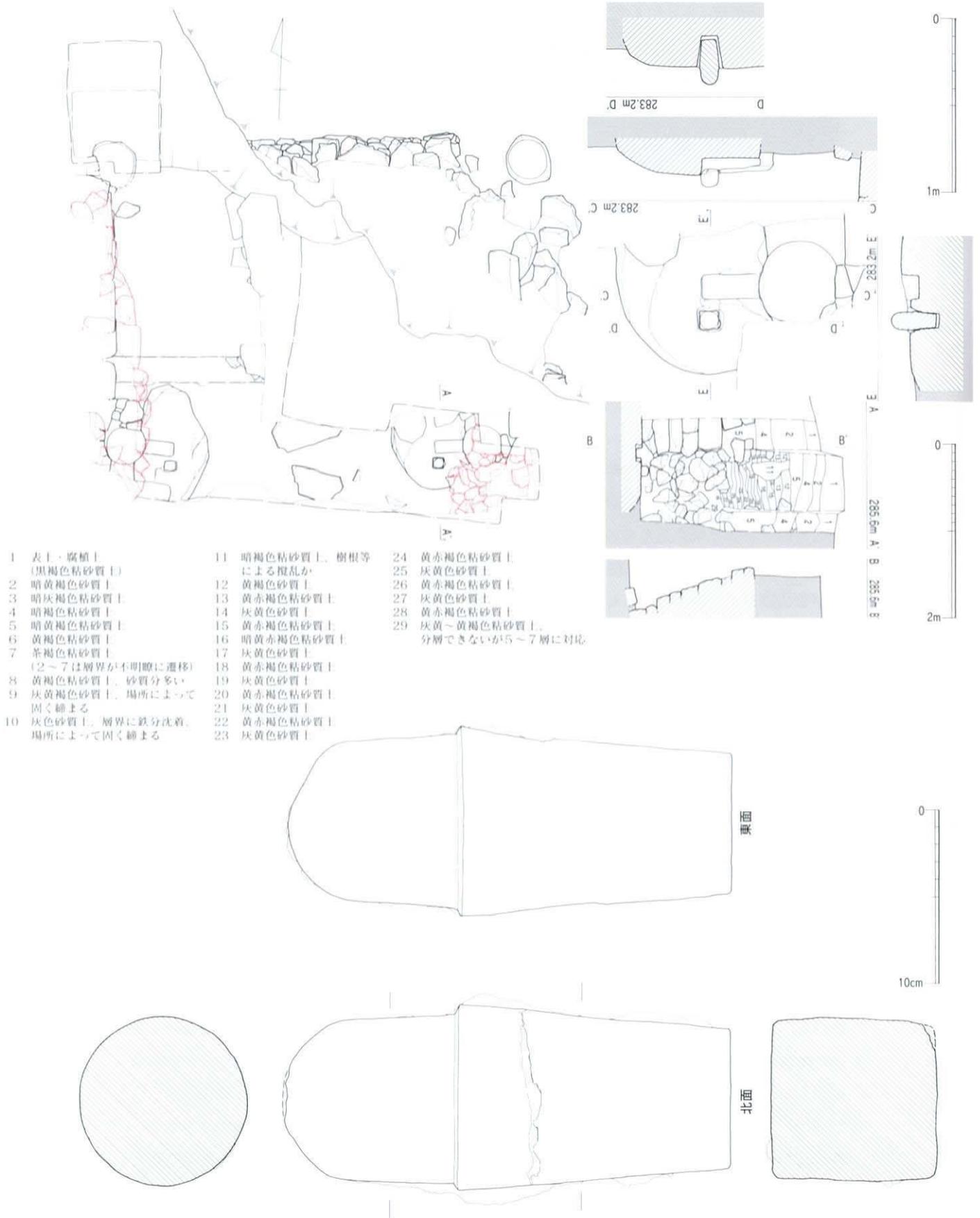


Fig.47 北石垣城門実測図 (1/60・1/30), 出土軸受金具実測図 (1/3)



Fig.48 3トレンチ東壁石垣・土層 (西から)



Fig.49 軸受金具の出土状況 (上が北)

うことに決定した。金具は上部が錆付いており、この錆によって堅固に礎石(唐敷)に癒着していた。そこで、癒着部を先端工具によって切り離した後、間接打撃を繰り返して取り上げに成功した。

金具は取り上げ時に下部の厚さ約1cmほどが折損し、底部片と上部片に分かれた。底部片は劣化が進行していた。上部片は表面の一部に錆による剥離が進行しつつあったが、その他の部分は比較的良好な状態である。形状は下半部が尻すぼみの直方体、上半部が円柱形で先端を球状に取める。高さ25.5cm(うち下半部約15.5cm、上半部約10cm)、円筒部径約9.5cm、重さは約12.8kgを測る。鋳肌には細かい泡状のくぼみがあり、二側面には鋳型のずれに起因する段が存在する。方柱部のCTスキャンにより、方柱部分には気泡が特に多く見られることが分かった。取り上げ時の折損は、この気泡が著しく集中している部分に発生しており、方柱部分の中でも特に下半部には多く気泡が存在すると考えられる。このことから、逆位で鋳込みを行った可能性が考えられる。頭部の城門外側上面には回転方向の磨り跡が認められ、おそらく使用時に形成されたものと考えられる。

**軸受金具の出土事例** 同様の金具は、これまで国内での出土事例が確認されていない。日本列島では初の出土ということになる。朝鮮半島では韓国から父母山城(清州)、忠州山城(忠州)、



Fig.50 軸受金具出土状況 (上が北)



Fig.51 軸受金具取り上げ後 (上が北)

### III 大野城跡の調査

三年山城（報恩）、大母山城（揚州）、姑母山城（聞慶）の5遺跡で6例の出土が報告されている。韓国での出土例を見ると、ほとんどが上下二つの部品がセットになって出土している点は注目される（Fig.54）。上の部品は釣り鐘状の形状で、下の部品は下半部が方柱状または円柱状、上半部は全て円柱状で上部を球状に収める。上半部と下半部の境界には鑿状の受けがある。出土状況から、釣り鐘状の部品が下の部品の上半部に被さり、釣り鐘の内面と円柱上部の球状部、釣り鐘の口縁部と鑿の部分がこすれあつて回転軸を構成していたものと考えられている。従つて、今回出土した軸受金具は、鑿状の受け部こそないものの韓国出土例の下の部品に該当するものであり、今回は出土しなかったが釣り鐘状の上の部品とセットになって回転軸を構成していたものと考えられよう。なお、この釣り鐘状の上の部品は扉の下部に埋め込まれて使用されていたものと考えられる。

**その他の出土遺物** 第1・第2トレンチからは、軸受金具のほか鉄製の鉋留め金具が1点、瓦の小片が10点ほど出土した。これらの出土遺物の多くは第1トレンチから出土しており、平成21年度に発行を予定している災害復旧事業の報告の中で取り扱うこととしたい。

#### （4）軸受金具の理化学的分析

**概要** 取り上げ時に破損した軸受金具底部の剥離片を理化学的分析の試料とし、調査を行った結果、次の点が明らかになった。

①炭素（C）含有量は、2.3%前後で、融点1370℃程度が推定される亜共晶組成の白鑄鉄であった。鉄中の非金属介在物は、硫化鉄（FeS）主体に微量のマンガン（Mn）やバナジウム

軸受金具の  
理化学的  
分析



Fig.52 軸受金具側面観（左から、北面・東面・南面・西面）

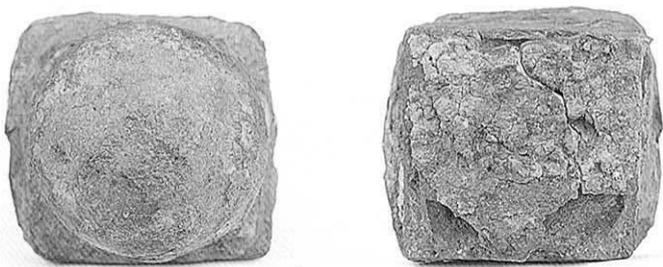


Fig.53 軸受金具上面観（左）、底面観（右）いずれも上が北面



Fig.54 韓国三年山城出土軸受金具（중원문화재연구원2004より転載）

2 北石垣C区城門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査

(V) を固溶する。バナジウム (V) は砂鉄特有元素であり化学組成にも微量含まれ、これに鉄鉱石（塊状磁鉄鉱）由来の銅 (Cu) を0.041%含むところから、砂鉄と鉄鉱石混合組成の可能性が指摘できる。

②金具の最表層は、鑄鉄の硬くて脆い欠点を焼なまし脱炭を施し、軟化している。この脱炭軟化層は礎石軸摺穴の花崗岩に対しての馴染み代の緩衝部であり、嵌込み時の損傷防止策と理解される。

③産地同定が大きな問題となる。12.8kgの重量鑄物である。7世紀後半代の国内鉄生産は、西日本では低温箱形炉の操業であって、低炭素鋼の調達が主流であり、高温操業産物の銑（ずく）の大量供給はいささか難点をもつ。産地は大口径送風管をもち、銑生産の実績を持つ朝鮮半島側に求めるには緊迫した国際関係（白村江の戦い）のなかからの搬入になると現実味は薄かろう。となると国内の複数以上の製鉄場より掻き集められた少量の銑鉄の集合品となる。その履歴が砂鉄や鉄鉱石が混じるのはこの辺の事情を物語る。現地周辺の製作で百済からの亡命技術者の関与の産物と考えられる。

調査方法及び調査項目

イ. 供試材：Tab. 7 に示す。礎石から軸受金具の取り上げ時に折損した下部側底部の剥離片 調査の方法  
を用いた。7.2gの小破片で僅かに銹化を受けて純メタルではない。

ロ. 肉眼観察：外観上の特徴を述べる。

ハ. マクロ組織：本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分

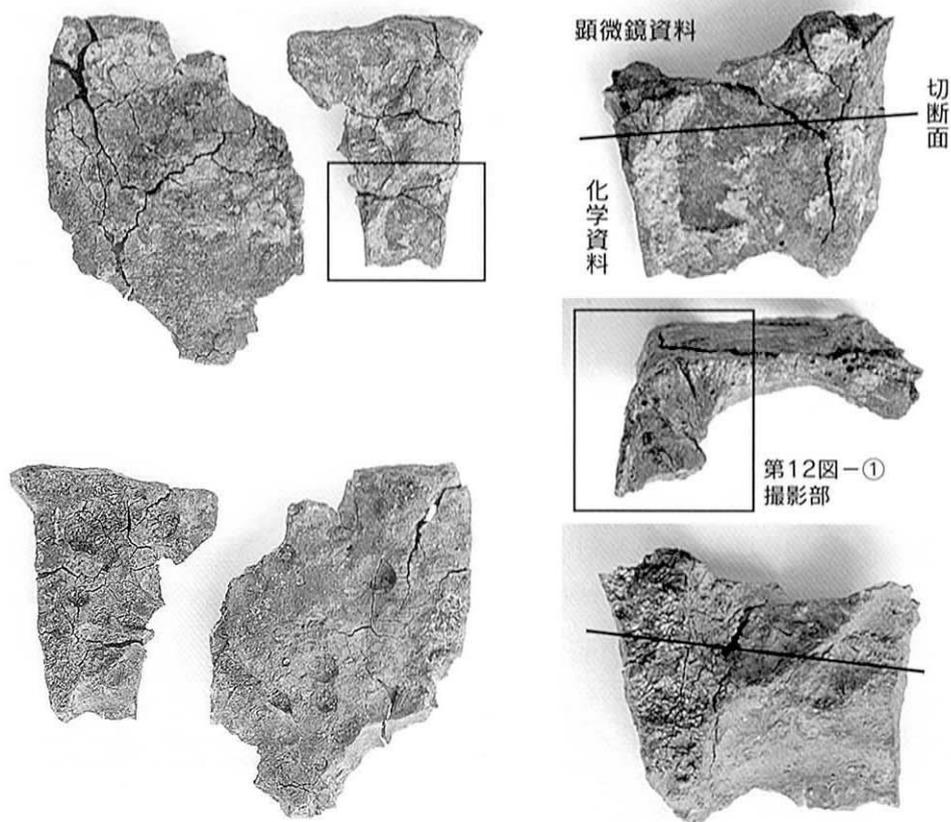


Fig.55 化学分析提供の資料

左：底部片全体像（上：外面，下：破断面） 右：提供試料（上：外面，中：側面，下：破断面）

### III 大野城跡の調査

布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

ニ. 顕微鏡組織：試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150, #240, #320, #600, #1000, 及びダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して50倍～400倍で写真撮影を行った。

ホ. ビッカース断面硬度：ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鋳滓中の晶出物の判定を行った。また金属組織 (合金相) の硬さ測定も同様に実施した。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50～200gfで測定した。

ヘ. EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査：鋳滓中の鋳物組成や、金属合金各相の組成の確認を目的とする。試料面 (顕微鏡試料併用) に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される金属 (合金) や鋳滓中の晶出物ほど明るく、軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

ト. 化学組成分析：出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

炭素 (C), 硫黄 (S) …：燃焼容量法, 燃焼赤外吸収法

珪素 (Si), マンガン (Mn), 燐 (P), 銅 (Cu), チタン (Ti), バナジウム (V), クロム (Cr), コバルト (Co) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法…誘導結合プラズマ発光分光分析。

#### 調査結果：OON-1 軸受金具

#### 調査の結果

イ. 肉眼観察：扉の回転軸を受ける金具で、全長約26cm, 重量12.8kgの鑄鉄製品である。造りは2分されて上半部が円柱状で先端が球状, 下半部は尻窄まりの立方体となる。すなわち、下半部を軸摺穴に挿入して固定される。この金具の下半部底面の側壁寄りに位置する剥離片 (20×15×2mm, 7.2g) を供試材とした。一方、外面の鑄肌は溶湯中の水素ガス起因のピンホール (径0.5mm以下) が散在し、銹化による茶褐色から灰褐色の錆に覆われる。これに灰白色皮膜が局部的に固着するのは粘土であろうか。破面は銀白色がくすみ、金属鉄組織は既に損なわれていた。破面が銀白色を呈する鑄鉄は白鑄鉄 (white cast iron) に分類される。

ロ. マクロ組織：Fig.56の②に示す。断面は研磨直後の組織にもかかわらず、既に自然腐食 (etching) をうけて、黒色のオーステナイト (常温ではパーライト) の初晶と地はオーステナイトとセメンタイトとの共晶のレデブライト主体の亜共晶組成 (<4.23%C) の白鑄鉄組

Tab.7 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目							備考	
						大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カロリー
OON-1	大野城跡	北石垣地区		軸受金具	7世紀後半	20×15×2	7.2			○	○	○		○	○			底部剥片

## 2 北石垣C区城門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査

織が表われている。外側表層に当たる左側は、茶褐色の錆化層が遺存して、その内側（右）に径0.5mm以下のピンホールの発生が認められる。このピンホールは、前述肉眼観察で指摘した結果と共通する。なお、視野全体に黒色亀裂が走るのは、金具が礎石に錆により癒着していたのを、間接打撃を加えて取り上げた際の痕跡ではなかろう。冷間もしくは熱間に生じた収縮割れであろうか。

ハ、顕微鏡組織：Fig.56③④に示す。③の主要組織は、軽度の酸化鉄で、炭素量が2.3%前後の亜共晶組成の白鑄鉄である。マクロ組織では低倍率故に不明瞭なので触れなかったが、左側の錆化鉄層に残された脱炭組織の痕跡に注目して頂きたい。ここを④の拡大組織で示しているように、鑄鉄の硬くて脆さの根源となる炭素（C）と鉄（Fe）との化合物の遊離セメント（Free Cementite）が無くて、フェライトとセメントの層状組織のパーライトがフェライト地に晶出する。金具は空气中で高温に加熱され、表面が酸化されると同時に表皮の炭素も酸化され取り去られている。900℃前後の加熱の脱炭焼なましが行われて、遊離セメントの大部分は、CO或いはCO<sub>2</sub>ガスの形で逸出した後のパーライト組織に想定される。脱炭表層の軟質化は、礎石軸摺穴の花崗岩に対する損傷防止対策の可能性が高い。

ニ、ビッカース断面硬度：Fig.56⑤～⑦に金属組織を検証するための硬度測定の前痕を示す。まず、⑤はフェライトとセメントの黒色層状組織のパーライト部分で、値は234Hvが得られた。次に⑥は蜂巣状組織のレデライト部分で、680HV、更に⑦は白色板状結晶のセメントで787Hvと硬質である。パーライトは、レデライトやセメントよりも随分軟質であり、軽度の酸化を受けながら（自然腐食で組織が表れる）硬度値は、金属鉄に近似した値を呈し、各組織に対しても矛盾のない値であった。

ホ、EPMA調査：鑄鉄中の非金属介在物（non-metallic inclusion）の調査結果をFig.57・58に示す。非金属介在物とは鉄鋼中に介在する固溶体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガ、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称である。本稿では硫化鉄（FeS）が検出された。この非金属介在物は鉄の製造履歴を考察する上で重要な物質で、人間のDNA（細胞の遺伝子）に匹敵して多くの情報が得られる。

Fig.57の1段目右側中央に約10μmの黄褐色介在物の反射電子像（COMP）を示す。1の番号をつけた介在物の特性X線像では、硫黄（S）に強く白色輝点が集中し、定量分析値が56.2%Fe-36.5%S-3.3%Mn-1.6%V組成から、主要鉱物相は硫化鉄（FeS）で、これに少量のマンガ（Mn）とバナジウム（V）を固溶する。なお、この硫化鉄の周囲には燐（P）が偏析しており、特性X線像にその分布状況が観察される。この燐はFe-Fe<sub>3</sub>C-Fe<sub>3</sub>Pの三元系共晶であるステダイト（steadite）として存在している。Fig.58も繰り返し調査の確認を目的として5μmの小径介在物の特性X線像と定量分析値を提示した。2の番号のつく介在物は57.1%Fe-37.1%S-3.4%Mn-1.6%V組成で、その周囲には燐偏析が認められた。両者はほぼ近似した組成の非金属介在物と同定される。マンガ（Mn）は鉄鉱石や特殊地域の砂鉄に含まれる。バナジウム（V）も砂鉄特有元素であるが、量が少なく、チタン（Ti）やジルコニウム（Zr）などと共存していない。

以上のように砂鉄原料の要素をはらむが決定的でない。後述の化学成分の銅（Cu）との関係から砂鉄と鉄鉱石の混合説への発展できるデータの提示となった。

III 大野城跡の調査

- ① ×3外観(検鏡埋込試料)
- ② ×10マクロ組織
- ③ ×100表層パーライト(脱炭)  
内部亜共晶組成白鑄鉄
- ④ ×400 ③表層部拡大
- ⑤ ×200 234Hv: パーライト
- ⑥ ×200 680Hv: レデブライト
- ⑦ ×200 787Hv: セメントライト

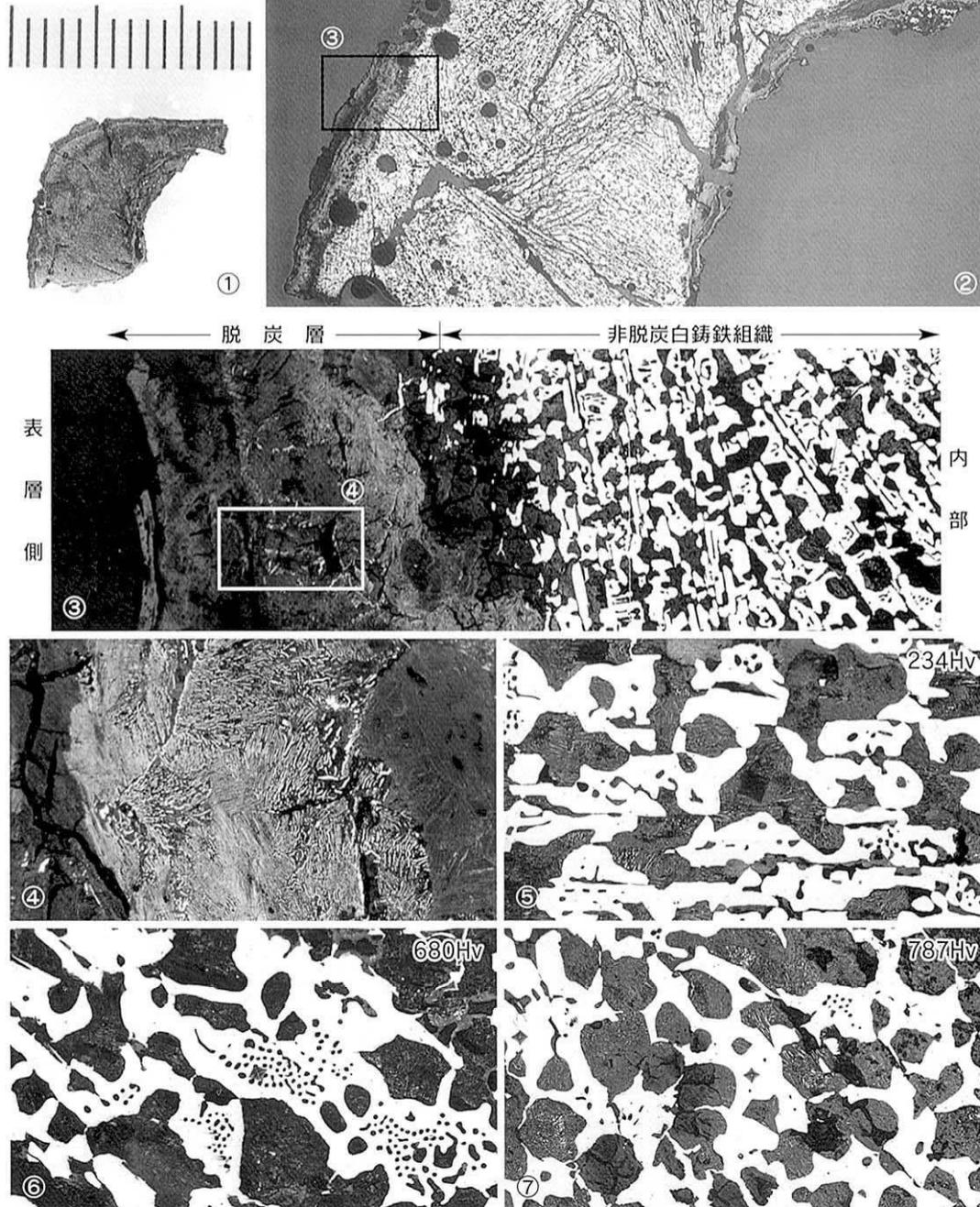


Fig.56 顕微鏡組織写真

へ、化学組成分析 (Tab. 8) : 化学組成は特別な合金配合は認められず、製錬生成された鉄鉄のままが再溶解されての充当が想定される。

以下に鑄鉄金具の一般化学組成のC, Si, Mn, P, S, Cuなど6元素と共に、随伴微量元

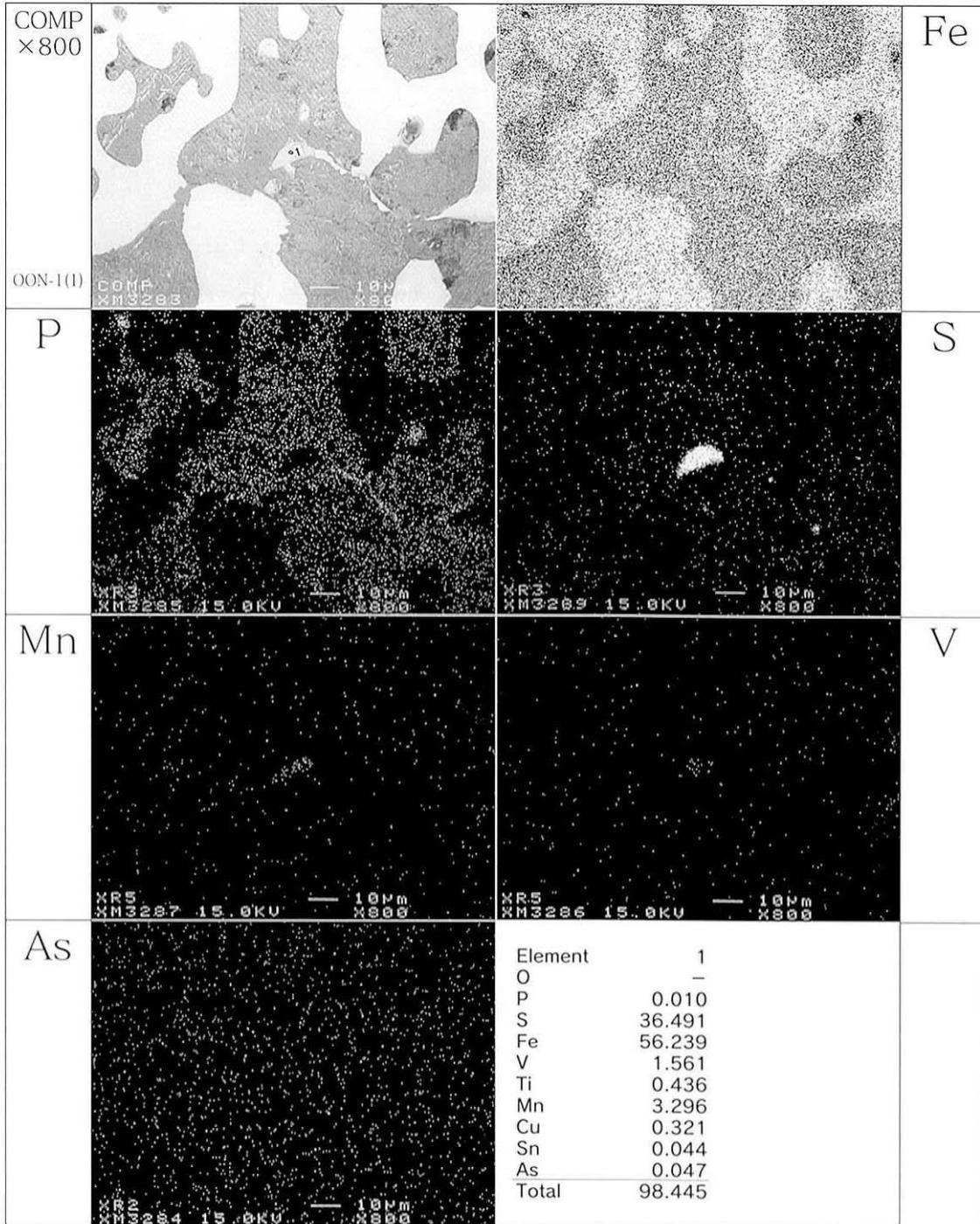


Fig.57 鉄中非金属介在物のEPMA調査 (その1)

素である、Ti、V、Cr、Coなどの動向を述べてみる。炭素 (C) は顕微鏡組織からみて2.3%が推定された。化学分析値は接着剤 (エポキシ系か) が使用された剥離片で5.32%と出たが、これは採用できない。実用鋳鉄の炭素量は、2~4%のものが多く、金具はこの範囲内に収まる。ただし、鋳鉄の炭素量の低い領域は、Fe-C系平衡状態図 (註1) からみて (Fig.59)、溶融点が高温側に位置し、炭素量が2.3%近傍であれば溶融点は1370℃が求められて、これを鋳込む場合はランニング温度として、更に150℃以上を上乗せしなければならない。7世紀後半代の技術としては、かなり厳しい温度設定となろう。珪素 (Si) は

III 大野城跡の調査

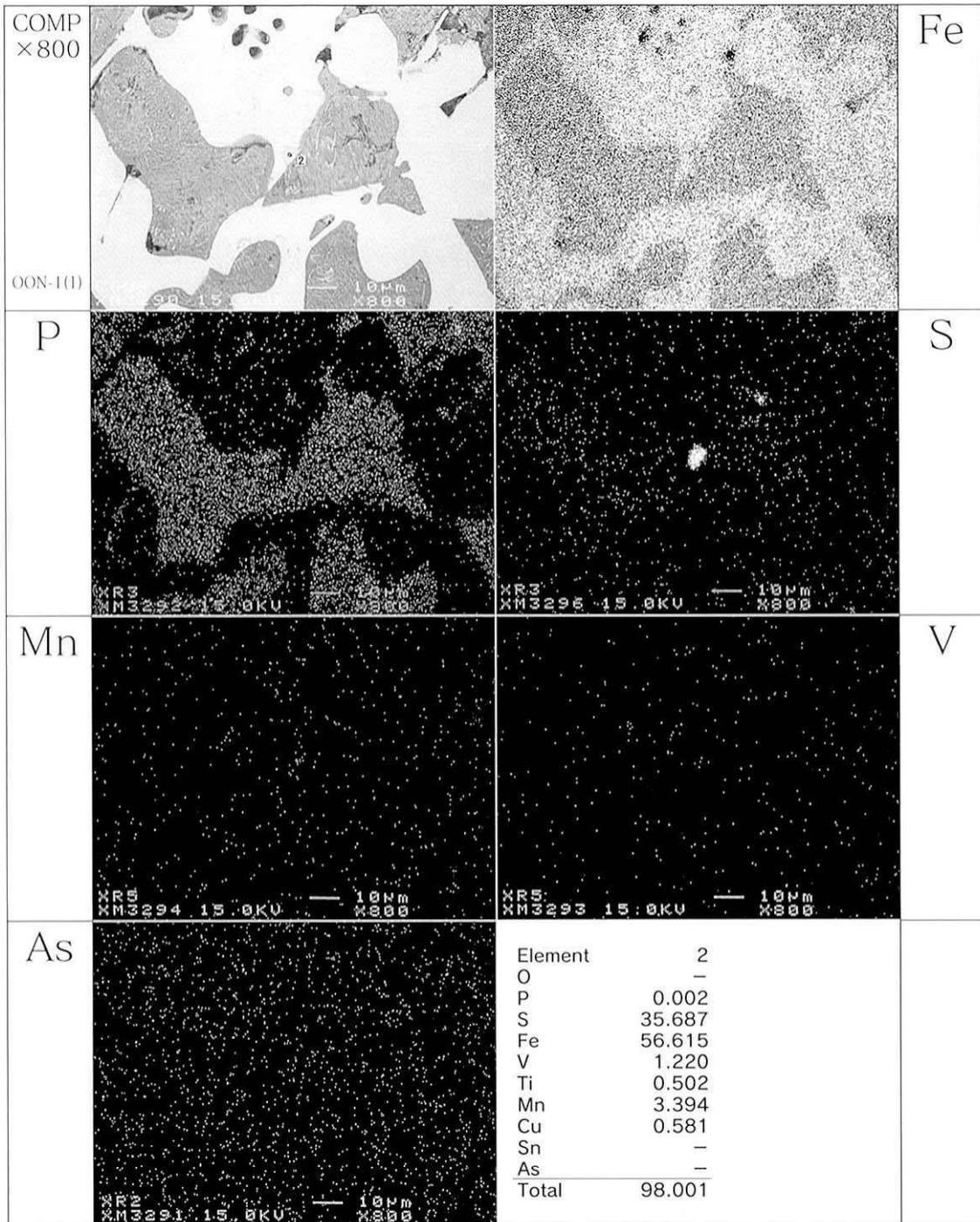


Fig.58 鉄中非金属介在物のEPMA調査 (その2)

0.56%と古代鑄鉄成分とすると若干高め傾向にあり、こちらも接着剤の影響が指摘できる。珪素は白鑄鉄の軟質化には重要な元素であるが、1%以上の値があれば検討の余地もあるが半端な数値である。また、軸受金具は静荷重であり、機械構造用鑄物としての性能を要求されてはいない。接着剤の影響が無ければ0.2%以下であろう。マンガン (Mn) の0.002%は妥当な数値である。マンガン (Mn) は少量あれば硫黄 (S) と反応し、硫化マンガン (MnS) を生成する。金具の非金属介在物の硫化鉄に微量のマンガンの固溶があったのは、この辺の事情を裏付ける。硫黄 (S) は0.075%あり、若干高めで気掛りな数値である。こ

2 北石垣C区城門跡出土の鉄製厚軸受金具の理化学的調査

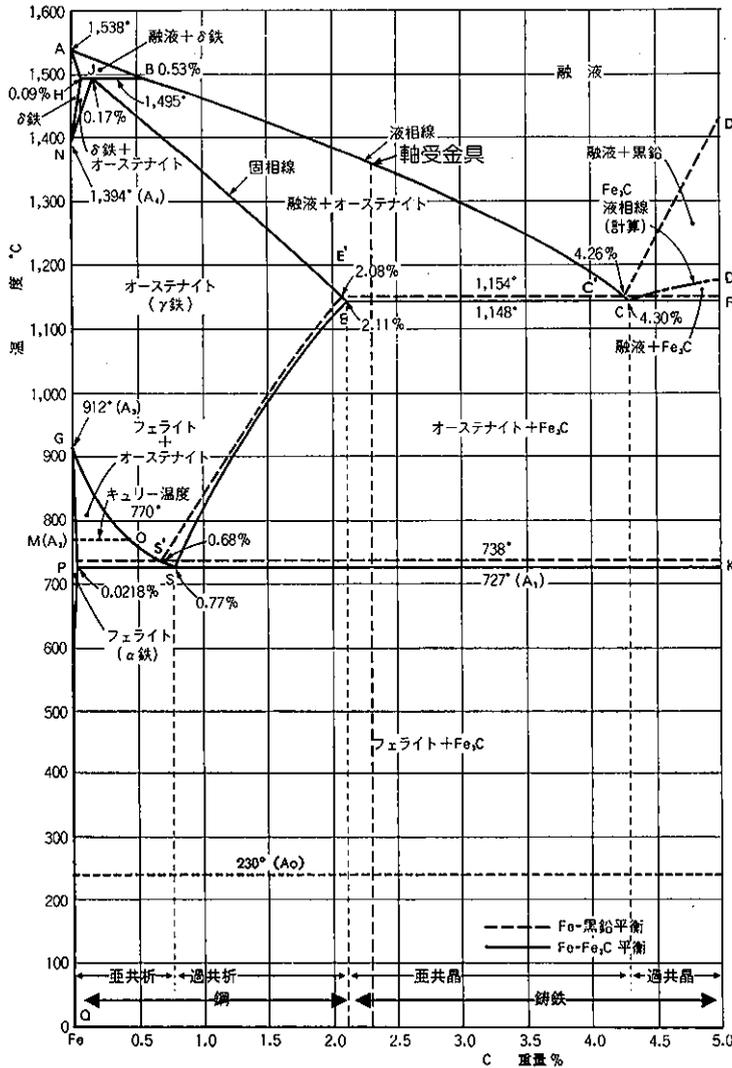


Fig.59 出土軸受金具の金属組織から見た理想溶解温度

低くなり、指標元素になり得ない。一方、バナジウム (V) も砂鉄特有元素であって、こちらが0.038%と有意な値で出ている。他にクロム (Cr) は0.042%含有されていた。微量含有ながら産地同定の鍵となる値である。

ちなみに福岡市周辺の山地に蛇紋岩が賦存するので、これからのクロム (Cr) が砂鉄中

ちらも接着剤の可塑性添加物としての存在から、その影響があるかも知れぬ。ただし、非金属介在物の主要鉱物相は硫化鉄 (FeS) で、ある一定量は含有されるのは当然である。ただし、製鉄原料が硫化鉄レベルではない。次に燐 (P) は通常レベルの0.166%だった。こちらでもEPMA調査 (特性X線像) でP偏析のステダイトが検出されたが燐が特別多い訳ではない。一方、ステダイトは耐摩耗性向上に寄与するが、そこまでの配慮とはいい難い。また、燐は溶融点を低下させ、鑄造時の溶湯の流動性をよくするので、添加される場合もありうるが、ここでは埒外 (らちがい) の値だろう。銅 (Cu) は0.041%であった。製鉄原料に砂鉄が使われていれば、0.02%以下となり、この数値は鉄鉱石の磁鉄鉱の可能性をもつ。随伴微量元素のチタン (Ti) は0.001%とごく微量である。砂鉄特有元素であるが、親石元素であり、滓に移行するので鉄中の値は

Tab.8 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Cr	Co	As	備考	注
OON-1	大野城跡	北石垣地区	軸受金具	7世紀後半	(2.3%) *5.32	0.56	0.002	0.166	0.075	0.041	0.001	0.038	0.042	0.043	0.005		
RAK-1	栗浪土城跡	-	鑄造鉄片	漢代か	4.33	0.01	0.014	0.276	0.025	0.070	<0.001	0.006					(1)
MY25-18	牧羊城	北5区	鑄造鉄片	戦国 奈良	4.50	0.17	0.078	0.173	0.009	0.112	0.005	0.005	0.011	0.003	0.020		(2)
KSN-1	クラスキノ	-	鋳鉄塊	9C代	3.86	0.006	<0.001	0.106	0.024	0.002	0.001	0.002	<0.001	0.007	0.001		(3)
KAK-33	花前II-1	-	鉄塊系遺物	9C	3.62	<0.01	0.01	0.171	0.046	0.01	0.01	0.05	0.03	-	-	千葉砂鉄原料	(4)
KAK-44	愛媛大学復元実験	2号炉	流出鉄 No.24	現代	3.89	<0.01	0.016	0.240	0.020	0.007	0.022	0.020	0.009	0.01	-	島根江津砂鉄 7.31%TiO <sub>2</sub>	
KAK-59	愛媛大学復元実験	3号炉	流出鉄 No.5	現代	3.46	<0.01	0.019	0.251	0.028	0.006	0.004	0.012	0.059	0.02	-	福岡芦原砂鉄 26.53%TiO <sub>2</sub>	
KAK-65	愛媛大学復元実験	4号炉	流出鉄 No.11	現代	2.11	<0.01	0.009	0.551	0.025	0.007	0.008	0.004	0.006	0.02	-	鹿児島指宿砂鉄 9.37%TiO <sub>2</sub>	
KAK-71	新見銃押し炉	-	流出鉄 (後半)	現代	3.33	0.01	0.007	0.085	0.010	0.007	0.018	0.009	0.006	<0.01	-	鳥取哲生砂鉄 1.28%TiO <sub>2</sub>	

(注) \* 破片は接着剤 (エポキシ系) 使用のため、(C) (Si) (S) 異存留の可能性、(C) は組織から2.3%を推定  
(1) 大澤正己 2007a (2) 大澤正己 2007b (3) 大澤正己 2006b (4) 大澤正己 2006a

III 大野城跡の調査

Tab.9 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)										
						C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Cr	Co	As
OON-I	大野城跡	北石垣地区	軸受金具	7世紀後半	介在物：FeS系、最表層P、内部P、C、L	(2.3) *5.32	0.56	0.002	0.166	0.075	0.041	0.001	0.038	0.042	0.043	0.006
所見	亜共晶組成 (<4.23%C) 白鑄鉄、砂鉄・磁鉄鉱塊状の磁石混合組成の可能性、表層焼なまし脱炭(軟化)軸摺穴との嵌込み配慮か															

P: Pearlite (フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)、C: Cementite(Fe<sub>3</sub>C)、L: ledebulite (オーステナイトとセメンタイトの共晶)

に混入するとの指摘がある(井澤2005)。事実、製鉄滓からもクロムが検出される。過去に含クロム製鉄関連遺物の発見を言及しているが、<sup>ひら</sup>最近な例として6世紀後半~7・8世紀に比定される元岡・桑原石ヶ元古墳群出土鉄滓の報告の際に述べてきた(大澤2003)。更に注目すべきは、大宰府史跡第180次調査区(大宰府政庁正殿跡)から出土した7世紀代に属する鉄塊系遺物の表皮スラグからもクロム系スピネル磁物が検出された事実があった(大澤2002)。

以上の様に今回調査の軸受金具組成のパナジウム(V)クロム(Cr)の共伴は、在地砂鉄原料の反映と見做され、不足鉄鉄の補充に磁石系のものが加わって0.041%Cu成分が現れたと解釈しておきたい。

**まとめ** 軸受金具の亜共晶組成の白鑄鉄(2.3%C)は非金属介在物にバナジウム(V)を微量固溶し、化学組成の0.038%Vや0.042%Crから砂鉄起源、0.041%Cuから鉄磁石(磁鉄鉱塊状)と2種原料の混合組成の可能性が高い。更に原料砂鉄は、花崗岩由来で低チタン系(TiO<sub>2</sub>が1%前後)の糸島~福岡平野に賦存するものは、蛇紋岩からのクロムを含み、軸受金具の組成を裏付ける。さて、次に砂鉄起源の銑鉄には銅(Cu)を含まないのだろうか。この疑問に答えるのがTab.8の九州、山陰産砂鉄を原料として愛媛大学復元実験より得られた銑鉄の分析値である。Cuは0.006~0.007%と低く、0.041%Cuより遠く離れている。軸受金具は砂鉄単独製品でない事を再度確認できた。

軸受金具は砂鉄単独製品ではない

一方、福岡平野の鉄生産の動向をみてゆくと、6世紀前半から中葉にかけて梅林遺跡では含鉄製鉄滓が出土する(大澤・鈴木2001)。これに隣接して5世紀後半~6世紀中葉の梅林前方後円墳からも砂鉄製鉄滓が発見されている。福岡平野での6世紀前半代以降の製鉄はほぼ確実である。ただし、この時期の鉄は箱型炉による低温操業であり、塊鉄(極軟鋼)主体で製造できる高炭素含有の銑鉄は少ない。竪型炉導入直後の7世紀後半もこの様な状況だったと推定される(大澤1997)。大野城築城に当たっての百済の技術者も窮した事だろう。当事者達も故国では鉄磁石製鉄は経験しても砂鉄からの銑鉄造りは困惑し、太宰府の地で銑鉄を目的とした磁石製鉄の試みもなされた痕跡が辿れる。太宰府市向佐野に7世紀後半~8世紀前半に属する日焼遺跡がある。製鉄炉は未発見だったが原料磁石から炉壁、炉底塊、鉄塊系遺物など製鉄関連遺物が検出された。鉄の炭素は部位に偏析をもつものであったが、鉄滓屑の球状化からみて高温操業の雰囲気は認められた。砂鉄銀座の中の小規模磁床を採掘しての磁石製鉄で、後続なく途絶えている。まさに緊急事態に対処した磁石製鉄といえる。当遺跡では青銅塊も共伴して銅鑄造の派生物も検出された(大澤・鈴木2005)。福岡平野における看過できない磁石製鉄遺跡と思われる。軸受金具との結び付けは短絡だろうか。今後検討してゆきたい課題である。

## 2 北石垣C区城門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査

軸受金具の炭素量は、鑄鉄としては低めの2.3%前後である。これは融点が1370℃と高くて鑄造には不利な成分系である。原料鉄の寄せ集めで、製品化までに漕ぎ着けた出来合いの成分といえる。Tab. 8に中国漢代の鑄造鉄斧の分析値を示す。炭素量は4.3%前後の共晶域で溶融点の最も低い1150℃近傍の材質である。これは明らかに鑄込み作業の熱効率を配慮した成分選択であろう。こちらは鉄鉱石起源であり銅は0.070%~0.112%で、チタン(Ti) < 0.005、バナジウム(V) 0.005~0.006%と純血成分が読み取れる。国内の古代鑄鉄製品の分析値が豊富にあればよいのだが、高温多湿の我国では、銹化無しの鉄器分析は至難のわざである。

最後に7世紀後半代の製鉄において銹鉄は少量と発言してきたが、これに対して「古墳時代の製鉄炉でも銹鉄生産が可能であったということを指摘しておきたい」との主旨の論考が村上恭通愛媛大学教授より発表されている(村上2007)。

飛鳥・奈良時代の鉄生産は中央政権の管理のもとに進められている。軸受金具の原料鉄が福岡平野産にだけ固執すべきでないかも知れない。例えば近江・吉備・備中・備後・石見・出雲・播磨・丹後など巨大製鉄遺跡からの銹鉄の流通のもとでの再評価も必要であろう。まずは多くの問題を残しつつも一先筆を擱く。

### 【註】

1) 山本科学工具研究社1980より、鉄-炭素系平衡状態図。

### 【参考文献】

- 井澤英二2005「日本の古代製鉄で使用された鉄」『ふえらむ』Vol.10-No.5 日本鉄鋼協会。
- 大澤正己1997「岩木中袋遺跡(空港No.2遺跡)出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第306集 千葉県文化財センター。
- 大澤正己2002「大宰府史跡(政庁跡・来木地区)出土鉄塊と鑄造関連遺物の金属学的調査」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館。
- 大澤正己2003「桑原石ヶ元古墳群出土鉄滓の金属学的調査」『元岡・桑原遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 福岡市教育委員会。
- 大澤正己2006a「クラスキノ遺跡出土鉄塊の金属学的調査」『渤海の鉄』金沢学院大学(予定)
- 大澤正己2006b「日本における初期製鉄遺跡出土遺物の金属学的調査」『製鉄鍛冶実験生成物の金属学的調査』『日韓古代製鉄遺跡出土遺物と実験生成遺物の比較』『日本列島における初期製鉄・鍛冶技術に関する実証的研究』(平成15年度~平成17年度(2003~2005年度)科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)愛媛大学法文学部
- 大澤正己2007a「楽浪土城出土椀形滓・鉄器の金属学的調査」『東アジアにおける楽浪土城出土品の位置付け』(平成17年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)東京大学。
- 大澤正己2007b「牧羊城跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』(平成16年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)東京大学。
- 大澤正己・鈴木瑞穂2001「鉄滓の金属学的調査」『梅林遺跡第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第660集 福岡市教育委員会。
- 大澤正己・鈴木瑞穂2005「日焼遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『太宰府・佐野地区遺跡群20』太宰府市の文化財第80集 太宰府市教育委員会。
- 村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店。
- 山本科学工具研究社1980『標準顕微鏡組織』(第1類・炭素鋼・鑄鉄編)改訂版1980
- 横田義章編1980『大野城跡IV』福岡県教育委員会。
- 중원문화재연구원2004『報恩三年山城』。

## IV 観世音寺出土資料の追補

### (1) 報告の経緯

国指定史跡「観世音寺境内および子院跡」の内、観世音寺の境内部分については平成16～18年度における正式報告書の刊行をもって、現段階における報告作業は全て終了した。今回、諸般の事情により正式報告書に掲載することがかなわなかった資料の内、比較的重要な遺物と考えられる木簡、青銅製品、文字瓦についてこの場において掲載する。石・土製品、陶磁器など、他の種類の遺物については、出土遺物の最終的な整理・収納が終わった時点で、再度報告したい。正式報告書に掲載することなく、このような場での掲載となったことを容赦いただきたい。

### (2) 報告資料の概要 (Fig.60, PL.35)

#### 木 簡

1 ○ 奉納 元年 男 十四才 559・18・9 9061

第126次補足調査S G3809の埋土から出土した。上端を圭頭状に削る。左右辺と下端は削り。上端から84mmほどのところに孔があるが、貫通していない。木簡表面のむかつて左側部分を上端から174mmほどのところまで薄く削る。また木簡の下端から300～280mmのところまで、角を面取りしている。観世音寺正式報告書刊行後に存在を確認した。観世音寺出土木簡の通し番号によれば、55号木簡である。

「奉納」と書かれていることと、上端を圭頭状につくこと、釘孔とみられる孔があげられていることから、寺院を巡礼した際に柱や壁に打ち付けて奉納する奉納札と考えられる。ただし、東京都浅草寺遺跡出土の天和年間（1681～1684）の奉納札（『木簡研究』21, 1999年）や兵庫県明石市雲晴寺近世墓群出土の弘化5年（1848）・明治35年（1902）の奉納札（『木簡研究』28, 2006年）などの出土例を参照すると、一般に奉納札の幅は60mmから100mmほどあり、観世音寺出土の奉納札はきわめて細いことがわかる。観世音寺は、宝暦14年（1764）刊行の『筑紫巡礼手引』（九歴蔵）にも筑紫三十三所霊場の三十三番札所としてみえている。

池状遺構S G3809は、講堂西側にあった茶室「天智院」が、南門跡内参道西側の現在地に移転した後、1951年ごろに掘られたものなので、この木簡の時期もそれ以降となる。なお、孔が貫通していないことから、実際に柱や壁に打ち付けられたかどうかは明らかでない。

#### 青銅製品

懸仏（2） 観世音寺の南辺域西地区にあたる第39-2次調査において、床土下の茶褐色土層から出土した。十一面観音と思われる坐像で頭頂部をわずかに欠損し、遺存高41mm、台座幅24mmを測る。表面は全体に磨耗し細部は不明で、裏面に1個の突起がある。本品は『大宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』図版40に写真のみ報告したが、今回、図とともに再報告した。

鈴（3） 第126次補足調査において、観世音寺講堂の北西部に設定した1トレンチの鑄造土坑S X3804上面で検出した。金銅製で表面に金が部分的に残る。摘みの上半部を欠き、図の裏面は大きく破損する。内部に鉄製の玉が入っていたようで、その錆が視認できる。図での遺存高18mm、幅16.5mm、厚さ0.5mm程である。

昭和時代の  
木 簡

十一面観音  
坐 像

瓦 類

文字瓦（4） 第126次調査で出土したもので、片側の断面を残す平瓦。凹面には布目痕、凸面に922型式の叩打痕が施されている。叩打痕は太めの斜格子の中に、横方向に施された「未」の第5画目を欠損した記号と、「\*」の2種類の記号が一定の間隔をもって印字されている。胎土は硬質で、表面は燻しがかかったように黒く銀光りしている。古瓦の中でもやや新しい印象を受ける。922型式については正式報告書の「遺物編2」に追加資料として掲載しているが、今回確認されたものの方が、残りが良いために報告した。

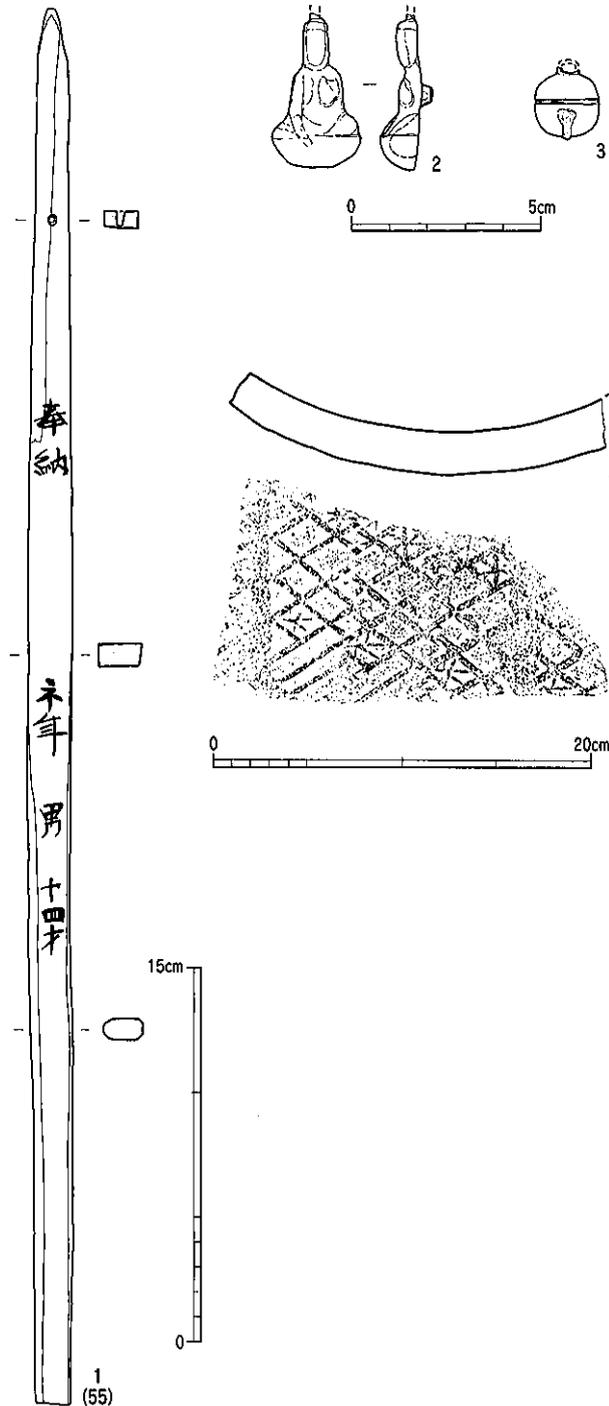


Fig.60 観世音寺出土遺物拓影・実測図 (1/2・1/3・1/4)

## V 松ヶ浦池周辺表採資料

### (1) 経緯

大宰府政庁跡の北東側にある松ヶ浦池において、昭和44年12月24日に福岡県教育委員会文化課職員により採集された土器・陶磁器・瓦類の資料が九州歴史資料館に保管されているが、これまで公にされてこなかった。今回の報告において松ヶ浦地区をまとめた報告が行われたため、それに併せ、当資料を報告する次第である。

### (2) 資料の概要 (Fig.61, PL.36)

#### 須恵器

蓋 (1) 口縁端部を明瞭に折り曲げる形態。復元口径16.0cm。

坏 (2・3) いずれも高台を持つ形態で、2は高台が強く外反する古い形態のもの。作りも非常に丁寧な印象を受ける。復元口径14.2cm, 復元高台径9.8cm, 器高4.95cm。底部にヘラ描きが見られる。3は口縁部を欠く。体部は直立気味に立ち上がる。復元高台径12.6cm。

高坏 (4) 返りを持たない杯部。脚部上部で折損する。復元口径16.9cmである。

#### 土師器

坏 (5) 高台を持つ形態だが、高台端部を欠損する。色調は明赤褐色を呈する。

#### 青磁

杯 (6) 龍泉窯系のI-4・b類の口縁部片。緑灰色の釉が全面にかかる。外面には隆起した蓮弁が若干確認できる。復元口径12.0cm。この他、近世陶磁器も数点表採されている。

#### 土師質土器

壺 (7) 近世の消し炭壺の破片か。粗い褐色の胎土で、外面にスタンプが施される。

#### 瓦類

丸瓦 (8) 凸面にやや細かい斜格子が施される破片。瓦はこの他にも数点表採されている。

#### 滑石製品

石鍋 (9) 復元底径21.6cmの底部片。体部の立ち上がりの角度と大きさからB群の中でも12世紀頃のものであろう。1～8とは別の時期に池の北岸で表採された。採集時期は不明。

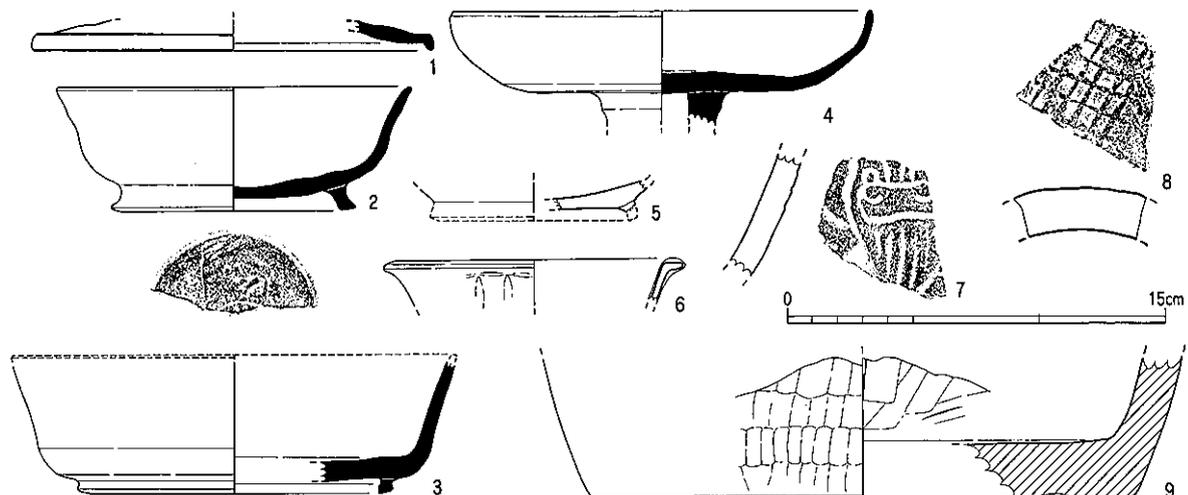


Fig.61 松ヶ浦池周辺表採資料実測図 (1/3)

# P L A T E S



(1) 第81次調査区と  
第136-2次調査区  
遠景（北から）



(2) 第136次調査区  
全景（西から）



(3) 第136-2次調査区  
全景（西から）



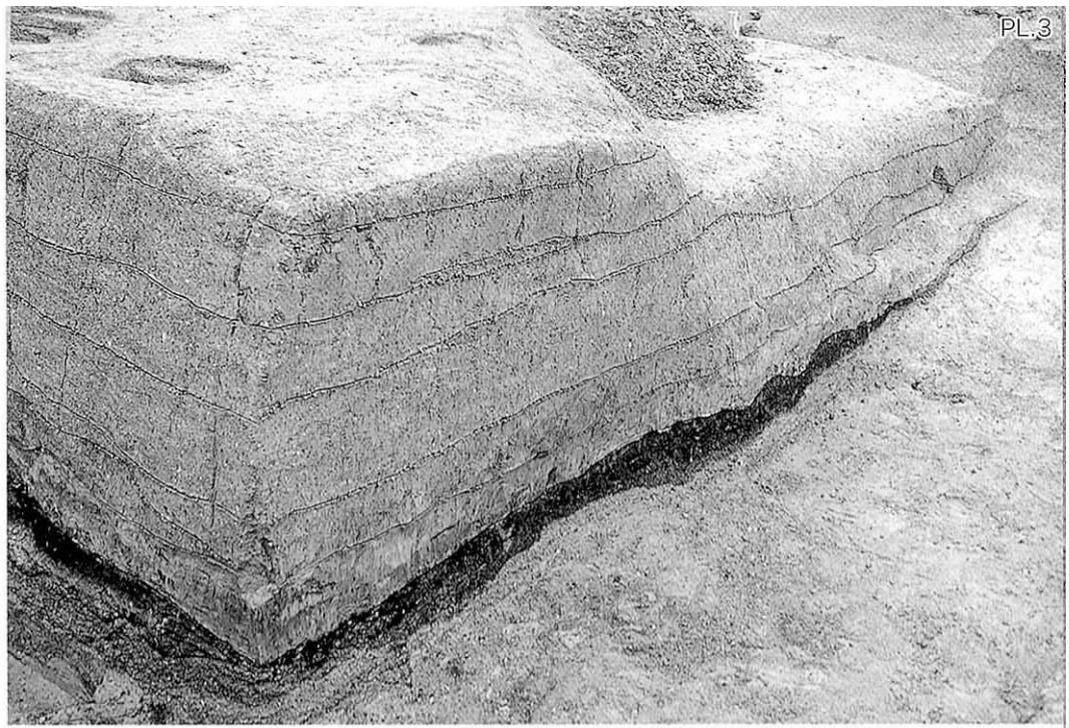
(1) 第136-2次調査区  
東半 (西から)



(2) 第136-2次調査区  
西半 (南から)



(3) 調査区土層 (西から)



(1) S X2318整地層1  
(西から)



(2) S X2318整地層2  
(南から)



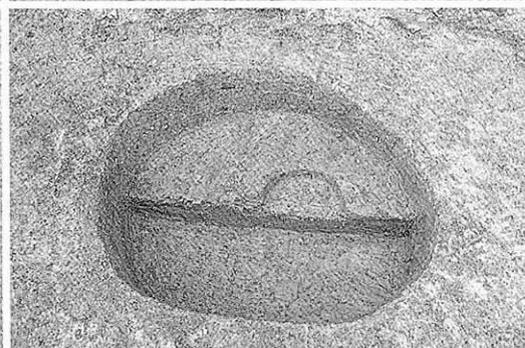
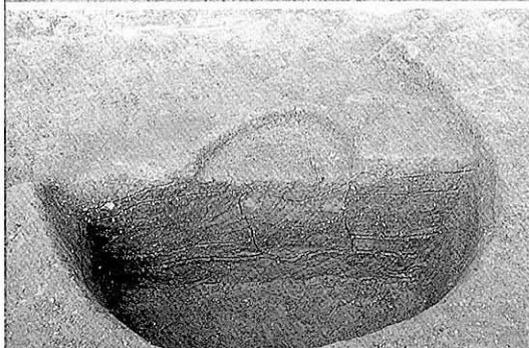
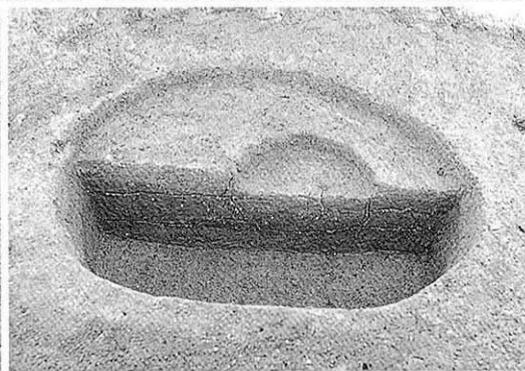
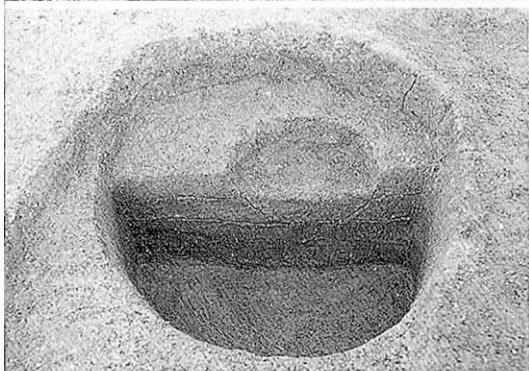
(3) S X2318整地層3  
(西から)



(1) S A4635  
(東から)



(2) S A4635と  
S X3937 (東から)



(3) S A4635柱穴

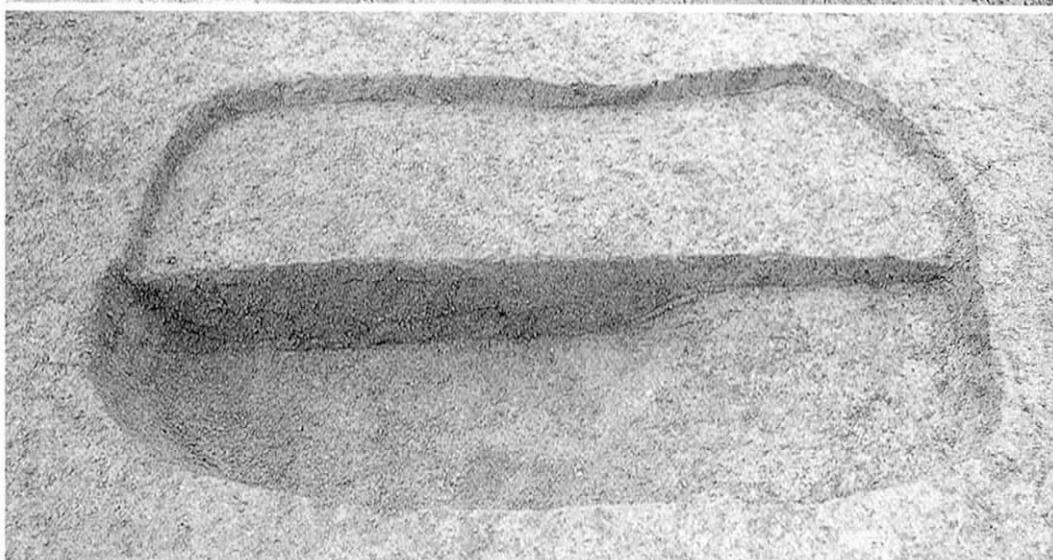
(1) S K 4636  
(南から)



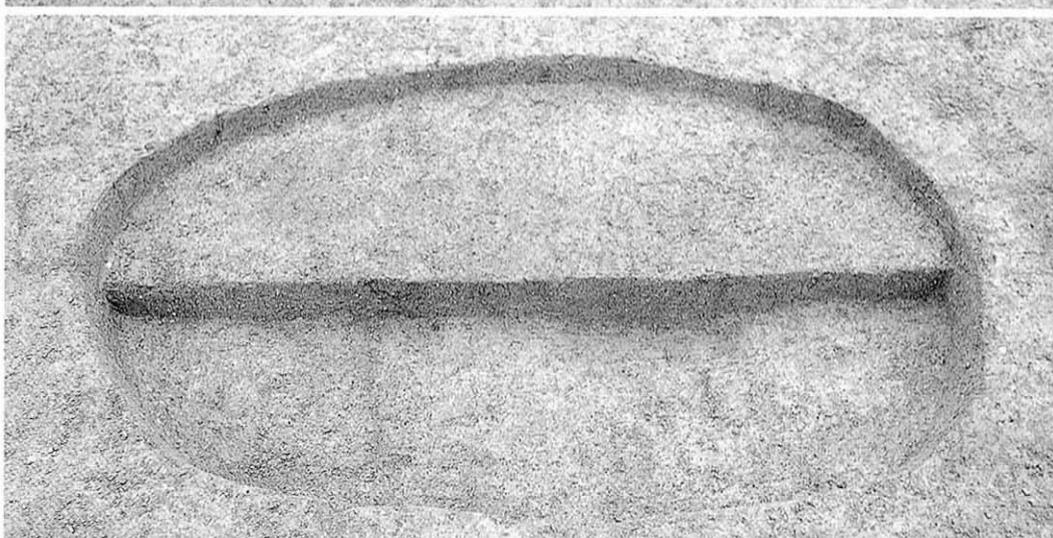
(2) S K 4637  
(西から)



(3) S K 4638  
(南から)



(4) S K 4639  
(西から)





(1) S X 3937  
(南から)



(2) S X 3937  
(西から)



(3) S X 3937縦木  
(南から)



(1) S X 3937 縦木  
(西から)



(2) S X 3937 下層  
(南から)



(3) S X 3937 下層  
(西から)



(1) S X 3937横木と  
S X 2318整地層  
(西から)



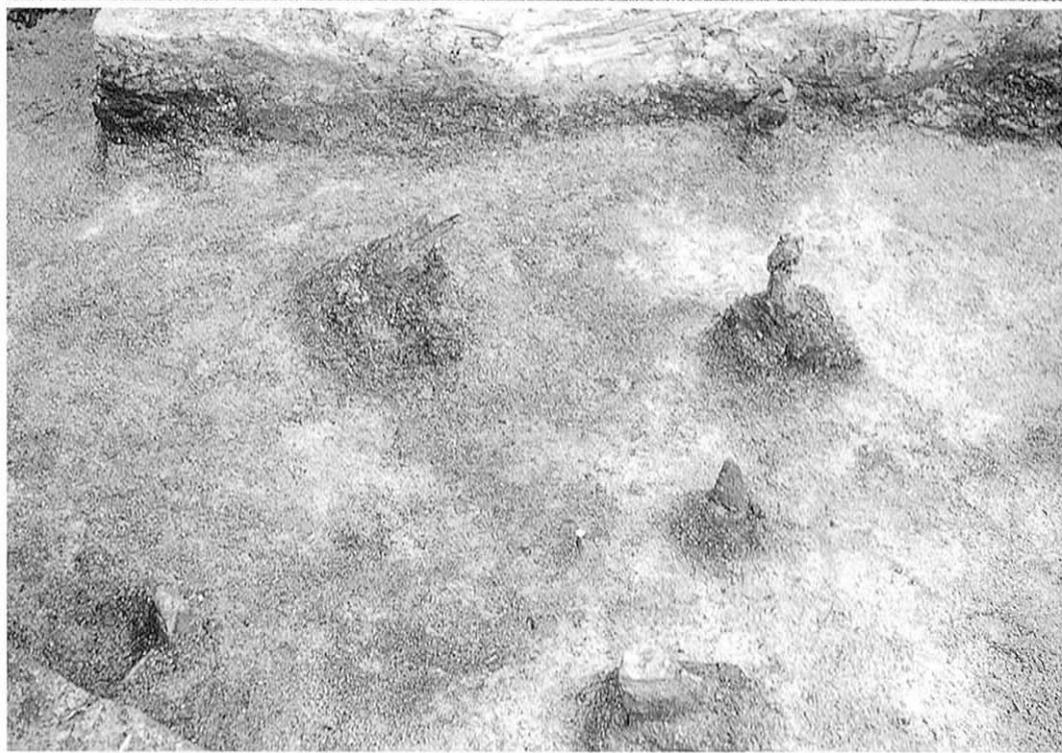
(2) S X 3937横木 1  
(西から)



(3) S X 3937横木 2  
(西から)



(1) S X3937杭1  
(南から)



(2) S X3937杭2  
(南から)



(3) S X3937杭3  
(東から)



(1) S X 3937敷粗朶  
(南から)



(2) S X 3937敷粗朶  
(西から)



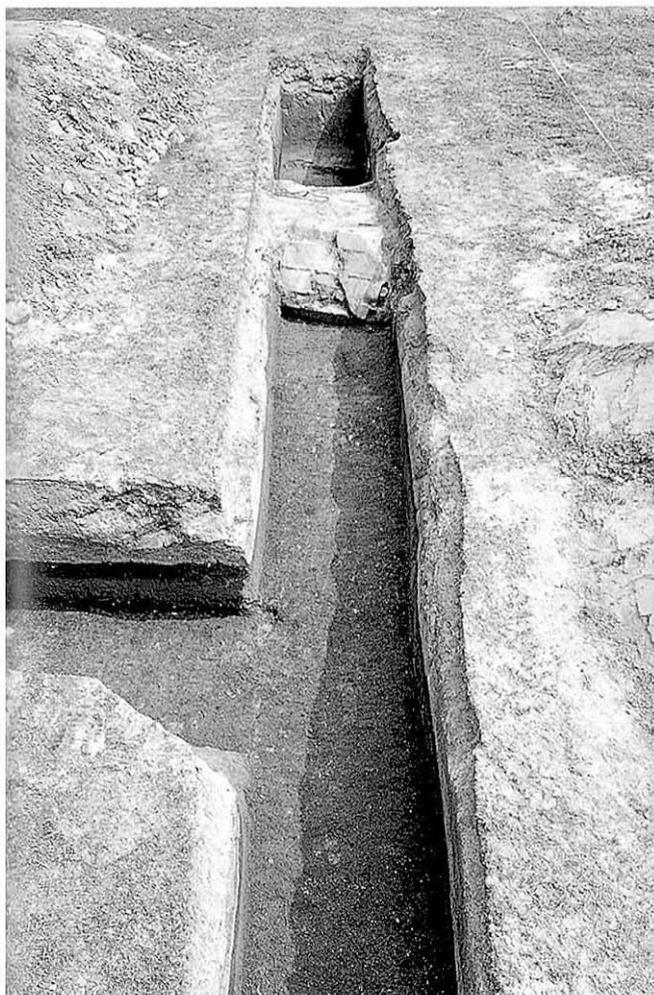
(3) S X 3938上面  
(南から)



(1) Aトレンチ全景 (西から)



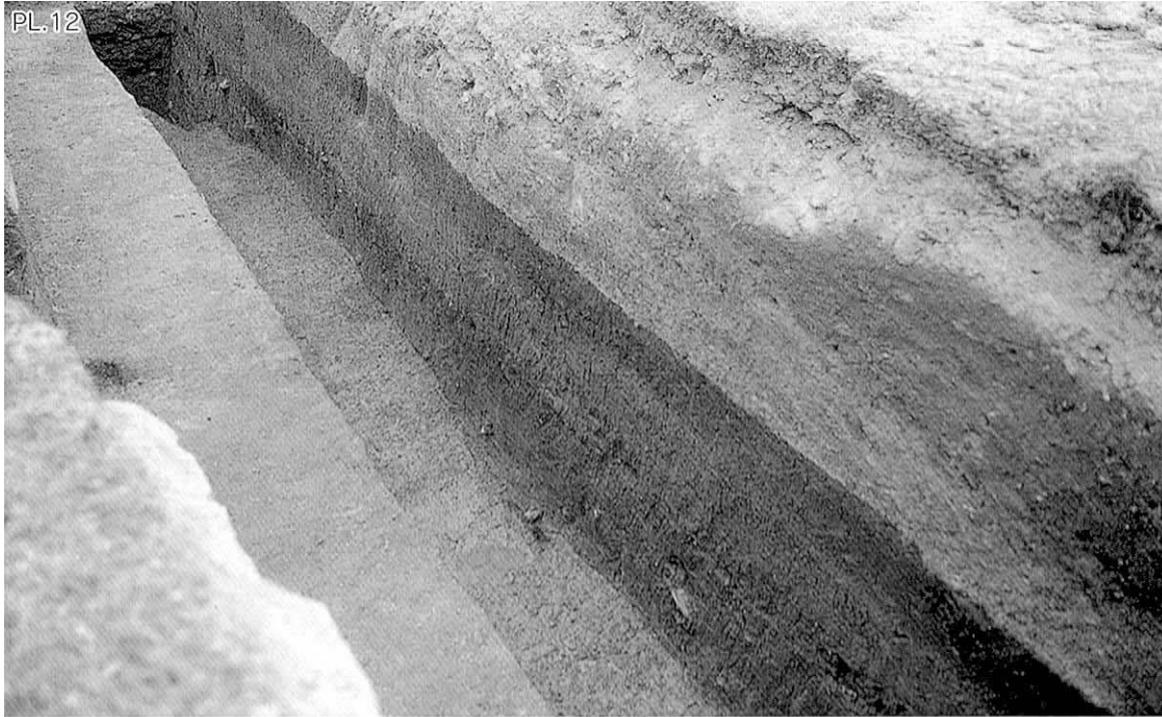
(2) Bトレンチ全景 (東から)



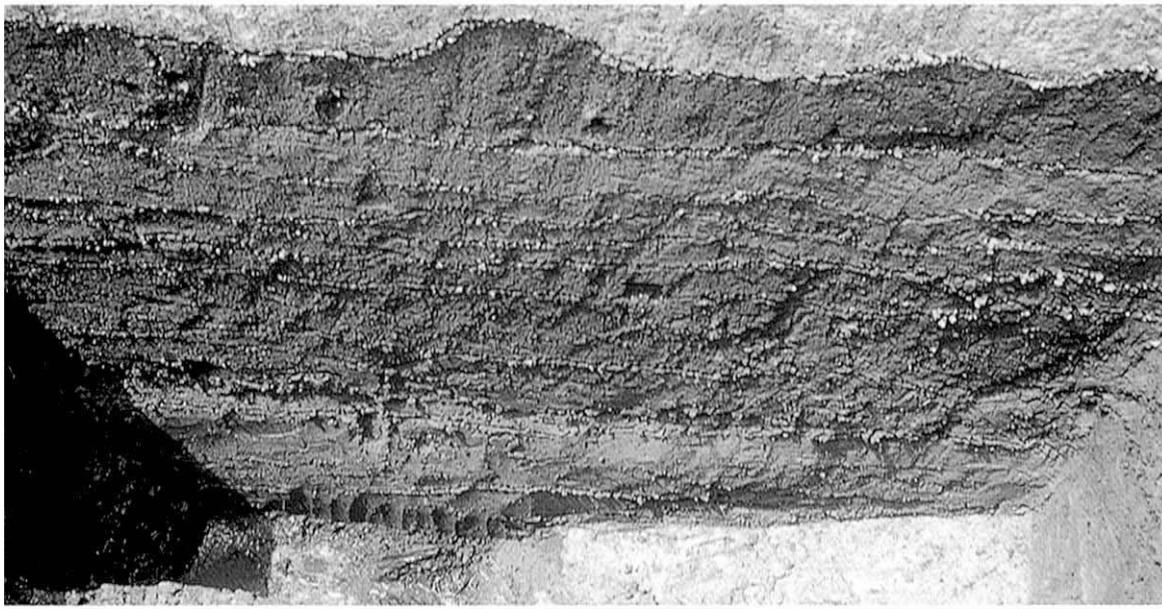
(3) C・Dトレンチ全景 (北から)



(4) C・Dトレンチ全景 (南から)



(1) Dトレンチ西壁土層  
(北東から)



(2) BトレンチS X4646  
土層断面 (南から)



(3) S X4646木片出土状況 (南東から)



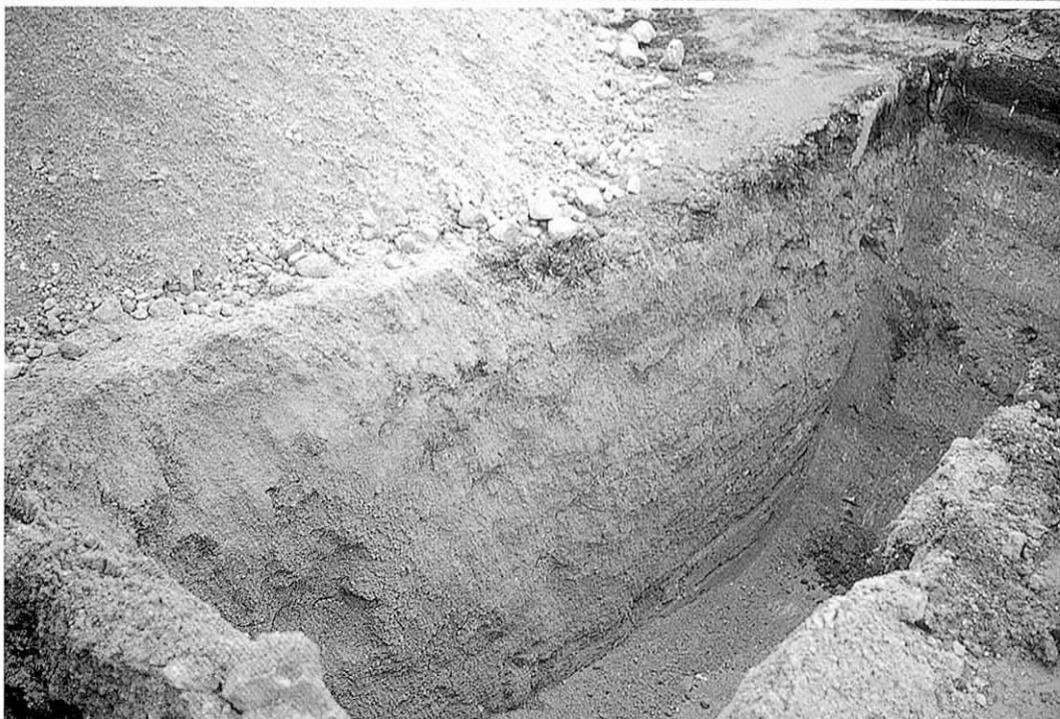
(4) S D2581(左)・2582(右)  
(第88次調査 東から)



(1) 第197次調査地  
(西から)



(2) 1トレンチ  
(北東から)



(3) 2トレンチ  
(南西から)



(1) 第86次調査区全景  
(北から 昭和58年度)



(2) 第86-2次調査区  
(南東から)



(3) S D4649・4651  
(南から)

(1) S I 2491  
(第86次調査 南から)

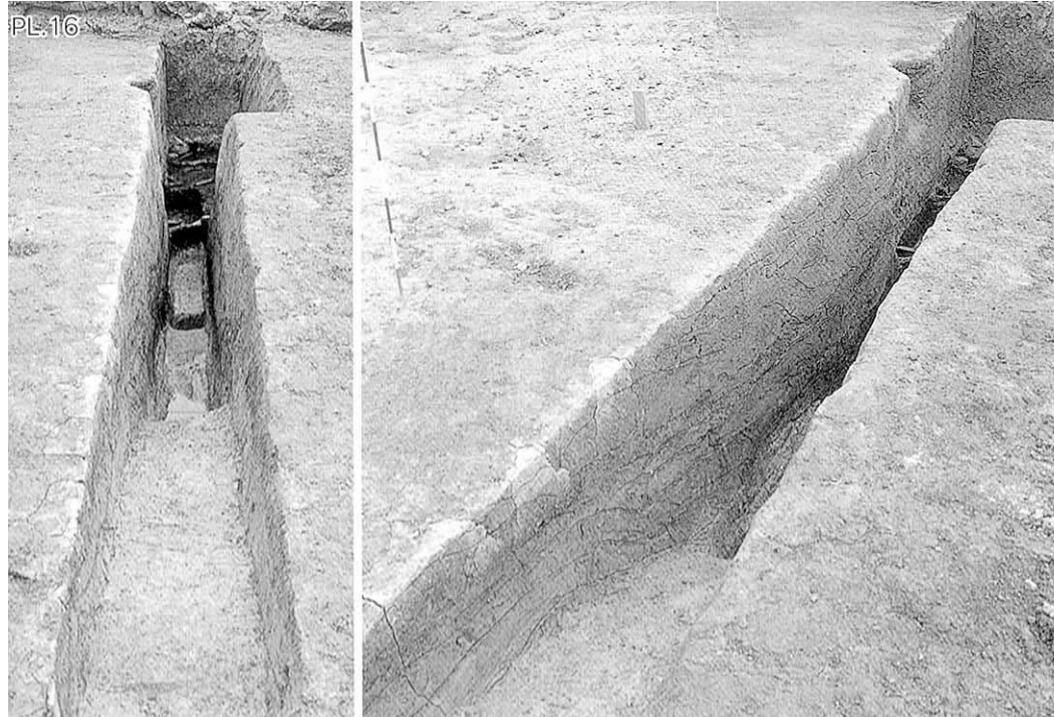


(2) S I 2491  
(第86-2次調査 南から)



(3) S I 2491カマド出土土器  
(東から)





- (1) 3トレンチ全景 (左)  
(西から)
- (2) 3トレンチ上層 (右)  
(南西から)



- (3) 3トレンチ腐植土層  
(南西から)



- (4) 3トレンチ腐植土層  
(南から)



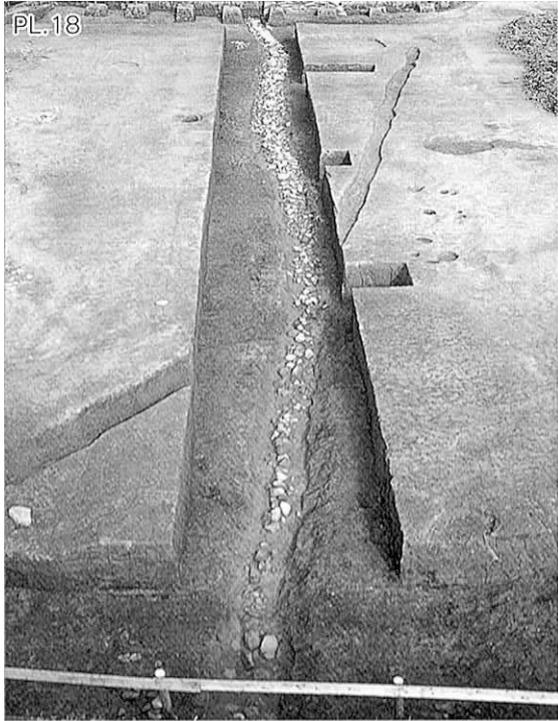
(1) 3トレンチ全景  
(第86次調査 西から)



(2) S X 2320  
(第86次調査 西から)



(3) 3トレンチ土層  
(第86次調査 南から)



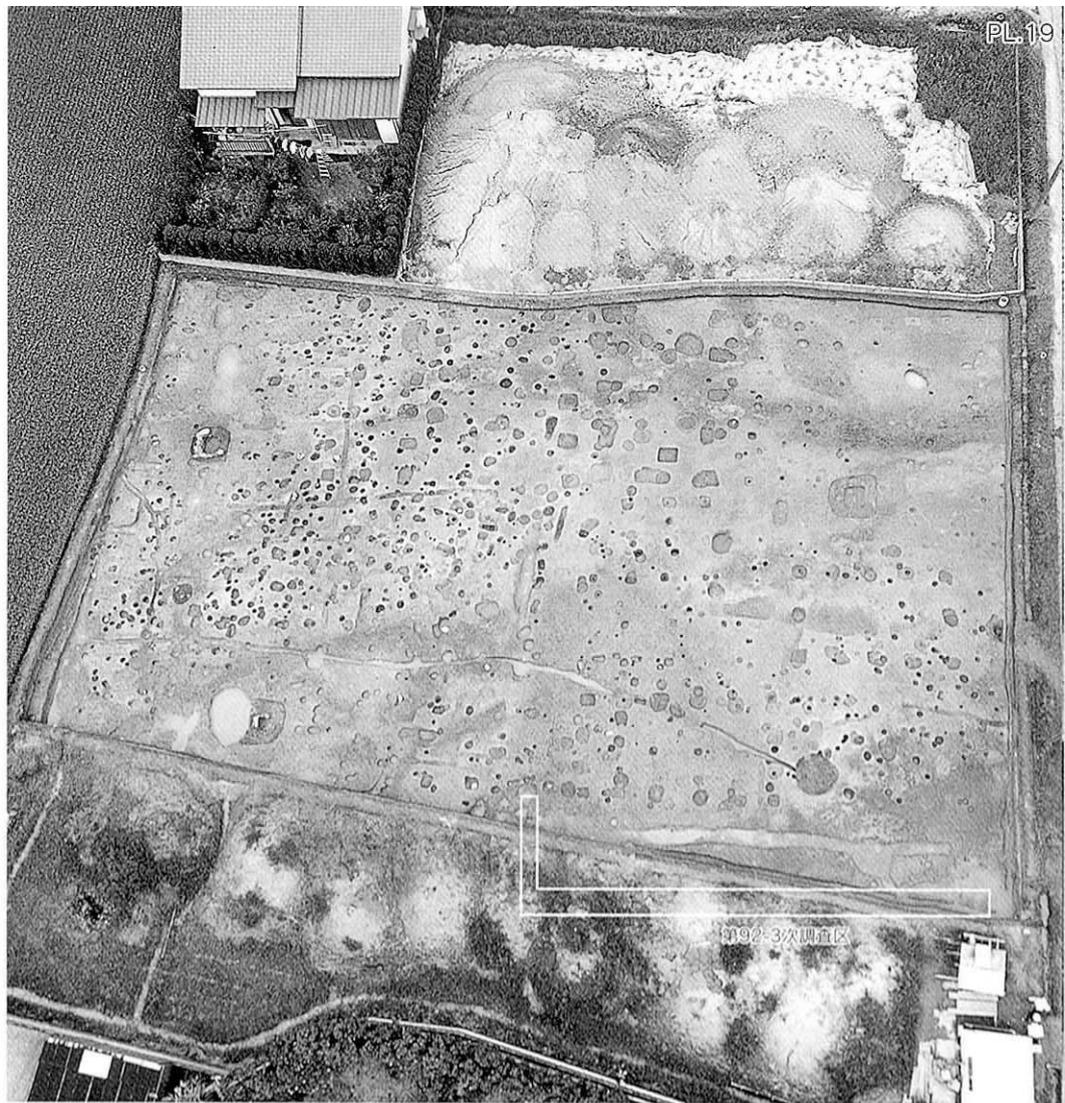
- (1) S X 2320 全景  
(第81次調査 南から)
- (2) S X 2320  
(第81次調査 北から)



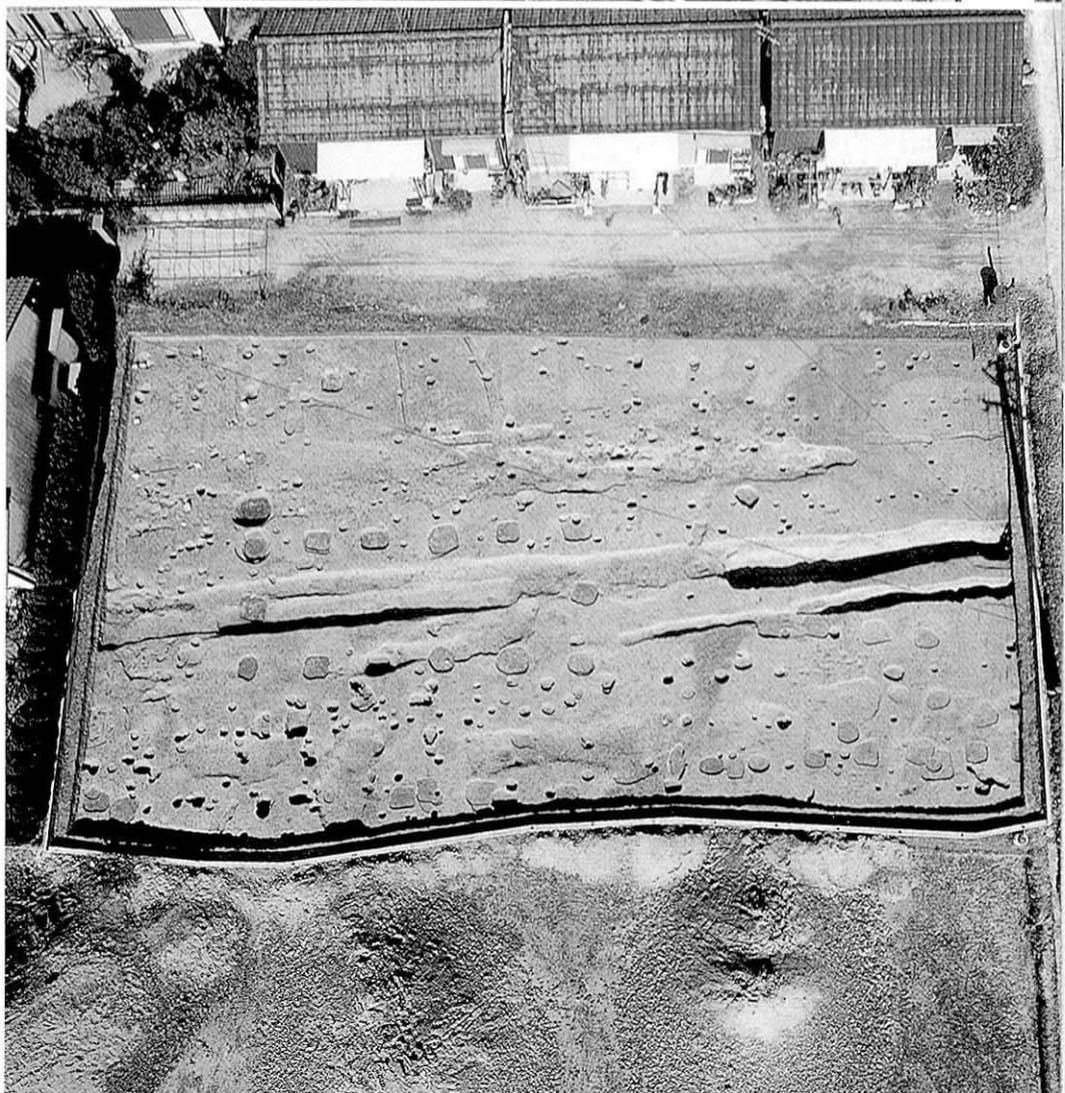
- (3) S X 2320  
(第81次調査 南から)



- (4) S X 2320 下部敷粗朶  
(第81次調査 南から)



(1) 第92次調査区  
南半部  
(南上空から)



(2) 第92次調査区  
北半部  
(南上空から)



(1) 第92-3次調査区全景  
(東から)



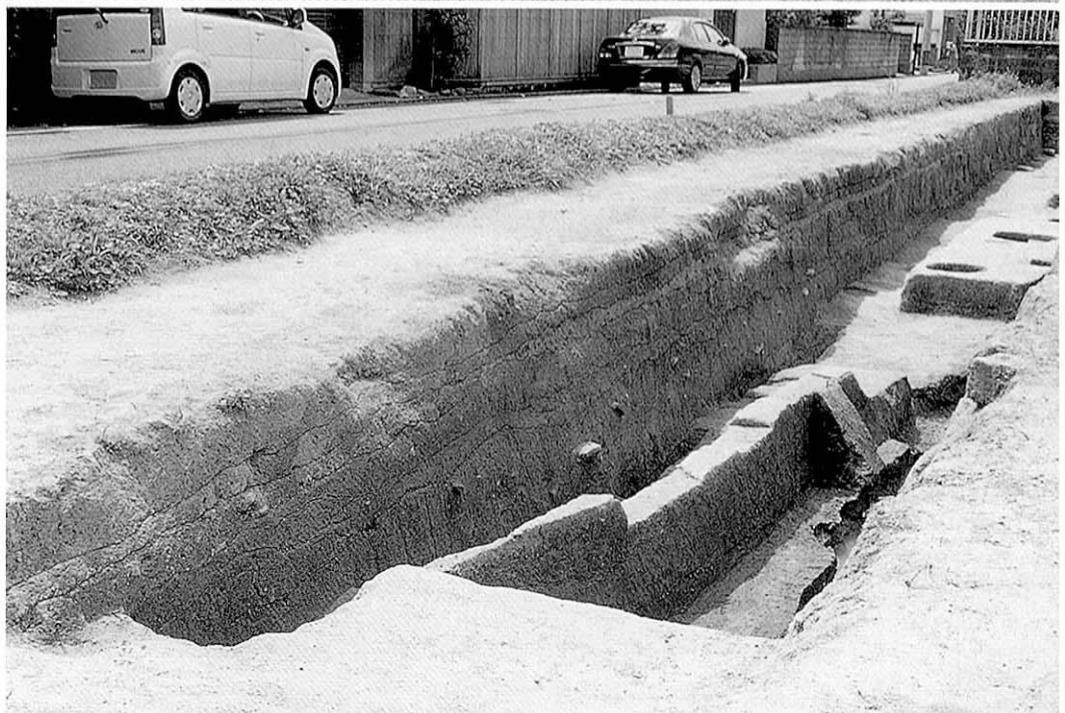
(2) 第92-3次調査区西側  
(北から)



(1) 西壁土層  
(北東から)



(2) 南壁土層  
(北西から)



(3) 南壁土層  
(北東から)



(1) S A4652・4654  
(西から)



(2) S D4653 (北から)



(3) S D4655 (南東から)



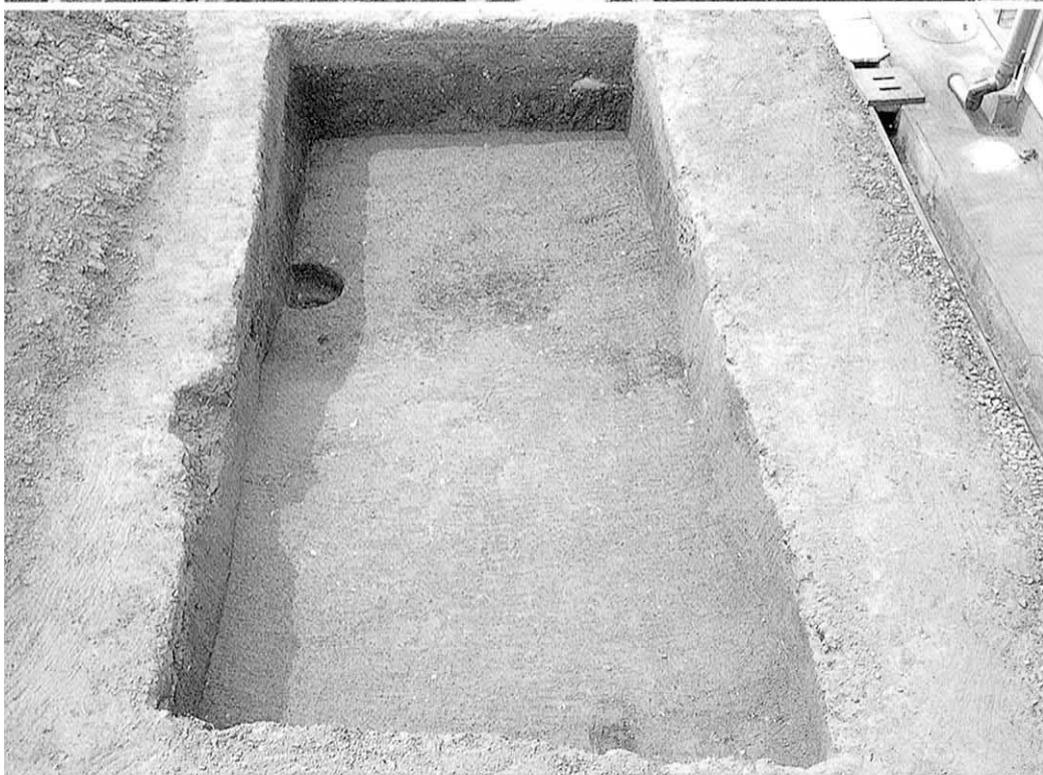
(1) Aトレンチ (東から)



(2) Bトレンチ (南から)



(1) 松ヶ浦地区の位置  
(矢印の交点の付近  
一帯 南上空から)



(2) 第150次調査区全景  
(北から)



(3) 第158次調査土層断面  
(北から)



(1) 第199-1次調査区  
全景（西から）



(2) 調査区南壁土層  
（北から）



(3) 石出土状況  
（西から）



(1) 造成対象地全景  
(北から)



(2) 水路西壁掘削状況  
(北から)



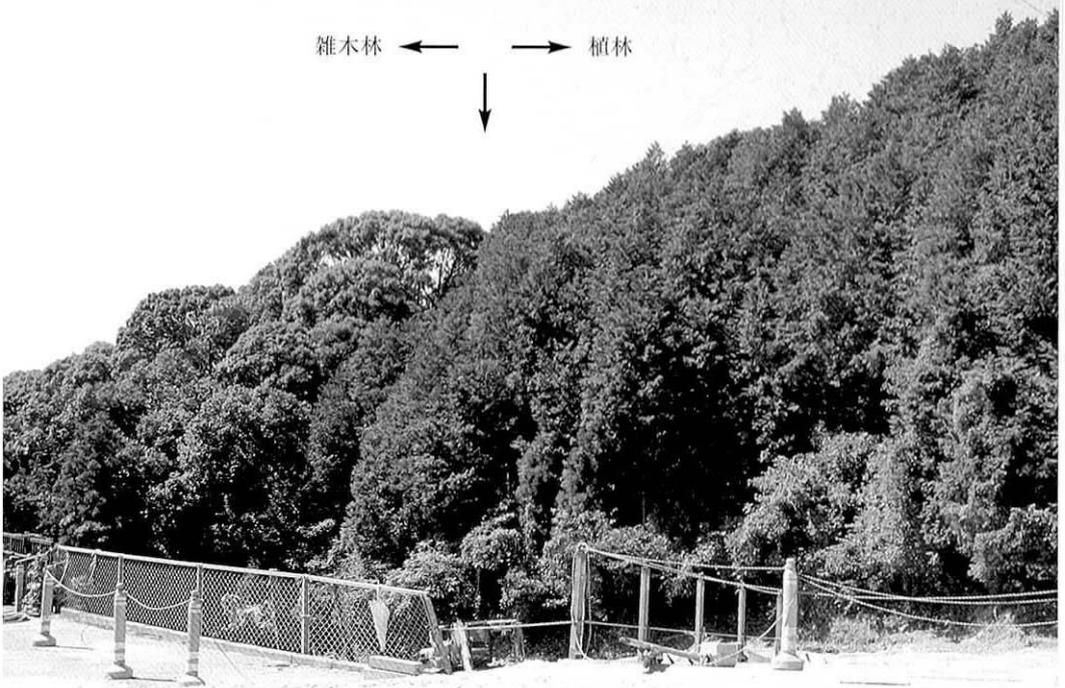
(3) 東側掘削部分土層観察  
(南東から)



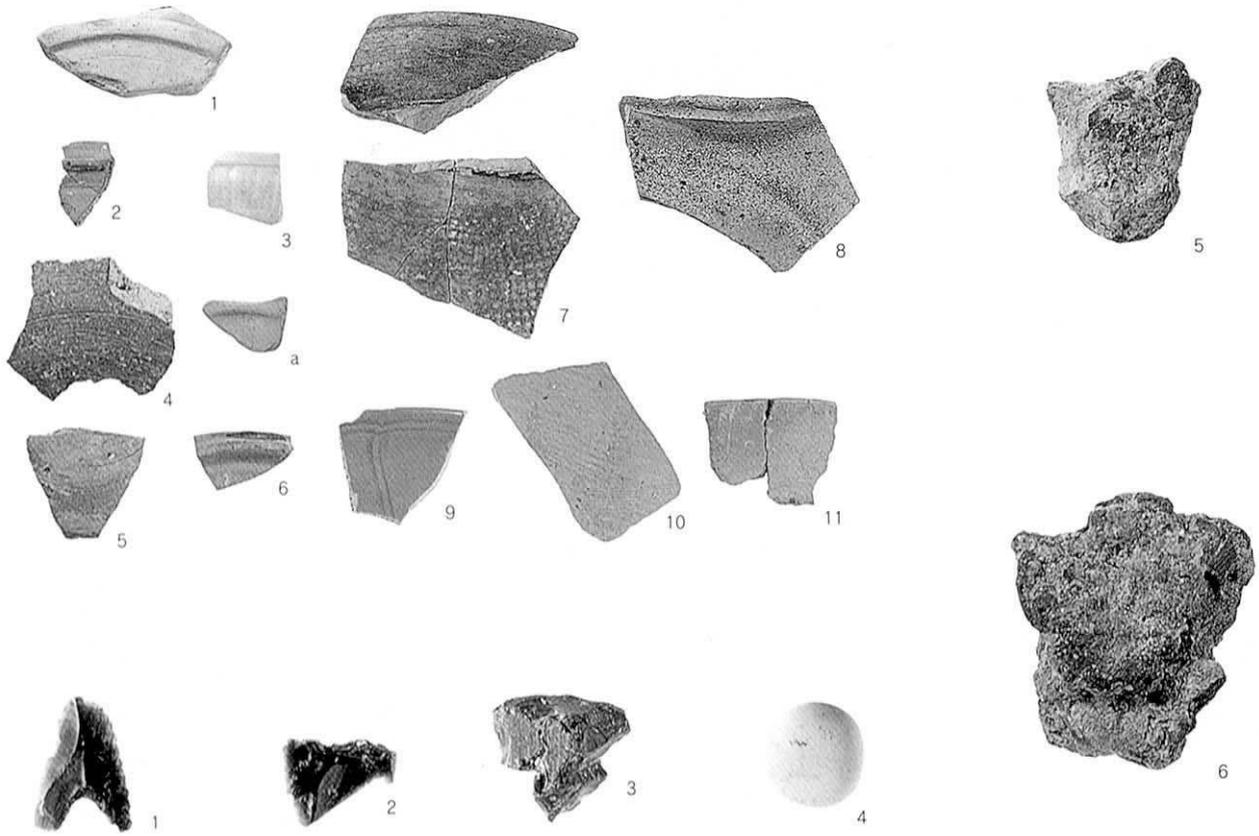
(1) 北西側掘削部分土層観察  
(南東から)



(2) 境内入口掘削部分  
土層観察 (南西から)



(3) 造成対象地西隣尾根  
植生状況 (北東から)



(1) 第136-2次調査出土土器・陶磁器・石製品・鉄滓



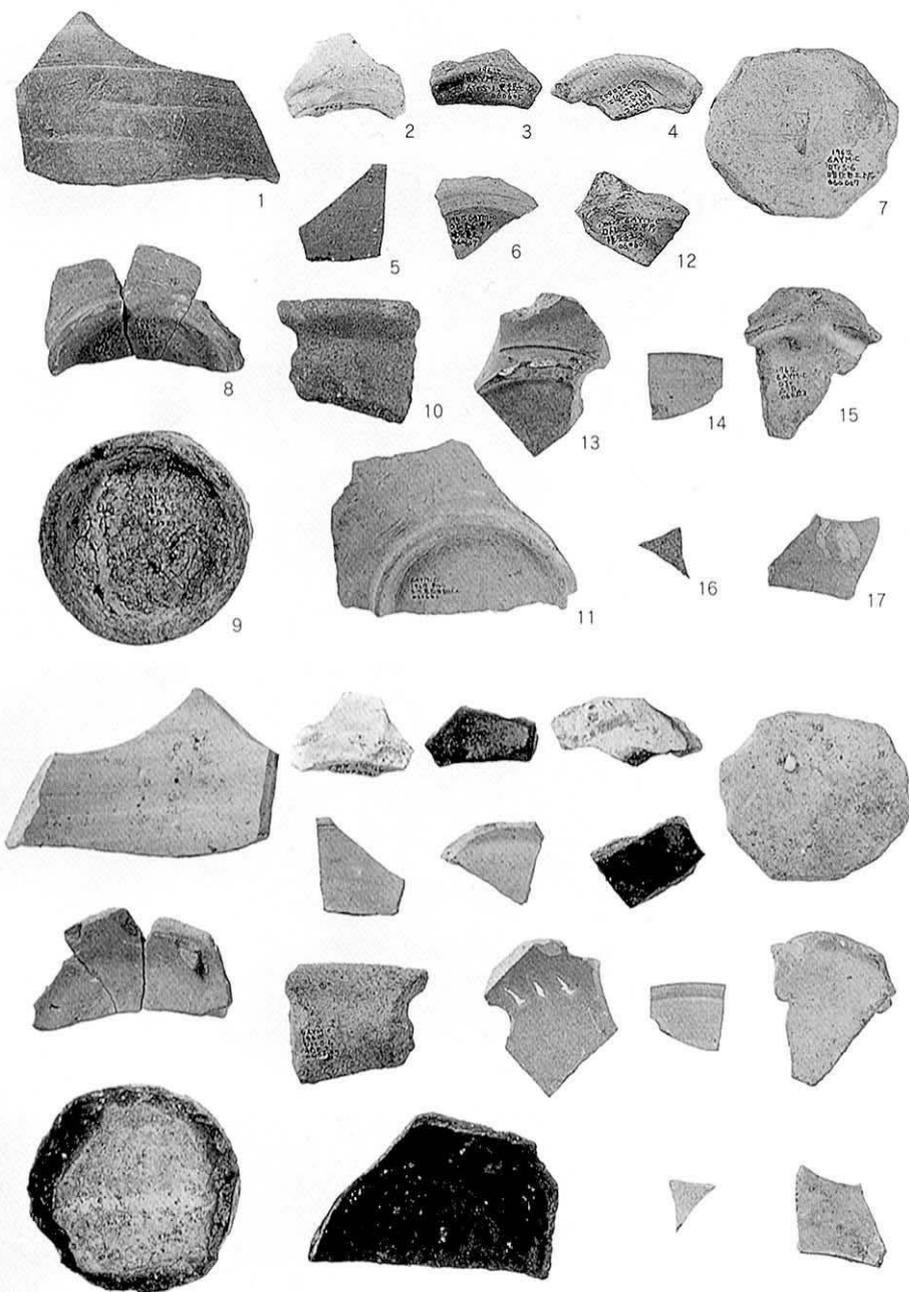
(2) 第136-2次調査S X3937部材 (枕木)



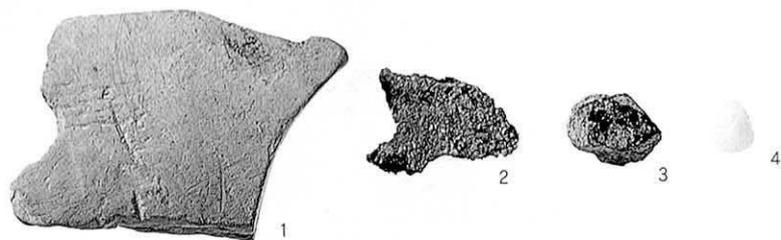
(1) 第136-2次調査S X3937部材 (杭)



(2) 第136-2次調査S X3937下位敷粗朶材・腐植土木片



土器・陶磁器



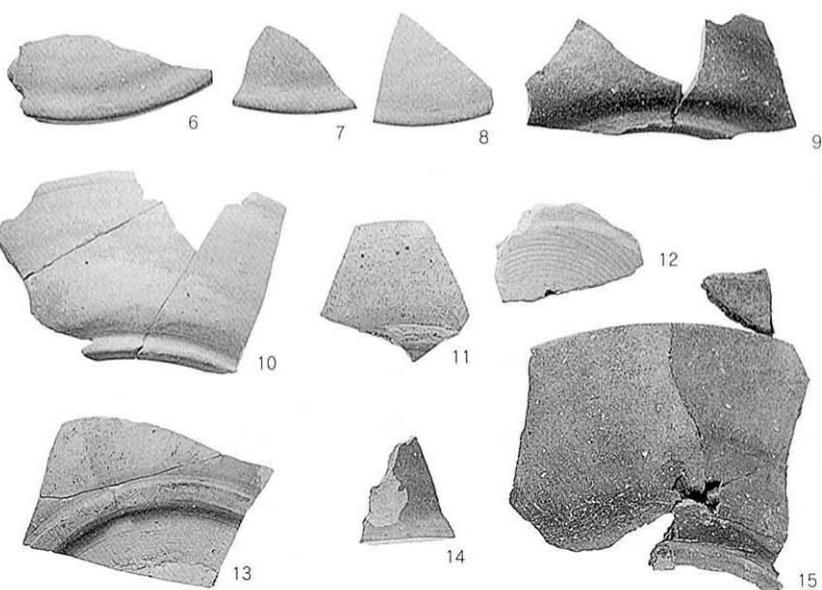
瓦・鉄製品  
石製品・製塩土器



(1) 第86-2次調査  
出土遺物

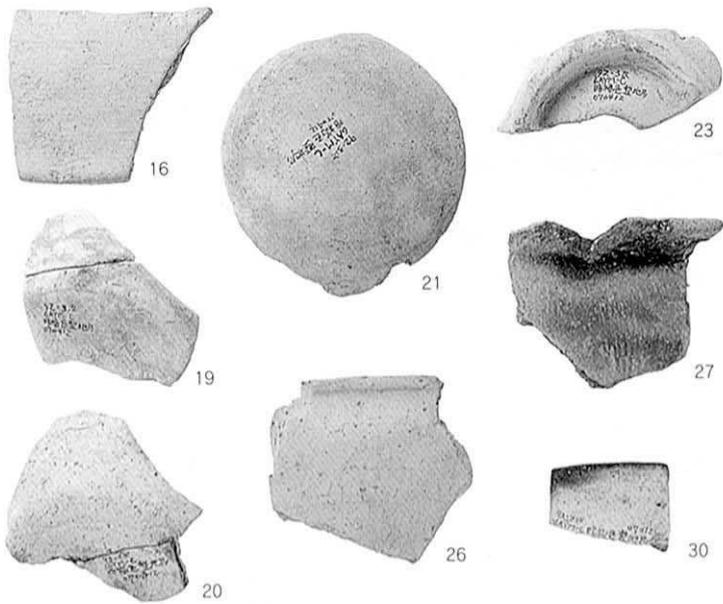


(2) 第92-3次調査  
S A4652  
出土土器

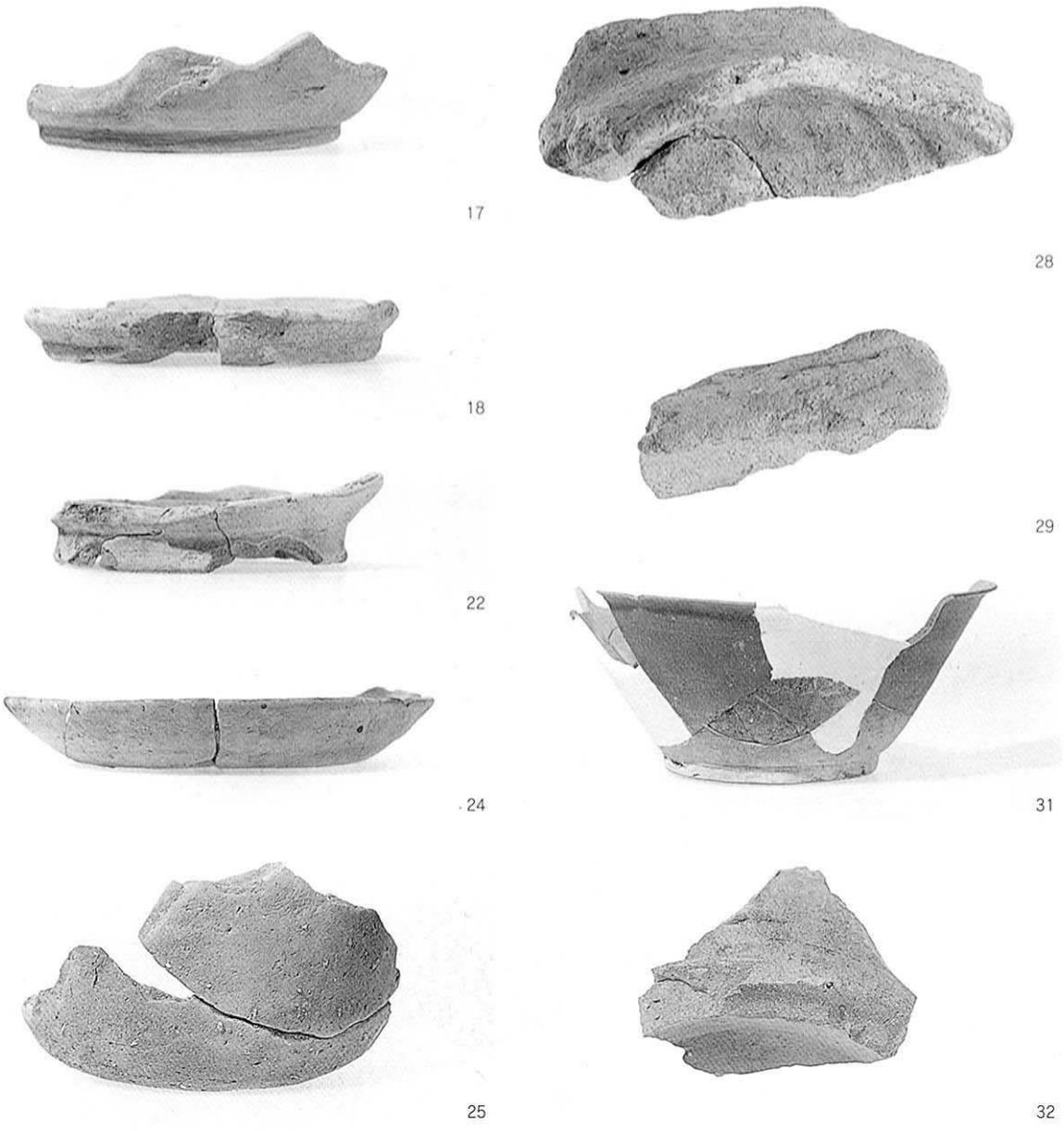


(3) 第92-3次調査  
暗褐色整地層  
出土土器 (1)

須恵器



土師器

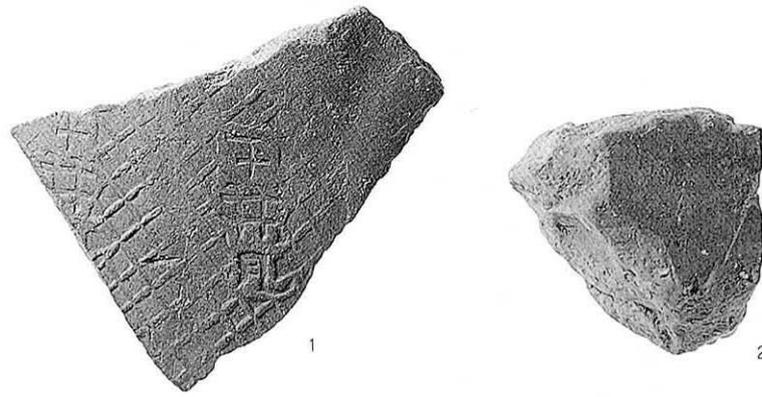


28

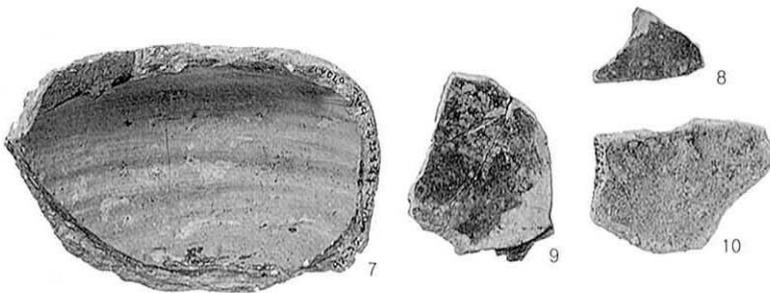
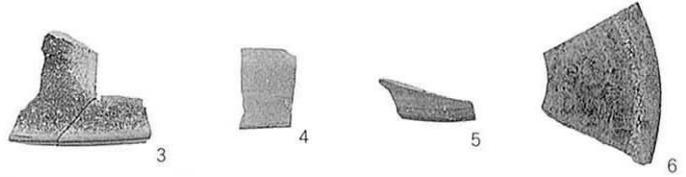
29 カマド

31 越州窯系青磁

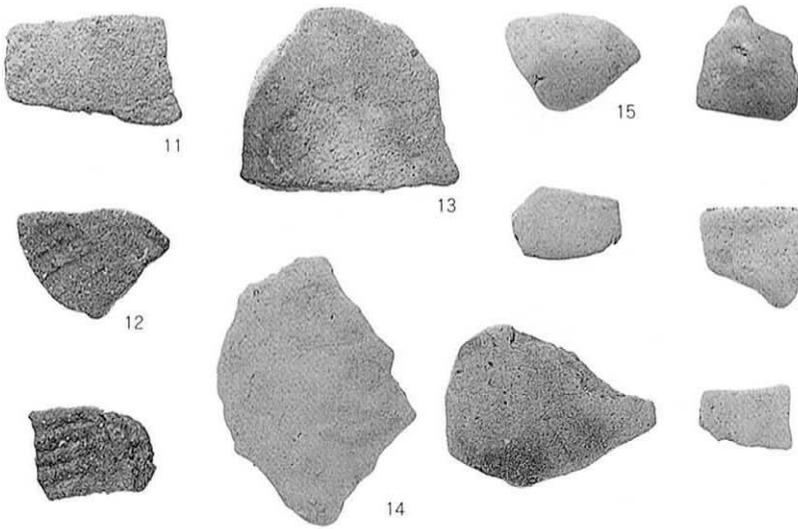
32 灰釉陶器



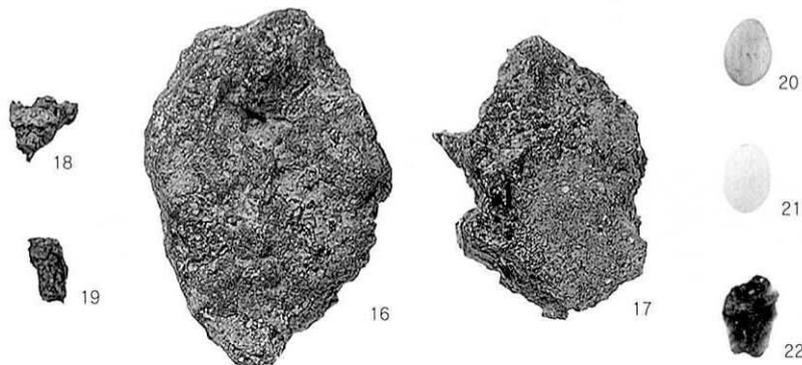
文字瓦・無文埴



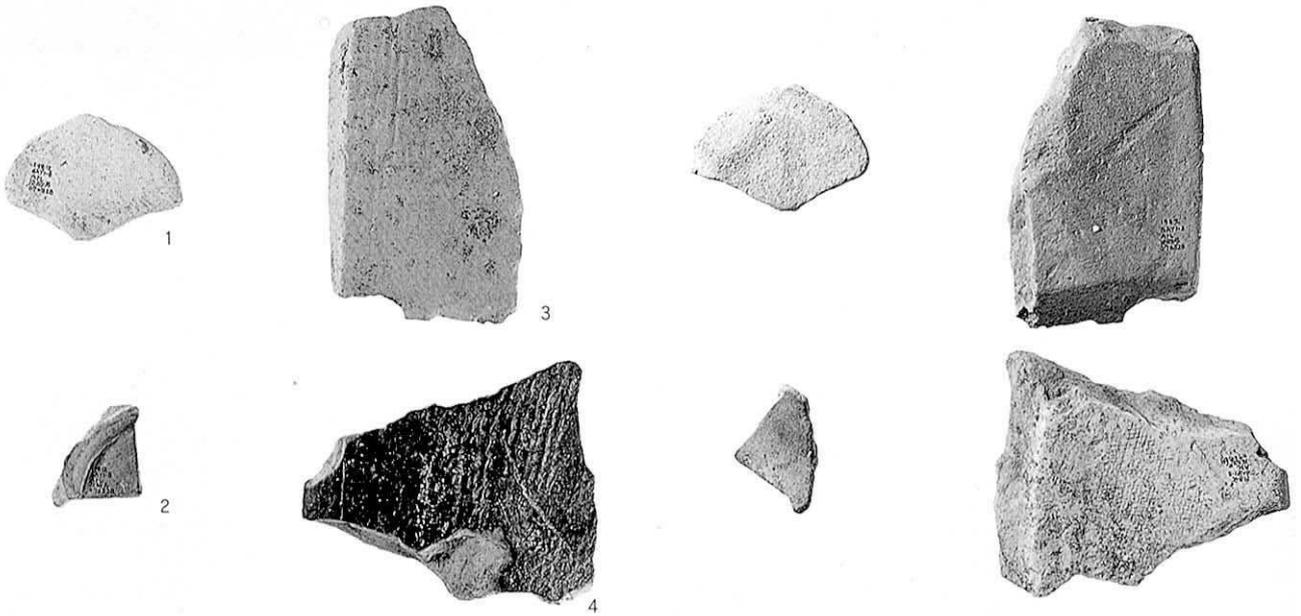
硯・漆付着土器



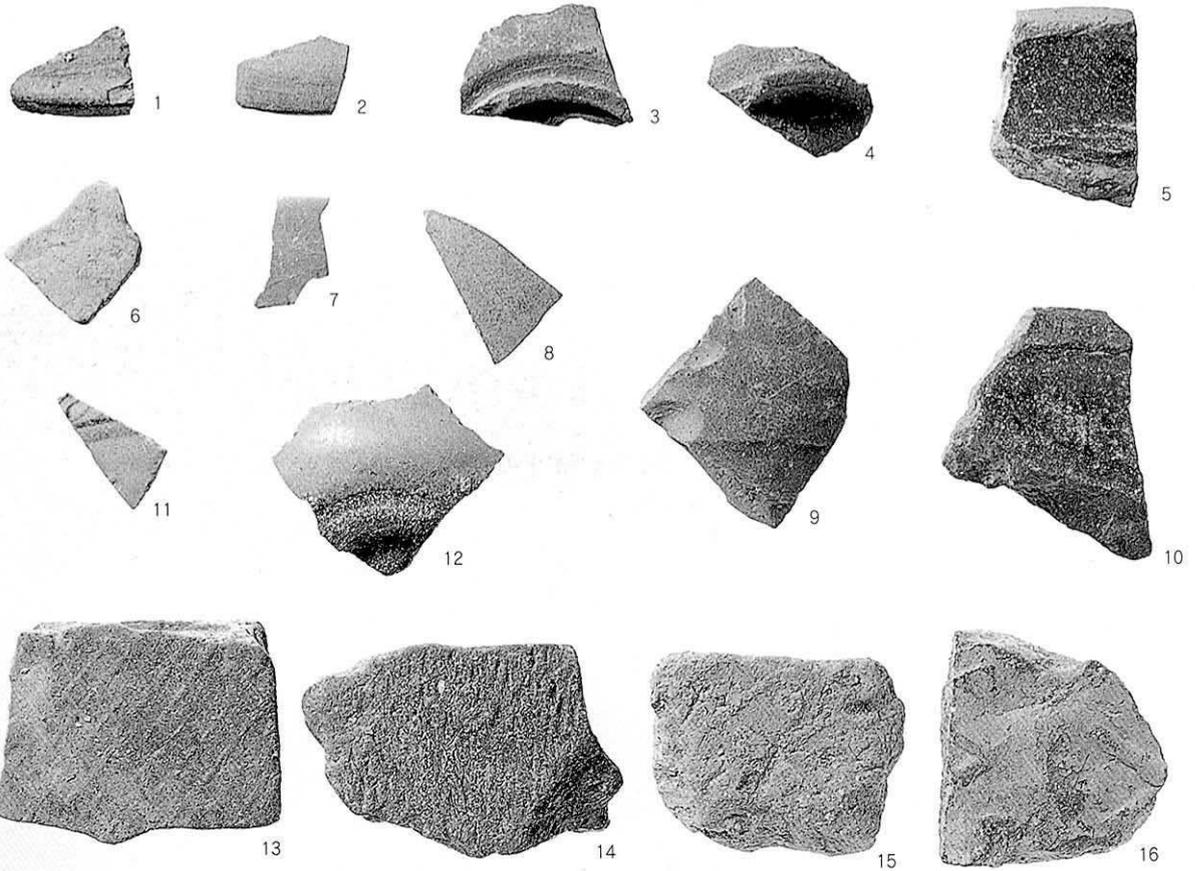
製塩土器



鉄製品・石製品



(1) 第198次調査出土遺物



(2) 第150次調査出土遺物



1(55)

木簡

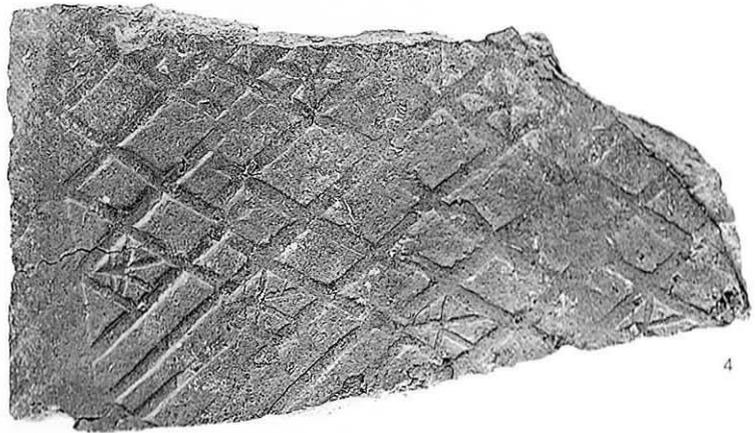


2



3

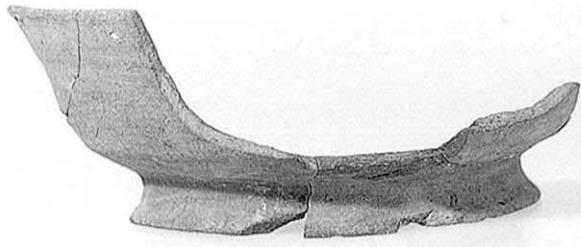
青銅製品



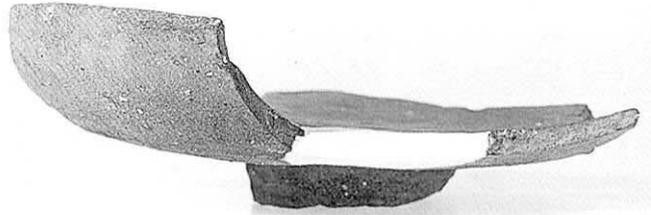
4

文字瓦

觀世音寺出土遺物



2



4



3



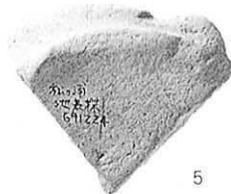
9



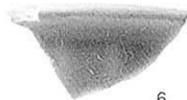
1



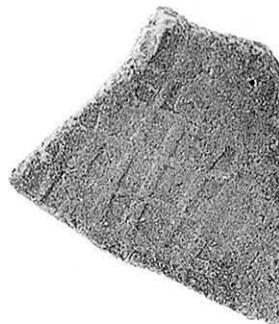
7



5



6



8

松ヶ浦池周辺表採遺物

## 報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	大宰府史跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	V 平成18・19年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	児玉真一・杉原敏之(編集)・小澤佳憲・酒井芳司・岡寺 良・坂本真一・大澤正己・下高大輔・杉山信二							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-1 TEL092-923-0404							
発行年月日	2008年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第136-2次調査	太宰府市観世音寺 2丁目1番12号	40221	210316-136-2	33 30 34	130 31 02	051214~ 060313	210㎡	住宅建設
大宰府史跡 第196次調査	太宰府市観世音寺 2丁目129・130番	40221	210316-196	33 30 32	130 30 53	060605~ 60608	18㎡	住宅建設
大宰府史跡 第197次調査	太宰府市観世音寺 1丁目341・342番	40221	210316-197	33 30 32	130 31 04	61214	9㎡	住宅建設
大宰府史跡 第86-2次調査	太宰府市観世音寺 2丁目24・25番	40221	210316-86-2	33 30 34	130 31 00	070122~ 70309	210㎡	住宅建設
大宰府史跡 第92-3次調査	太宰府市観世音寺 2丁目153番	40221	210316-92-3	33 30 34	130 30 53	070411~ 70420	24㎡	住宅建設
大宰府史跡 第198次調査	太宰府市観世音寺 1丁目279-1番	40221	210316-198	33 30 37	130 31 12	70828	10㎡	住宅建設
大宰府史跡 第150次調査	太宰府市観世音寺 4丁目603-7番	40221	210045-150	33 30 49	130 31 05	930413~ 930416	8㎡	住宅建設
大宰府史跡 第158次調査	太宰府市観世音寺 4丁目603-4番	40221	210045-158	33 30 48	130 31 04	940509~ 940512	13㎡	石垣改築
大宰府史跡 第199次調査	太宰府市観世音寺 4丁目604-1番	40221	210045-199	33 30 50	130 31 05	051104・ 081023・ 081113	100㎡	住宅建設
大野城跡 第46次調査	糟屋郡宇美町大字 四王寺字鮎返り 1115	40341	300117-46	33 32 36	130 31 24	061107~ 61113	4㎡	重要遺構 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大宰府史跡 第136-2次調査	官衙	奈良時代	柵列2条・ 筏状遺構1基	須恵器・土師器・瓦		筏状遺構は政庁Ⅱ期 整地層の地盤補強		
大宰府史跡 第196次調査	官衙	平安時代	柵列1条・溝2条・ 溝状遺構1箇所	須恵器・土師器・ 陶磁器・瓦				
大宰府史跡 第197次調査	官衙							
大宰府史跡 第86-2次調査	官衙	古墳～奈良時代	暗渠施設・竪穴住 居・溝2条・整地	須恵器・土師器				
大宰府史跡 第92-3次調査	官衙	奈良～平安時代	柵列2条・溝3条	須恵器・土師器・ 瓦・漆付着土器・硯				
大宰府史跡 第198次調査	官衙	平安時代		土師器・瓦		古代の遺構は残存 しない		
大宰府史跡 第150次調査	官衙	古代～近世	ピット	須恵器・土師器・ 陶磁器(古代～近世)・ 瓦		古代の遺構は残存 しない		
大宰府史跡 第158次調査	官衙							
大宰府史跡 第199次調査	官衙	平安時代	整地					
大野城跡 第46次調査	山城	飛鳥～奈良時代	石塁・土塁・城門	須恵器・土師器・瓦・ 鉄製品(軸受金具等)		・新たに城門を発見 ・扉軸受金具が出土		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 19	登録番号 0003

## 大宰府史跡発掘調査報告書 V

平成18・19年度

平成20年3月31日

発行 九州歴史資料館  
太宰府市石坂4丁目7番1号

印刷 株式会社 三光  
福岡市博多区山王1丁目14-4